シングフォー族 Singpho

アッサム東北ラキーンプル地方に居住するモンゴロイド部族である。ビルマのカチン族 Kachin のこの地方に住むものをシングフォーといふ。一九三一年、カチン族共、一五六、二五三人を算する。

シングフォーは以前から他地域へ侵入し、他部族を捕へて來て奴隷として使役したが、現在ではこの奴隷の裔はドアーナ Doāna といふ別個の社會を構成し、その數は以前の主人の層の數より多いといふ。部族は父系制の族外婚の氏族に分れ、デュワス Duwās といふ世襲の酋長に治められる。土地は各員のものとされてゐる。

佛教徒が多いが、ドアーナはヒンヅー教を信ずる。精靈崇拜（アニミスト）者も相當認められる。シングフォーは人は生きてゐる間は、その靈は祖先の精靈から分れてゐるが、死ぬと一つになると信じてゐる。また彼等の間には陰莖像崇拜の痕跡がのこつてゐる。死者を葬つた墓の上に圓錐狀の藁葺の蔽びをかけ塚をめぐらす慣習がある。また異常な死に方をした者には特殊の埋葬法をとつてゐる。

楯、鐵砲、弩等を用ひ、相手（敵）を殺したといふしるしに首をとる風習がある。男は膝の下に輪をつけ、女は腰布をまいてゐる。

スヌワール族 Sunuwār, Sonwār

ネパールにおいて農耕に從事するモンゴロイド部族で、マンガル、グールーング、カスの各部族と共にムキアグループを形成する。

スヌワール族は、初め西ネパールのバラ・チャトリ近くのシムンガルから出で、東方に移動してリクコラ河岸のチュブルに至りこゝを本據としたといはれる。從つてリクコラ及びクンティコラはこの部族定著の中心である。

スヌワール族には支族はなく、多數のタール thar 卽ち分族に分れ、分族の名は大部分—チャ (-cha) に了る。これは梵語のジャ ja（から生れた）の轉訛である。例へば、ジェスプチャ分族 Jespucha はジェスプ Jespu（木の名）から生れた分族の意である。

原則上、族內婚の集團ではあるが、マンガル、グールーング族との通婚は默認されてゐる。通婚の結婚式は公には行はれないけれども、その間の子供はスヌワールの一人とされる。ただ、第一代の間は、純血スヌワールは、彼等から米やダール dāl（豌豆類）を受取ることは出來ない。

ジレル分族 Jirel はスヌワール族の成員とムキア・グループに屬さぬ部族との混婚から生じた混血分族であるが、純血スヌワールは彼等と通婚しない。といつてジレル族は族內婚でなく混血スヌワールや、ムキア及びキランティ・グループ以外の部族と通婚する。

スヌワールの娘は成人後、自ら選んだ男と結婚する。婚前の性的交渉は、姙娠した場合直ぐ樣結婚するといふ諒解のもとに、一般に默認される。一方幼兒婚もヒンヅー教の影響により富裕な家族の間に行はれてゐる。多妻婚認められ最初の妻に子供のない場合第二妻をもつことも妥當とせられるが、第一妻の姉妹が第二妻となる事例は珍らしくない。結婚式は大體ヒンヅーの儀式をかり、花嫁の額と髮の分れ目に朱を塗るのが主要部分である。寡婦の再婚も許されてゐる。その際一定の儀式等行はず、世間が男の妻と認めるだけであるが、その子供は正子とされ、社會的地位も正規の儀式をふんで結婚した婦人の子供に劣ることはない。唯、亡夫に弟ある場合（既

婚、未婚に拘らず)、彼は義姉に對し先取權をもつのであつて、彼が權利の行使について決定する前に、彼女は他の男と一緒になることは出來ない。離婚は姦通その他妻の不身持の理由ある場合許可される。

スヌワール族はヒンヅー教を信じてゐるが、今日尙早期の精靈崇拜の痕跡をとゞめる。シヴァ神に米、花、白檀、朱を供へ、病氣や心配事があるとカーリ神に山羊を供犧する。またビム・セン神 Bhim sen を拜む。川や溪流或はネパールから眺められるヒマラヤの主峰に米、花、シタル・パティ Sital-patti の葉を供へる。部族の小神の宗教的行事にはラクシュミ神 Lakshmi の名の下に牝牛を崇拜する。

死體は土葬に付し、マンガル族と同樣な葬儀を行ふ。富裕な家ではヒンヅー流に火葬に付する。

スヌワールの生業は、もと狩獵であつた。現在尙これに從事するものは少くないが、大部分農耕と牧畜に從ふ。

タール族 Tharu

ビハール及び上部印度殊にコシ河からサールダに至るヒマーラヤ山麓にそふて分布するドラヴィデアン乃至コラリアン系部族で、幾分モンゴロイド型を交へ外貌からみても、全くの未開部族である。一九三一年、六九、四〇三人を算する。その由來について諸說があるが、リズレーは、當初彼等はガンジス河岸にすんでゐたが、アーリアン族の侵入に壓迫せられヒマラヤ山麓の森林に追ひこまれ、こゝでネパール人と接觸、斜眼顴骨高大のモンゴロイド型を加へるに至つたと述べてゐる。

ビハール及びネパールにおいてはラウタール Rautar 以下多數の支族があり、それらは多くの族外婚の氏族に分れる。ラウタール支族はラージプウト族の裔と自稱するが、おそらく自族の社會的評價を高めんための作爲と

みられる。

幼兒婚及び成人婚共行はる。チトワニデー支族 Chitwania の間では、婚前の性交は許されてゐる。花嫁料の額は九ルピー程度であるが、家の事情の如何にもよる。結婚式はヒンヅーの下級カースト間に行はれてゐるのを眞似てゐる。ネパールのタールの結婚式には掠奪結婚の微かな痕跡が殘つてゐるといはれるが、ビハールのタールには認められない。式にはブラーマンが司祭者の役をつとめ、花嫁の義兄弟はこの行事で重要な役目をする。

多妻婚は認められるけれども、妻の數について明白な規則はない。また寡婦の再婚も許され、第二夫の選擇には特別の制約に從ふ必要はない。寡婦や離婚した女は特別の儀式により再婚出來る。

タールの宗教は、精靈崇拜、自然崇拜とヒンヅー的要素の複合といはれる。部族の開祖たる英雄ラクシャ Rakcha が神化され、リケスワル神 Rikheswar として主神の地位にある。彼等はラクシャの靈は彼等の間にうろつきまはつてゐると信じてゐる。この神は遠方に旅立つ人の守護神として、旅に出る時に種々の供物をさゝげその靈を和げる。自然崇拜の面影としては、酒醉の神マハデオ Mahadeo と手の守護神ダルチャンディ Dharchandi があるが、この二神の社祠は土塚である。更に人の生死を支配し、宇宙の至上力と彼等が仰いでゐるのはカーリカー神 Kalika である。この神は醫術士にとつてその技術の保護女神である許りでなく、女には分娩の女神でもあり、子寶にめぐまれぬ女に崇拜される。部族全體は結集して定期の招神祭を行ふが、舞踊、饗宴、そして飮酒の底拔け騷ぎになるのが常である。タールは、この神の祭壇に大仕掛の動物供犧をする。每日水牛二十頭、山羊二百五十頭、豚二百五十頭をさゝげ、これが十日間もつゞくといふ。

ヒンヅー教はタール族の往時の神々を追放してゐるといふが、原始的信仰の原理は、惡靈に對する强い畏怖と

して現在尙殘存してゐる。彼等は惡靈はたへず自分達につきまとひ熱・咳・頭痛・狂氣・惡夢・痩・赤痢・失神その他凡ゆる種類の苦痛の源となつてゐると信じてゐる。そして自然的な疾病・自然的死を信じない。醫術士或は魔術師はバラル Baral といはれ、その力は畏るべきものとされる。彼等は無數の手先の靈鬼を自由に驅使して、患者の身體から惡鬼を追ひ拂ふのみでなく、敵の身體に有害な靈鬼を追ひこんで、彼を苦しめたり死なせたりすることも出來ると信じてゐる。

タールは、以前、死體を土葬に付したが、現在はコレラ、疱瘡で死んだものを除き、ヒンヅーの火葬の儀式が行はれるやうになつた。骨灰は最寄りの川にふりまくのが普通である。

タール族はヒンヅーのカースト外におかれる。この部族が放浪の慣習を有し、ヒンヅー社會との接觸がないためである。ネスフィールド C. Nesfield は、タール族は怠惰なため勤勞をいとひ耐忍性を要する畑作の仕事など出來ないので、チャマールやコーリー族のやうな下級カースト並にみられ作男、農奴として甘んじてゐるのだと言つてゐる。事實、彼等は燒畑耕作の段階にある。女は播種、草取、取入の大部を行ひ、男は狩獵、漁撈に從事し、これが男女にとつて適當な仕事と考へてゐる。彼等はまた葉、纖維、葦の手細工、粗笨な木工が出來る。

ダフラ族 Daphla

アッサム州東北山地にみられるモンゴロイド部族でチベット・ビルマ語族である。ミリ族居住地域の西方に住む。

族外婚の數氏族に分れる。

政治的には極端に民主々義的である。月と太陽から降つたと稱する奴隷を有する。勇敢な侵略者として名あり、往時アホーム王國を惱ましたが、その後においても時折騷擾を起し英軍の討伐を受けた。

死體は土葬に付するが、死者の靈魂は自然な死に方の場合は地下へ行くが、不自然な死に方の場合は天に昇ると信じてゐる。

ダフラは文化の點では極めて原始的である。武器として籐兜、隱れ鎧、長劍、槍、鮮血を塗つた毒矢を使用する。

一般に雜段耕作を營んでゐる。

ダルド族 Dard

インダス河上流からオクスス分水嶺及びキルギト河にいたる地方に居住するインド・アーリアン部族である。この民族について、古くはローマの博物學者プリニウス及び地理學者トレミイも述べてゐる。パンジャブ平原からインダス河を溯り、現住地方に至つたものとされてゐる。紅頬、褐色の眼、黑又は褐色の毛髮をもつてゐる。頑丈なよく均衡のとれた體軀である。山登りに巧みで、力强い運搬者である。性、自由を愛し極めて率直である。

アーリヤ語系であるけれども、インド・アーリアン語でもイラン語でもない獨特のダルド語を用ひてゐる。

タンタ・プラヤン族 Thanta Pilayan

トラヴンコールのシェルタラ稅區の海岸地方に住んでゐる。長頭、廣鼻、皮膚は暗色、眉毛が突出し、前頭部は後退してをり、原オーストラロイドの特徴を具へるといはれる。一九三一年、七九五人を算する。

娘の幼時に婚約、成人後結婚式を行ふ。多妻婚も男の經濟的能力の如何により許される。寡婦の再婚は許されてゐる。遺産は甥に相續される。

彼等は太陽を朝晩禮拜し、また蛇を拜む。

女が働いて夫に食物を供給する慣習である。

ダンワール族 Dhanwar

チョタ・ナグプールの近くビラースプルの山地在に住む未開部族で、ダーンワールはダヌハール Dhanuhār（弓人）から來てゐるといはれてゐる如く、部族の大半は二十世紀の初頭迄弓矢をもち狩獵に從事してゐた。ゴーンド族、カワール族の何れか或は兩者の混合により派生した部族といはれる。

多數の夫々トーテムをもち動植物の名を有する族外婚の氏族に分れてゐる。その數五十位であるが、中二十はカワール族の氏族名である。同一氏族内及び實の從姉妹兄弟間の結婚は禁ぜられてゐる。

ダンワールの娘は年頃に達してから一、二年後に結婚せねばならない。息子のためにその父親は適當の娘を物色し、友人を使として申込むが、娘の親は承諾の場合は饗宴をする。婚約の時にはパルダーン Phaldān（果實の贈與）といつて、通常の贈物等を交換する。結婚に先だちバロキイ Barokhi（見合ひ）の儀式を行ひ相互に見あふのであるが、その際銅指輪を交換しお互の指にはめてやる。また花婿は大地に朱を供へ、それから花嫁の額にそれをこする。結婚の日取をきめてから、花嫁料として六ルピーと着物一枚を彼女の父親に納める。結婚式は地方ヒンヅー教徒の慣習にもとづいて行はれ、これまた頗る趣きのあるものである。花婿の家の女連は、新郎新婦のゐない間、村の人達と結婚小舍で歌をうたひ饗宴を行ふ。寡婦の再婚を許すけれども、一般に眞の結婚とは考へない。

子供が生れると、母親は、三日目に煎じ藥を與へられる他五日目まで何も食べることは出來ない。六日目になると一家の不淨が祓はれたといふ。しかし母親は、女子が生れた時は二ケ月、男子の場合は三ケ月の間、食物の調理は出來ない。死體は土葬に付する。古い布片につゝみ、裏返しにした寢臺にのせて墓場に運んでから、鬱金と水で死體を洗ひ新衣に着かへさせ穴の中におく。擔夫は「これがお前の最後の結婚だ（大地との結婚の意）」といふ意味のことを言ひながら墓穴の周りを七度廻る。親族の男子、死者の友人は墓穴の死體を成るべくみないやうに、手だけで穴を埋めるが、夫々五掴みだけの土を投げ入れ、他の人々は土の表面をふみ固めて埋葬を了る。遺族は、死後三日間は自ら調理せず、友人知己の拵へたものを食べる。

ダンワールの主神は農の神タークル・デオ Thākur Deo 及び家と竈の神ドゥーラ・デオ Dūlha Deo である。彼等はまた呪術、魔法を深く信ずる。子供の名は、生後六日目につけるが、兩親は物知りに誰か死んだ緣者の靈がその子の中に生れかはつてゐないかどうかをたづね、生れかはつてゐる場合は、それと同じ名をつける。又性別は輪廻の間に變化するのでないかといふので、男の子には親族の女の名を、女の子には同樣男の名をつける。女は婚前或は婚後兩親の家で文身する。文身の痕は死後靈魂にのこるもので、神の前に出る時見せるべきものと信じてゐる。

ダンワールは狩獵を適業と考へてゐるやうであるが、大抵、農耕者、勞働者として働く。また竹製莚類や大きな穀物籃等を作る。女は沙羅雙樹の葉を集め葉パイプを作つて賣つてゐる。

彼等は本來の言語を失ひ、チャッティスガル・ヒンドゥスターニの轉訛語を用ひてゐる。

チェロ族

チョタ・ナグプールの封建土侯領に居住するムンダー族系の未開部族である。一九三一年一七、九〇六人を算する。チェロは一時ビハールの支配者であつたといはれ、多くの記念物が見出される。シャーハーバードでは古い記念物の大部分はチェロのもので、その附近は一般にチェロの支配下にあつたと報告されてゐるが、十四、五世紀頃サワル族等により追ひ出された。しかし、サワルとチェロには、ブラーマンからムレッチャ Mleccha として不淨視されて來た。

チェンチュ族 Chenchu, Chentsu

南印クルノール及びネロールの山地に住むテルグー語を用ひるドラヴィデアン部族で、ヤーナーディ族とその起源を同じくするといはれる、皮膚暗色、長髪、廣鼻、逗身の密林部族の特徴を具備してゐる。一九三一年、一〇、三四二人を算する。

チェンチュ族は、動植物、家、金貨其他の名をもつ若干の族外婚の氏族に分れる。ヤーナーディ族とも通婚する。

結婚式については、一定の慣習はない。一般に結婚式は次の三方式の何れかにもとづいて行はれる。

一、結婚したいと思ふ男子は、相手を選び合意の上一夜グーデム gudem（聚落）から共に身をかくす。翌朝歸宅してから、兩親は友人、親族を招き、形式的に新しい衣服を與へて正規の結婚をした旨宣言、列席者に御馳走する。

二、きれいに片付けた小圓形の地面に牛糞を塗りつけ、中央に弓矢を結んで立て花婿花嫁がその周りをまわり、集つたものは祝福して二人に米を投げつけて式を了る。

三、ブラーマンを招いて吉日を定め、高座をつくり當日二人がそこに着席、結婚の表徴たるターリ tali を結び、集會者達が米を二人に投げつけ式を了る。ブラーマンには、掛りの者をおいてもてなし、一枚の衣服と金員の御禮をする。

寡婦の再婚は許されるが、相手は多くの場合亡夫の兄弟である。

死體は棒に布片をつけてつくつた擔荷にのせて埋葬場へ運び、墓穴に橫へた後葉のついた木の枝を以て穴の一杯になるまで蔽ひかくす。そして土をかけて一定の形にもりあげその上に石を積み上げる。

チェンチュは、チェンチュ・デーヴタ Chenchu Dēvata と稱する神を崇め、時折蜜や果物を供へる。彼等はオーバレースドゥ神（一名ナラシムハ神）Obalesudu, Narasimha of Ahōbilam は、美しいチェンチュ娘を掻つさらひ結婚したとなし、族内の他の女達にも同樣の運命とならないやうにと、チェンチュ娘は將來醜女として女の魅力を缺いて生れる定めになつてゐると信じてゐる。從つて、オーバレースドゥ神を自分達の義兄弟となし、年祭には寺院に詣で、この男女二神に衣服を奉獻する。

チェンチュは往時極めて原始的生活を營んでゐたことは十七世紀末頃の記錄に「頭に木の葉を冠り、弓矢をたばさみ、木々の小暗い枝の下の洞窟内に生活し、金銀をもらつても値打をしらない云々」とあることによつて明らかである。木の根、蜜、野生の果實の採集、狩獵、そして時には盜匪或ひは追剝をなして生活して來たといはれる。以前は獲物を探すため森林に放火するのを何とも思はなかつた。其の後、森林保安の見地から彼等の採取量も制限されてゐる。彼等の採取し、物々交換して生活の資を得てゐるものは、蜂蜜、蠟、鹿の角、獸皮、羅望子、森林檎（マルメロの一種）、モウラ（力草の一種）の實、花等である。官憲に道路巡守として雇はれるものもある。

チェンチュ族は、その性質本來無邪氣で惡氣はないが、なまけ者の上に酒好きといはれる。饗宴には棕櫚酒がつきもので幼兒もその分前に與り、棕櫚酒のない時はマファ樹の花の實から禁制の酒をつくる。また彼等は骨をしやぶり、肉をさいて野獸のやうな食べ方をする。

チトラーリ族 Chitrali

西北國境州の北端チトラーリに居住する部族で、ガルチャ族に屬する。ホー族 Kho ともいふ。世襲のメータル Mehtar といふ專制的支配者を上に戴いてゐる。

多數の支族に分れてゐるが、中アダムザーダア Adamzadah はインド・アーリアンの身體的特徵を著しく示し、この部族の支配的地位を占めてゐる。

スンニー派回教を信奉し、たゞマウライ支族 Maulai はアガ・ハーンのイスマエル派回教の一派に屬する。

チトラーリは一般に生活貧窮し、その性質はパターン族に比べ怯懦・因循といはれる。

チャクマー族 Chakmā

チッタゴング山地々帶のブラーマプトラ河岸に沿ふてみられるモンゴロイド部族である。その由來について傳承は、馬來半島から來たとする說、アラカン王を攻めるため派遣されて來たモグール軍隊の裔とする說等種々あるが、大體アラカンに起つた部族とするのが至當のやうである。身體的には、ある程度ベンゴール人と混血してゐる。一九三一年、一三五、五〇八人を算する。

チャクマー族はチャクマー、ドイングナク Doingnak トゥングジャイニヤ Tungjainiya の三支族に分る。支族の下には多數の族内婚のマウザ Mauza（一定の境域で首長を置いてある）がある。

外來者で部族に入りたいものは、僧侶の家で七日間を過し、部族に饗宴等を行ふと編入を許される。幼兒婚についてはあまり知られてゐない。大體男子は二十四、五歳にならねば結婚しないし、その年頃になつて結婚しない男は少ないといふ。寡婦の再婚は許され、亡夫の弟と結婚することになるが、必ずしもさうせねばならぬといふ程ではない。式は簡單で饗宴が主である。

富裕な人の服裝はベンゴール風であるが、貧乏人は襤褸をつけ一本の帶を結んでゐるにすぎない。女達は一枚の長い暗青色のスカートを踝の所まで垂らし、赤い廣いバンドをつけてゐる。娘は年頃になるまで上半身露き出しである。ベンゴール風な裝身具で鼻や耳を飾り、踝に銀製の輪をつけ首に銀帶を卷いてゐる。

チャクマーの宗教として佛教が採用されてゐるが、回教・ヒンヅー教の影響をもうけてゐる。しかしこれらの

根底は精靈崇拜の信仰が依然殘存してゐる。小さい壇を作つて精靈に供へ物をしたり、虎の齒や小川等に向つて誓約したりする。

農耕の方法はマグ族と同樣である。ベンゴーリ語を用ひる。

デーワル族 Dehwar, Dehkan

バルチスタンのカラト、マストゥング其他諸地方に居住するトルコ・イラニア型部族である。イラス族系であつて、大抵農奴として使役されてゐる。回教を信じてゐる。

イラン語の變形デーワリ語を用ふ。

ティペラ族 Tipperah, Tripra, Mrung

ティペラ山地及びチッタゴング山地々帶にみられるモンゴロイド部族である。一九三一年、二〇三、〇六九人を算する。ティペラ族の成員は自族を呼ぶ名稱をもたず、自分達のことをいふ場合は、自ら屬する分族の名をいふ。おそらくティペラといふ言葉は外部の者がティペラ山地からとつて部族を呼んだことから出たと思はれる。偏平な顏、厚唇で外貌は蒙古族的特性が强く表れてゐる。身長はベンゴール人と相似た程度であるが、身體つきはより筋肉的で强靱で色は白い。アラカンのムルング族と同視するものもある。

ティペラ族は多數の族外婚の分族より成る。分族の名の中カークル Kaikuli は、一種の瓢箪である。リアーング分族 Riang は輸夫を生業とし、他の分族に輕蔑されてゐるけれども、その間の通婚は行つてゐるやうである。

ティペラ族は自族中に、ルシェーイ、マグ、ヒンヅー教徒の入るのを拒まない。入會の儀式は唯新入者が饗宴するだけである。

成人婚が普通である。婚前の性交は自由であるが、ティペラの娘はへまなことをやらないといはれる。姙娠した娘は、その相手と結婚することになつてゐるので私生兒等といふものもない。また娘達もヒンヅー婦人にみられる過度の羞恥心を免れてゐる。

結婚には特別の儀式ととてなく、唯矢鱈に飮みそして踊るだけである。その夜、花婿は忍んで花嫁の家に入り、共に寢み曉方またこつそり彼女の許を去ることになつてゐる。離婚は村の長老の審査の結果許される。

ティペラ族の宗教は、卑俗化したヒンヅー教である。カーリの神像はないけれども、供犧のために粘土の丸い塊でこれを表してゐる。この塊の緣には四點或は四脚が出てゐて、上から見ると四腕のある海膽に似てゐる。黑山羊、米、檳榔樹の實等を供へる。またサティア・ナーラーヤム Satya-Narayan を崇拜し、これに果實と花を供へる。

ティペラ族はブラーマンを雇はぬけれども、アーウチャーイ Auchai といふ部族自體の司祭者といふより、むしろ呪術師がをり祭祀のことを掌る。その役目は世襲である。

人が死ぬと死體を戶外に移し、その足許で鷄を殺し、米と共にそなへる。水際で火葬にする。彼等は、生地から離れたところで亡くなつた死者の精靈が家に迷はず歸れるやうにと、途中の小川その他の流れに白い絲を渡して目印をつくる。

ティペラの男は厚いターバンをつけ、ホームスパンの白色の狹い布片を腰部と脚部のまわりにまとふ。寒い季

節には短衣をきる。そして銀の耳輪をつけてゐる。女は黒色と灰色のスカートを着用してゐる。婚前は赤色或は褐色の布で胸をかくす。また頭を蔽はず、男のやうに耳輪をつける他、耳朶をひろげる。兩性共長い黒色且つ豐富な頭髪を貯へ、頭の背後に結ぶ。

トーダ族 Tōda

南印ニールギリ山地に居住する徹底的牧者部族である。一九三一年、五四七人を算する。生活慣習並に身體的特徴において注意すべきものがある。身長は、中背以上、よく均齊とれ筋骨たくましく、長頭、鼻は眞直ぐで高く、とゝのつた顏で、齒が非常に立派である。殊に毛髪は黒く、男は濃い髯や豐かな體毛を有してゐる。女は男子より皮膚の色は明るく、美しい。

トーダ族の住んでゐる處は、マド或はマンド Mad, Mand（村落或は聚落）といはれる。各聚落は五軒の小家乃至建物から成つてをり、その中三軒は住居、一軒は酪農場、他の一軒は犢小屋である。彼等は多數の水牛を飼育し、その富は所有する水牛の數によつて判斷される。牧者生活を送るものが多く、また森の見張りや入植者の農園に雇はれるものもある。しかし概して働くのをいやがり、土地を耕すのを威嚴を下げるものと考へてゐるといふ。

トーダ族は、タルタロル Tartharol 及びテイヴァリオル Teivaliol といふ族内婚の二部族に分れてゐるが、これは更に若干の族外婚的氏族に分れてゐる。その政治組織にもとづいてゐるが、その中最も重要なのはナイム Naim と稱する會議である。この會議でトーダ族全體に關する問題が決定される。議員數は五人で最上級氏族のペイキ Peiki 以下各氏族から選出される。部落全體のナイム會議の他に、氏族だけの小ナイム會議も行はれる。

トーダの間には、往時から多夫婚が行はれて來た。その根底には、女兒殺しから來る女子不足が原因として存在するが（女兒殺しは經濟生活の困難と、女子を多數擁することにもとづく他の外族との衝突を忌避するに原因するといはれる）、近來女兒殺しの風習が減少し、兩性の人口が正常の割合に近づくにつれて、二女對五男といふやうに集團婚★的傾向を生じてゐるといふ。トーダの多夫婚は、一女對數人の兄弟といふやうなもので、兄の結婚後に生れた弟にさへその權利があるといはれる。妻が姙娠すると夫の中の最年長者が弓矢の儀式を行ひ法律上の父とされるが、他の夫達もやはりその子の父親とされる。兄弟でない數人の男と結婚した場合は、女は一ケ月間位宛順番に男と同棲する。

彼等の最も尊崇する神は、天地創造神のカダヴル Kadavul で、朝夕禮拜する。また狩獵神ベタカン Betakan は神も、今日の自分達と同樣な生活を行つてゐると信じてゐる。即ち神も酪農場で牛の乳を搾つてゐるとなし酪農場を神聖な場所と考へてゐる。

トーダ族の毛の濃いのは餘り牛乳を飲むからといはれてゐる。男は大抵右腕に扶の大きくなつたやうな形の瘢痕をつけてゐる。これは、灼熱した聖火棒で皮膚を燒いてつくつたもので、斯うすると極めて容易く水牛から乳を搾ることが出來るし、又その疲勞を醫すことが出來ると信じてゐる。男は十二歲の牛乳を搾れる頃つけられる。女は最切の姙娠の十五月目の新月の日に、油にひたして火をつけたボロ切れで、左右の親指及び手首の掌骨

關節に點形の瘢痕をつける。男女共プトクーリ putkuli といふ青と赤の線の入つた白いマントで身を蔽つてゐる。このマントには、時折トーダ女の刺繍したものも見受けられる。また彼等は腐つた牛酪を身體やマントにふりかけるので、その香がする。

トーダの女は年頃になると文身する。彼女の中には、艶ある黒髪、晴れやかに輝きある眼をした非常な美人もゐる。しかし容貌の美しいものは概して短命のため、現在女は醜女許りになつてしまつたといはれる。トーダの女はヨーロッパ人より嘗てしらなかつた惡疾を傳染され、そのため部族全體が漸次且つ確實に特有の强健な身體を損ひつゝあることは、十九世紀の中頃から警告されて來た。彼女等はヨーロッパ人との接觸による不節制と徹毒のために、老衰した元氣のない容貌になつてしまつた。

これと共に、民族的敗頽の徵が著しい。彼等の人口は一九〇一年八〇七人、一九一一年六七六人、一九三一年には五九七人で絶滅の道を辿つてゐることは否めない。

註　★集團婚 Adelphogamy　特定の一團の女子が特定の一團の男子と正規な實際上の夫婦關係を有するものである。例へば、オーストラリアのある部族は族外婚の諸集團に分れてゐるが、結婚の可能な區劃に屬する各一團の男女は、生れ乍ら互に夫婦たりうる位置にある。しかもそれらの男女は、相互に個人的に制約された關係にはなく、男女皆相互に可能的及び實際上の配偶者である。アフリカのマサイ族の間には、男子の特定の年齡集團とそれに相應する女子の特定年齡集團との間に夫婦關係の結ばれる年齡集團婚が行はれてゐる。

ドムマラ族 Dommara

南印の輕業師、力業師、香具師を多數有する犯罪部族であつて、一部のものは地方を放浪し、他は土着して農業勞働者として働く。手品、綱渡り、蛇つかひにも巧みである。また種々の木材で梯をつくり商人に賣つて生活してゐるものもある。

部族の頭首はムトリ・グル Mudi guru とよばれ、高僧が就任し精神・現實兩界最高の支配者である。

幼兒婚を行はず、寡婦の再婚は自由で多妻婚が普通である。結婚の紐帶は緩く、女子は時折淫賣をなすといふ。ヴィシヌ派を信奉する。

死體は土葬に付し、葬式の最終日に煮飯をまいて鳥に食はせる。

ドムマラ族は、社會的にはパリヤン族、マーディガ族の上に位するが、酒飲みが多く、極めて不仕鱈な習慣をもつてゐる。猫、豚、鳥その他あらゆる種類の動物を食ふ。

テルグー、マラーティ、ヒンドゥスタニー語を話すが、タミール語を用ひない。特有の犯罪隱語を有する。

ナーガー族 Naga

アッサムの東部のナガ山地を中心に居住するモンゴロイド部族の集合である。部族名のナーガー Naga は、ナンガ Nanga (裸身) の轉訛といはれる。概して長頭中鼻であるが、中にはビルマ人との關係を示す短頭型も存在する。一九三一年、一三九、九六五人を算する。ナーガー族に一括される主要な部族は、アンガーミー・ナーガー Angami レングマ・ナーガー Rengma ロータ・ナーガー Konyak 及びセマ・ナーガー Sema 等である。

社會組織　ナーガー諸族の社會組織は、部族により夫々幾分相違するが、大體地域的或は言語的集團としての諸部族は、支族によつて構成され、支族は更に若干の分族氏族に分れてゐる。例へば、アーオ族はチューングリ Chingli モングゼン Mongsen 及びチャングキ Changki の三支族に區分され、各支族は夫々特定の方言・慣習を有すると共に、チューングリ、モングゼン兩支族共三つの族外婚の分族から成つてゐる。しかしチャングキ支族は單一の氏族である。レングマ族は、言語の上から南北兩族に區分され、南族ではアゾンユ Azonyu 支族とケンテンネンユ Kentennenyu といふ族外婚の大氏族から成り、北族は六つの族外婚の分族から成つてゐる。コンヤク族は、テンコー Thenkoh 及びテンドゥ Thendu の二支族から成り、各々族外婚の分族に區分されるが、酋長氏族のアング族のみが族内婚である。

政治組織　ナーガー族の間には殆どあちゆる種類の政治形態が見られる。酋長はセマ族、コンヤク族を除いて餘り認められない。セマ族でも、新しい村においては酋長とその直屬の住民の關係は極めて密接で、住民は酋長を父とよび彼のために働き且つ戰ふ。これに對し酋長は住民に耕作地を與へて保護し、彼等の困窮を救ひ、彼等に花嫁料を出してやり等すると共に、自分の村を離れた住民の財産を差押へたり罰金を課したりする。要するに村の政治に關する限り酋長の位置は絶對的である。ところが古い村においては長年月間の富その他の變動のため、酋長と住民との身分の差異は消滅し社會が著しく水平化するやうになり、處によつては酋長は存在せず、富と指導力ある者によつて村の政治が行はれる傾向がある。斯ういふ社會の水平化の傾向はアンガーミー族において最も著しく、彼等の間では誰も自分以外の他のものに從つてゐるとは見えない。そこには極端な民主々義的形態が現出してをり、ロータ族その他もこれに準ずる。これに對し、アーオ族は極めて高度に組織化された村落會議があり、しかもそれは年輩的協同體によつて組織されてゐる。すべての少年はモルング Morung（獨身者集會所）に入ることになつてをり、そこで彼等は年長の少年達の指圖で働くが、新しい年輩集團が入つてくると自分達がされたと同樣に働かせる。これらの年輩的協力體は村落會議から種々の仕事を仰せつかり村の生活に種々の役目を果してゐる。しかも興味深いのは、チュングリ支族では村に各々の世代名を付與してゐることである。これにはメチェンサングル Mechemsangr（逃亡せざるもの）ポプンサングル Popngsangr（風の民）コソーサングル Koghosangr（廢人）リョングサングル Riyongsangr（多くの人々）の五つがあり、これらの世代名は循環する。一世代の平均の長さは約二十五年であつて、新世代の初めに新しい村落會議が形成され、會議員は一世代を通じて在職する。この間死亡によつて缺員が生じた場合、新議員が一般の承認によつて補充される。しかしその世代が了ると全議員は殘らず役をはなれる。また前會議員は死體の處理に當つたり、下僕のやうな仕事をすることになつてゐる。コンヤク族においては、酋長の地位は極めて强大であつて、極度の尊敬を以て遇せられ神とまで崇められ完全な獨裁制である。これはテンドゥ族において甚しい。

聚落・家屋　ナーガー族の村は通常高い丘陵の上に建てられ、堅固に矢來や土壁、木や竹の阻寨、溝等で築城されてゐる。アンガーミー族のある村は射擊窓と、美しく彫刻した堅固な木の門をもつ石壁の構造をもつてゐる。村の大きさも大小樣々で、アンガーミー族のコヒマ村の如き九百戶の家から成る。家屋は大體小さく耐久的でない。小さい木や竹材で柱や梁をつくり、茅、棕櫚の葉或はスレート、屋根板を以て葺く。窓は通常なく、前と後に入口がある。時折傾斜面に杭上家屋も見られる。モルング（獨身者集會所）の建築は幾分立派で、板壁や

支柱や棟梁に象、蜥蜴、犀、鳥、人獣等を彫刻してゐる。こゝには鐵砲、槍、ダオ、楯その他の武器を貯へ、その前に丸太をくり拔いて作つた信號太鼓を据えてある。

婚制　結婚は一般に成人してから行ふ。婚前の男女交際は行はれそのため娘の家が特別に作られてゐる。この家の中で、娘は綿を繰つたり布を織つたりしてゐるが、夜はそこに泊り愛人の來訪を受ける。實際上、愛人は同一の支族或は分族に屬するから、二人は結婚することは出來ないので、子供の生れた場合、墮胎や嬰兒殺しで片をつける。男子が娘を選び自分の父親に話すと父親は娘の父親の意思をきくために一人の友達を送る。相手が條件付で同意すれば、父親は鷄を殺し、その鷄が死ぬ時の脚の交錯の具合から結婚の可否を判斷する。不吉な姿勢で死んだ場合、この婚約は破棄されるが、さうでない場合、相手の娘にこの由を告げる。しかし娘がその後三日以内に不吉の夢をみると、やはり婚約は破棄される。結婚式は、花嫁の家での酒宴から始まる。夕方、新婦は夫の家へ行つて泊るが、新夫はモルングで泊ることになつてゐる。次の日も宴會は開かれるけれども、前日同樣寢む。三日目に夫婦は自分達の耕地へ出かける。八、九日經ち村の祭司の招待と結婚の承認を得て、初めて二人は床入をする。アンガーミー族、アーオ族は原則として花嫁料を支拂はないが、ロータ族、セマ族は、一般に八十から百ルピーを納める。セマ族、チャング族 Chang は多妻婚であるが、概して一夫一婦である。しかし離婚は頻繁でアンガーミー族は甚しい。寡婦の再婚は自由である。しかし子供のある場合あまり喜ばれない。

葬制・宗教觀念・首狩　ナーガ1族は大抵土葬に付する。曝葬は六ヶ月位たつと壇から下の家の外に埋める。北方へ行くと死體を壇の上に曝しておくのが普通である。曝葬は六ヶ月位たつと壇から下し、骨を數へて葬る。アーオ族の一部落であるヤチャム Yacham では、頭部を拔きとり岩崖の割目に同じ氏族人の首と一緒に積み重ねておく。コンヤク族でも、死體は村の沙羅雙樹の下かその枝に置いて曝すが、腐り始めると頭をとつて家に持ち歸りきれいにし、時折文身する。それを友人達が弔問する。最後にこれを平たい石の蓋のついた甕の中に藏め沙羅雙樹の下におき、棕櫚の葉でふいた圓錐形の建物の中に隱すとか其他異つた二三の處置法がある。アングパング Angpang といふ村では、木像の頭の頂きに木製の角をつくり、この角の間に暫時頭蓋骨をのせておく。これは靈物 soul matter の座が頭部にあるとするナーガ族一般に通ずる宗教觀念にもとづくものであつて、頭蓋骨から死者の靈を木像に憑り移らすためにするのである。この頭部を靈物の座とする觀念は頭自體のみならず、毛髮に對する尊崇をもたらしてゐる。ナーガ族は、離れた土地で死んだ場合、死者の毛髮だけを持ち歸り葬式の際の主體をなす木製の偶像の頭部につける。また首狩りの場合首をもつて來れない場合は髮を以て代りとしたりする。首狩りは、靈物が頭部に存するとの觀念に基き、他から首をとつて來ることによつて、餘剩の靈物を招來し、子孫の繁榮と農作の豐饒を增進しようとする信仰に胚胎する。と同時に自己の功名心、名譽心を滿足させ單調な生活を多彩ならしめようとする副次的目的によるものである。ナーガ族に著しいこの行事は、部族により行事の方法を異にする。例へば、とつて來た首は種々の仕方で曝しておくが、アーオ族は先づ太鼓の上に置き、供物を捧げた後、樹にもたせかけた竹に下げ、その下に豐饒と關聯ある石を置く。その後首を下してきれいにし、首をとつて來たものが既婚者の場合は、その家の前壁の外にぶら下げる。未婚者の場合モルングに積み重ねておく。そして收穫時に新粉を塗り祈りをさゝげる。あらゆるものに生命を付與するものとしての靈質は、子孫の繁榮のみならず穀物の豐饒を招來する意味においても、農耕儀禮と深い關聯を有する。首狩行事もその一つに他ならない。ナーガ族のある部族は播種の際に村の

死者を集團的に處理する。レングマ族は米が澤山とれるやうにと高名な人の墓の傍に地を掘る。また雨乞ひに墓に水をかけたりする。

石造物　ナーガー族は石造物を座席として或は記念碑として建造、使用してゐるが、かういふ祭儀用石造物はアンガーミー族とカチャ族に限られてゐる。アンガーミー族は記念物としての石製の壇をダフdahu（多角錐狀、投槍の際足場とする）　テフバ tehuba（高い平坦な臺形、舞踊用）　クウェフ kwehu（頂を平たくした塚狀の建造物、死者を記念する）　バゼ base（矩形の石壇、死者を記念する）の四種に分けてゐる。これらの他に、土地の豐饒性を增進させるために石を用ひる。アンガーミー族は死んだ近親の記念碑を耕地にたてる。また特定の宴會を催し得たものは陽形の石を建てる。メンヒルやドルメンも豐饒の石とされてゐる。また首級をとつて來ると先づ石の上に置くが、アンガーミーではこれをキシュチー Kithuchie といひ、隕石風な平石の一種の積石塚であつて、氏族の神聖な石となしてゐる。

服裝・武器　ナーガー族は、その名の示すやうに一般に衣服については無頓著で、平常は殆ど裸であり、盛裝といつても簡單な短袴をつける程度であり、女も狹小な布をつけてゐるにすぎないが、唯、アンガーミー族、アーオ族はこの反對に繪畫的とでもいふべき正裝を有する。短い黑い袴、その前につける皮袋は子安貝、象牙、眞鍮の呪符等で飾り、竹で編んだ緣付帽（或は緣無帽）に亘嘴鳥の尾の羽をつけたのを冠り、黃と赤で染色した蘆莖で編み中に綿をつめた脚絆をつけ、派手に色染めした髮の總をつけたダオや槍を携へる。アーオの女は一枚の長い靑色の布で身體を蔽ひ、アンガーミーの女は短い緣どつた上衣と、眞鍮の飾環をつけた肩掛けをかけ、貝、玉類等をつらねた頭飾をつけてゐる。アンガーミーの女は、結婚まで頭髮をきれいに刈つてゐる。カチャ族は髮を伸ばし額の所で切下げ髮にしてゐる。アーオの女は、頭の後に髮を髷に卷き、それに白い棉毛でつくつた作り髷と眞鍮製の髮針で飾り、その兩側に眞鍮の輪形耳飾を、耳輪を通し頭上から垂らした紐で安定させてゐる。一般にナーガー族は兩性共裝身具をつけるのが好きで、豚の牙・象の牙・瑪瑙・玉髓・玉類の頸飾・貝製の裝身具・眞鍮の耳飾等を用ひてゐる。文身はそれ程著しくない。アーオのチョングリ及びモングゼン兩部族の女は、部族の印として脚部に文身する。コンヤクは胸部に文身し、また齒を黑く染める。ディラブ河谷のナーガーの女は、鼻翼に金屬鉛をつけてゐる。

彼等の武器は、投槍、楯（革楯、編細工楯）、ダオ、弩、鐵砲等がある。槍には七尺以上の長槍もある。鐵砲は現在では全く沒收されてしまつてゐる。

マニプール山地のタングクル・ナーガーは割禮に類する奇習を行つてゐる。即ち縱に引いた包皮を象牙又は竹製の環に貫通するのである。ナーガーは豚、野牛、蜥蜴、蟒蛇、鹿、犬等何んでも食べる。

生業其他　ナーガー族は稷、豆、玉蜀黍等を栽培するが主食物は米である。農耕方法としては燒畑耕作と雜段耕作とが行はれてゐる。雜段耕作は、アンガーミーとタングクル兩族が從事し、外來人をしてその素晴らしさに驚歎させる。しかし、アンガーミー族も、その立派な臺地の田よりも燒畑をひらくことを好むといはれる。陸稻の方が收穫が多いからである。ナーガー族は、また狩獵、漁獲、木彫、刺繡その他家內工業に巧みであるが、茶園勞働者として働くものも多い。注意すべきは、文明との接觸の結果は思はしくないとのことである。米國のバプテイスト傳道の如き、永年の慣習、モルング其他の制度を破壞、蔑視する結果をもたらしたといはれる。また飮酒、阿片吸收の惡風の浸潤も看逃し得ないものである。

チベット・ビルマ系言語を用ひてゐるが、その種類は頗る多い。

ナーハル族 Nihal, Nihal

ホシャンガーバード、ニマール及びベトゥル地區に屬する森林部族で、ビール族とコールクー族の混血種といはれるが、時にはコールクー族の支族として分類されることもある。また一說には、ビール族を父コールクー族を母とするもの、奇となすもの、ビール族中最も未開なものとする見方もある。中央州では、彼等の家族や氏族の名は、コールクー族のそれと殆ど同樣である。とにかくコールクー族とナーハル族とは極めて親密であつて、後者は前者に一目おいてゐる。

前述のやうに、ナーハル族は、混血部族であり、またその特徴を著しく有してをり、今尙その社會にゴーンド族、コールクー族や一般のヒンヅー・カーストのものが入るのを拒まない。しかし地方によつては、他部族やヒンヅーの下級カーストの捧へたものを食べず、それを拒むものもある。

ナーハル族には、コールクー・ナーハル Korku Nihal と、マラーティ・ナーハル Marathi N. とよばれる支族がある。また、トーテムを有する族外婚のカーサ Kāsa ナーグベル Nagbel バワリア Bhawaria カディア Khadia スルジャ Surja の諸氏族がある。カーサ氏族は龜及び鐘銅板を崇拜する。ナーグベル氏族は蛇類を崇拜する。

成人婚で、同一氏族内の結婚は許されないが、その他の制限はなく實の從兄妹同志の結婚を行ふ。結婚式の主要部分は、花嫁花婿の着物を二日續けて結ぶことである。

十二月にジャールカンディ Jharkhandi といふ森の神を崇拜する。花沒藥やマンゴー樹の葉、果實は、この儀式の日まで用ひずにおき、祭儀の日に初めて採取し、調理した食物と共に神に供へる。これらの樹の葉、果實、材木は、その後一般に用ひられるやうになる。ナーハルは、また一般の村の神を崇拜する。

死體は土葬に付する。たゞスルジャ氏族は、火葬にする。そして死後四日間調理した食物を墓に供へる。

ナーハルは、以前山賊の社會を形成してゐた。ベラールのナーハルは、牛泥棒に耽つてゐたが、この風は今日もいくらか殘つてゐる。現在多くのナーハルは牛飼ひを生業としてゐる。また村の見張りやマーキング・ナット marking nut (印度產の Semecarpus anacardium の樹の實) の採油に從事するものもある。

彼等の社會的地位は極めて低い。一般に不潔であつて、數十日も沐浴しないといはれてゐる。

彼等は、本來の言語を失ひ、コールクー語を用ひてゐる。

ナガシア族 Nagasia, Naksia

主としてウダイプル及びジャスプルに居住する未開農耕部族である。ムンダー族の分派とされてゐる。一九三一年、四八、六八六人を算する。ナガシアは自身をキサーン Kisān (農民の意) ともいふ。オラーオン族もキサーンといはれるが、彼等は生業上のみのキサーンと考へてゐるのに對し、ナガシア族は自ら眞のキサーンと考へてゐるといはれる。(オラーオン族はまた、ナガシア・キサーダ Nagasia Kisāda (蛇の百姓) ともよばる)。

ナガシア族は、テルハ Telha ドゥリア Dhuria センドゥリア Senduria の三集團より成り、更に多數の氏族に分れる。テルハ族とドゥリア族とは互に通婚する。

ウダイプルのナガシアはナグ・デオ Nāg Deo（蛇の神）、太陽、月、ドゥーラ・デオ Dūlha Deo 及び祖先を崇拜し、死者の精靈や樹木及その他の精靈を崇拜しない。ジャスプルのナガシア族は祖先のみを崇拜する。女は腕にガラス環飾をつけ、鼻輪をつけず、文身しない。センドゥリア族は、前二者より優越してゐると信じ、自らナーグバンシア Nāgbansia（蛇の裔）と稱し祖先達の名前をナグ（蛇）といふ稱呼をつけて呼んでゐる。またヒンヅー教徒と自稱する。女は鼻輪をつけ文身してゐる上に腕にガラス環飾をつけ肘の上にも腕飾をつけてゐる。

ナヴァーヤト族 Navāyat, Navāyet

これはマドラス州における回教徒部族である。往時北カナラのバトカルに定住してゐたらしく、處によつてバトカリ Bhatkali として知らる。十八世紀頃イラクの支配者ヘジャジ・ビン・ユスフに追はれたハーシェムの人々の末裔であつて、その身長、體型はアビシニア土着民と非常に似てゐる。西岸の部族は、デッカンに回教王國設立後、印度人或は回教家族との通婚を避けて來たので、血液の純粹性を保存してゐる。

クレーシ Kureshi メーケリ Mehkeri チーダ Chida チャス Cheas モハーギル Mohāgir の五分族がある。

ナヴアーヤト族は他部族と通婚しない。回教徒の間では高い地位をしめ尊敬を得てゐるのみでなく、部族間の團結心は强い。

デッカンの回教王國時代には、軍人・學者・紳士の三德を兼備したので著名である。

ネワール族 Newar

ネパールの中部に居住するモンゴロイド出の混種部族である。グルカー族に征服・支配されるまでネパールの支配的民族であつた。

ネワールは、ヒンヅー教徒とラマ教徒とから成つてゐるが、ラマ教徒の方が數は多く、ヒンヅー教は改宗者の增加により漸次基礎を固めつゝある。ヒンヅー、ラマの兩社會は全く分れ、夫々こまかいカーストに分れてゐる。ヒンヅー・ネワールの社會は、デヴバジャ Devabhaje（ブラーマン及び教導者）が最高に位し、スルジャバンシー・マル Surjyabansi Mal（舊王家の一統）スレスタ Shrestha（大臣及び他の官吏）ジャプウ Japu（農耕者）が概ね上層に屬し、中層としてアワー Awā（石工）カウミ Kawmi（大工その他）等があり、下層にはパーシ Pāsi（洗濯屋）其他がある。

ネワールの娘は、年頃になつてから兩親の選んだ男と結婚するが、夫が氣に入らなければ、蒟醬（キンマ）を夫の枕の下に置いて夫の家から出てもよいことになつてゐる。寡婦の結婚も自由である。しかし一方、サティ Sati（寡婦の殉死）は女が希望すれば許される。女兒が生れると、閏月の間に種々の儀禮を行ふが、ベルの實（Aegle Marmelos）との結婚式もあげられる。姦通した妻は離緣されるが、夫が氣に入らなければ、ネパールにおける姦通罪處罰法としては、非常に寬大な方である。

死體を火葬に付する。

ネワールは野牛、山羊、鹿等の肉を食べる。

チベット語に似たグプハジヴス語を用ふ。

バートラ族 Bhatra

バスター土侯國及びラフブル地區の南部に居住するゴーンド族に似た未開部族である。一九三一年、三七、二四七人を算する。十九世紀の四半期初頭の頃ワランガルからバスターの土侯について來たといふ傳說の他、その素性については知られてゐない。元來、バートラ bhatra は、召使、下僕の意といはれてゐるやうに、この部族は、多く村落の見張り番、家僕等として雇はれる。

バートラ族は、ピート Pit アムナーイト Amnāit サーン・バートラ Sān Bhatra の三支族に分れ、うちピート支族は最上級で、アムナーイト支族と共に、草筵を作るにたくみであり、サーン・バートラ支族は最下級に位し、ムリア・ゴーンド族と殆ど同一視されてゐる。支族は通常族外婚を營む氏族から成る。氏族は動植物の名を有し、以前はその成員はトーテムとする動植物の像を文身した。

外來者は自族内に入ることを許さない。しかしバートラの家庭に入つてしまつた同級或は上級のカーストの女は、妻として認められる。

娘は年頃になる前結婚することになつてゐる。メダ・ガンティア Meda Gantia といはれる占星師の村の役人がその日取をきめる。結婚式にはマフア樹でつくられた聖標の周りを新夫婦が七度まわり、それが終ると標木を川に流してやる等、種々の興味深い行事をする。

死體は頭を北にむけ仰向けにねせて土葬し、墓の上に米、小安貝の殼、唐箕其他のものを置く。唐箕は婚約の際花嫁へ贈物の一つとしておくられるが、一般にそれを魔法力をもつものと考へてゐる。

バートラ族の間では、男が虎に殺された場合、その靈は生前もつてゐた裝身具をさがしに虎の形をかりてうろつきまわるといふので、司祭者は虎の皮片を腕に結び、上衣に孔雀の毛と青色のカケスをつけて、虎になつた振りをして跳ねまわり、死者の靈を宥和する。

彼等は狩獵神マーティ・ディオ Māti Deo を崇拜し、三月の收穫祭に、狩獵大會を催し、盛大な儀式を行ふ。すべての村人は弓矢を背につり肩に手肩をかついで集り、森に長い網をひろげてこの中に動物を追ひこむのであるが、通常鹿、野豚、兎、鶉、鳥等が獲物である。歸村後神祠の前で料理し、神に鷄と豚を供へる。それから穴を掘り水を注ぎ、各戸から男一人宛泥の中に下りたつて、各家の小さい種子を泥に漬ける。饗宴後、これをとつて各戸主に惡罵の言を以て返し、彼等から二三パイス★の贈物をうける。斯樣にして神に捧げられた種子は、次の種蒔の時にまかれるのである。

バートラはまた出漁についても儀式を行ふ。死後についての觀念は曖昧で、應報、處罰の場所といふやうに考へない。

バートラ族は、農耕者、村の司祭、下僕、作男、村の見張り番等として働いてゐるが、以前、移動耕作を行つてゐた。

彼等の名はピルゥ Pillu（小男の意）ダルゥ Dalu（太鼓腹した男）等々極めて珍妙なものである。

註　★　パイス pice 印度に流通する銅貨幣。四分の一アンナに當る。

バーリア族 Bharia, Bharia-Bhumia

主に中央州のジュップルポール地區にみられるドラヴィデアン部族で、その部族としての構成は緊密ではない。亞カーストに分れてゐるといはれるが、事實は、さういふものは認められないと、ラッセル（R. Russel）は述べてゐる。極めて下級のカーストはともかく、一般にどういふカーストのものでも、バーリア族になりうるといふ事實によつて前述の構成上特性を想察出來よう。

バーリア族は、多數の族外婚を營む集團に分れてをり、集團の名も構成上の異質的要素を示してゐる。成人婚で、彼等の婚約の儀式は、幾分變つてゐる。卽ち、婚約がとゝのへられると、娘の父親は、息子の父親と友人達を食事に招くのであるが、息子の父親はその場にラックの珠をつないでつくつた頸飾とスパングル（ビカビカ光る裝飾用小金屬片）を持參し、未來の嫁の母方の近親へ贈る。そこに娘が現れて、將來の夫の父親とその友人達の頸に頸飾を結び、小金物を額にかけてやり、それから彼等の頰をつかみ、壓し、亂暴にねじる。また醫金の粉を顏にかけるのである。娘が部族の男に口說き落される場合、寡婦結婚の儀式でその男と結婚する。それは手首に環飾をつけ新衣を贈りカーストの人達に御馳走するだけである。寡婦は亡夫の弟と結婚すべきものとされてゐる。

出產について、全くかまはず、生れる瞬間まで姙婦は働き、出產後三日經つと床拂ひし、祓ひの式を行ふ。屍體は土葬或は火葬し、十日間喪に服する。

バーリア族は、自らヒンヅーと稱し、鄕土の村の神々を崇拜する。ディヴァーリ Divali の日には家神に黑鷄を供へる。また家の神ブラ・デオ Bura Deo ドゥーラ・デオ Dūlha Deo 或はカルア Karua といふ一匹のコブラに黑鷄を供へる。この蛇を非常に尊崇し、バーリアの家に生れたといふ。

粗穀を主食とし、猿、牛の肉その他殘物を食はないが、鷄と豚は自由に食べる。

彼等は小さい布片を身にまとふだけで、俚諺にも謳はれたほどであつたが、近來はさうでもなくなつた。

バーリア族は通常作男として働いてゐる。その性質極めて單純の上に無智で勘定をしらないため雇主などのため騙されることも少くない。そのため彼等を終身債務者とすることも極めて容易であり、事實それによつて幾代の間も僕婢の仕事にしばることも珍らしくなかつたといはれる。しかし、彼等は辛酸になれ且つ勤勉な性であるから、その働きには期待すべきものがある。

バイガー族 Baiga

中央州マンドラ、バーラーガート兩地區及びビラースプル地區の東部サトプーラ山地に住する原始ドラヴィデアン部族であつて、ブミア族 Bhumia ともいはる。一九三一年、七二、八九九人を算する。內一部のサンバルプル地區にゐるものは、本部族と關係を絕つて、カーストとなつた。バイガー族の身長は、他の多くの部族より幾らか高い方に屬し、鼻はゴーンド族のやうに偏平であるけれども前額及び頭の恰好は比較的立派である。

バイガー族はビンジワール Binjiwar バロティア Bharotia ナロティア（又はナーハル）Narotia (Nāhar) 其他の支族に分れ、各支族は多くの族外婚の氏族より成つてゐる。中前三者は良くしられ、就中ビンジワール族はヒンヅー數を信じ社會的に最高に位し、特にマンドラのそれは、バイガー族中最もひらけてゐる。（ビンジワール族參照）。各氏族の名稱は、ゴーンド族の氏族のそれと同じである。

彼等は、高さ六、七呎位の竹と泥で造られ、正面に草と葉で葺いた小さつぱりしたヴェランダのついてゐる小家に住んでゐる。

ビンジワール Binjiwär バロティア Bhārobia ゴンドワイナ Gondwaina コンドワーン Kondwān の四支族は、七神を崇め、相互に婚を結ばないが、六神を崇拝する他亞族とは緣組をする。一般にバイガーは、自己の氏族内或は同數の神を崇める他氏族とは緣を結ばぬけれども、母方の氏族とは緣組する。地方によつては從兄妹婚は許される。成人婚であつて、花嫁の兩親からその申込をなし、娘がその夫たるべき男子の選擇を許されてゐるところもある。花婿の家から花嫁の兩親に對し、通常五乃至二十ルピーを支拂ひ、更に新夫は義父に大體二年の間仕へて働く。結婚式は、一年位たつてから彼の仕事ぶり等について、滿足がいく場合行はれる。バイガーの間では、寡婦の再婚は許され、また必ずといふ譯でないけれども、亡夫の弟と結婚することが望まれる。その他の男と結婚する場合は、義弟に五ルピー支拂はねばならない。離婚は、夫婦の合意により有效であつて、彼等は長老會議の面前で一本の藁を切ればよい。離婚した相手の女が、再婚せずに同じ村落にすんでゐる場合は、前夫は彼女及びその子女の生活を維持してやる責任がある。また彼女は前夫が生きてゐて獨身でゐる限り長老會議の許可なしに再婚出來ない。多妻婚が許されてゐる。

分娩した婦女子は、一ケ月の間不淨とされる（但しビンジワール族は九日間）。その祓の式に饗宴が行はれ、生兒は命名される。バイガーは、死者を土葬する。唯老人の死體だけには、特に敬意を表し、野獸に食はれぬやうにと火葬に付する。通常死體は、裸のまゝ頭を南に向けて墓の中に横たへる。

ビンジワール族は印度教徒であるが、バイガーは一般に純粹の精靈（アニミスト）崇拜者である。その主神ブラ・デオ（大神の意）Bura Deo は、ゴーンド族の神でもあるが、チーク樹の中にゐると信ぜられ、毎年五月に祭りがある。その際山羊、鷄、椰子の實、マフアからとつた酒を供へる。タークル・デオ Thākur Deo は、村落・地方の神で白山羊の供物を喜ぶ。その他ドゥーラ・デオ Dūlha Deo（厄病祓の神）雨の神ビームセン Bhimsen タークル・デオの妃神の地女神ダルティ・マータ Dharti Māta を崇拜する。

バイガーは、以前燒畑耕作をなしてゐた。が現在では政府から禁止され、一部を除いて正規の耕作を實施してゐる。女は田植や刈入れに從事、男は籠や敷物を作つて賣る。生來の獵人であり、すぐれた樵夫でもある。バイガーは又密林中の藥用植物に關する知識をもち、他の部族内では呪醫の名聲を荷つてゐる。更にゴーンド族、コールワー族、ナガシア族の司祭者の役をつとめてゐる。

性單純、率直、誠實の上に極めて大膽で、勇氣に富んでゐる。

部族本來の言語を忘失し、サトプーラ山地ではプロークン・ヒンドゥスターニを用ひる。

バイナ族 Bhaimas

中央州に特有の未開部族で、ビラースプル地區及びその近隣、即ちサートプラ山地とチョタ・ナグプール南部に亘る森林地帶にみられる。一九三一年、二〇、八七九人を算する。バイナ族はその素性バイガー族とカワール族との混交種といはれる。概して、素亂した性的交涉のため、バイガー族其他の部族や下級カーストからしめ出された者の逃避場の役をつとめて來た。またバイナ族は、ゴーンド族やカワール族より早く、前記の地帶に住んでゐたともいはれてゐる。

バイナ族には、ウリヤ Uriya 及びラリア Lania の二支族がある。それらは更に多數の氏族に分れ、各氏族は夫々他カーストの名をもち、その成員は自族の名の本元のカーストに屬する人々に敬意をはらひ、且つそのカーストの家神を崇拜する。この他動物や植物の名をもつ多數のトーテム的氏族がある。

バイナは男子は犁をつかひ、女子は家事のやりくりが出來るやうになれば結婚してもよいと考へる。息子に嫁をあたへるとき、父親は近親のもの達と十乃至十五個位のパン菓子と飲物一本をもつて目星をつけた娘の村落へ行く。彼等は一つ處にあつまつて娘の父親へ使を出し、彼女をくれるかどうかを訊く。首尾よく與れるときまれば持參の贈物を受けてもらふ。

ビラースプルのバイナの主神はナクティ・デヴィ Nakti Devi（鼻をもたない女神）である。その祭りの儀式は、米を牛糞で洗つた正四角の床の上におき、ギー ghi（貯藏牛酪）をかけて燒く。次いで米を食ふといふので牝鷄を殺して角床の上におき、肝臟を火で燒いて米に供へ、頭と身體は食べてしまふ。バイナは男の死んだ時は牡鷄を、女の死んだ時は牝鷄を供犧する。彼等は、更に牧穫の神タークル・デオ Thakur Deo を崇拜する。恒例の吉日の儀式にはブラーマンを雇つてくる。

バイナは、通常外來者の自族に入ることを許さない。しかし、族内の男が他族の女と關係し、その間に子供の生れた場合、女は入ることを許さないが、子供を入れてやる。

食物は牛を除き豚、鼠その他手に入れうるものは何でも食べる。

社會的にはゴーンド、カワール、サヴル族等の下に位する。女は氏族のトーテムを表す文身をする。膝と足首にガート ghat といふ線の形をつける。これをすると死後天に通ずる山に上りうるが、してゐないと途中で槍につかれると思つてゐる。

總じて、彼等は比較的ひらけた部族であつて、ヒンヅーの慣習を廣範圍にとりいれてゐる。

大抵平地に居住し農業に從事してゐるが、土地所有者は極く僅少で、大多數は農園勞働者である。森林地帶に居住するものは、未開部族たるバイガー族と關係あるものとして、輕蔑される。バイナは時折村落の葬儀等に、司祭者或は呪術師に雇はれる。卽ち司祭者の資格で、死者の精靈を鎭めたり、村を虎に對し守護したり、豐作を獲るため種々の妖術を行使し、バイナは魔法使ひとしてバイガー族同樣の名聲を有する。

バイナ族は、バイガー族のやうに、本來の自族語を忘れ、一般に不正なヒンドゥスターニを用ひる。

ハサラ族 Hasala, Hasula

マイソール西北國境のガーツ山系にそふて居住する。短身、暗色、捲髮のづんぐりしたドラヴィデアン部族で、ショーラガ族と似てゐるといはれる。南カナラから同地に移住して來た。原始的野蠻狀態から幾分脫却した生活を送つてゐるといふ。

ハサラは、相互に離れ離れにたてられた小家に住んでゐるが、それには通常の正面入口がある許りでなく、後方にも半ば隱された穴が出來てゐる。一種の裏口で、危急の場合或は平常見かけない人がやつて來た時、こゝを通つて裏の密林に逃げ出すためのものである。彼等の小家は一年毎乃至週期的に移動する。多く荒蕪地の人の近づき難いところか藪を求めて移る。

結婚式は夜行ふ。その慣習は非常に單簡である。

惡靈崇拜の要素が依然として殘つてゐる。部族の誰かゞ死ぬと、それは誰かの惡靈の仕業と考へられる。そこで占星師に惡靈の何者であるかの鑑定を乞ふ。彼は卜占をたて、惡靈の所有者をかくかくの隣人だと話す。そこで死者の相續人又は親族が豚、鷄或はその他の報償をその隣人にやると、彼の靈が解かれ救はれると考へてゐる。

社會的地位は、ホレヤ族、マーディガ族の上に位する。

ハサラは、雇はれて樹木伐採、野生の小豆蔻及び胡椒の採取等に從事する。小豆蔻の採取については父子代々雇主の奴隷のやうな地位にあるものもある。彼等は棕櫚酒やアラック（一種の燒酎）が非常に好きである。

カナリー語の方語を用ふ。

バダーク族 Badaluk, Bāgri, Baoria

中央州、中央印度、ラジプタナその他にみられる著名の犯罪部族である。この部族は、ラージプゥト族とビール族、コーリー族との混淆に由來するといはれるが、現在のバーグリ族は丈低く、五呎二吋を越えるものがないといはれる。

往時、モガール帝國衰頽し、北部印度に支配權失はれて無秩序狀態現出した時、盜匪本能を目覺ませられ、以後武裝盜匪團を組織し北、中部其他印度全般に掠奪の手を擴げた。彼等は部族の酋長や地主の默認或は公然の支持を得て盜匪の生活を送り、北印度では時折ガンジス河の渡し守に化け、中央印度では牛群を率ゐて遊牧するバンジャーラ族或は托鉢僧に假裝して惡事を働いた。しかし十九世紀中頃からの英當局の大規模な掃蕩、彈壓は、彼等の活動に大打擊を與へた。現在では往時の大掛りな犯行は認められず、通常の家宅侵入、窃盜、詐欺等に限られるやうになつたが、依然犯罪部族中では最惡の部に位する。

その社會は、通常のカースト的構成を有し、ラージプゥト族のやうに相異る氏族の成員相互に通婚する。

死體は火葬に付し、骨灰を保存してガンジス河へもつて行き河中に葬る。自己の生業上、この葬儀が出來ない場合は、死體の二三本の指を切つて送り、全身の代りにガンジス河に沈めてもらふ。

ヒンヅー教を信ずるが、一般の犯罪部族にみられるやうに極めて信心深くまた迷信に富んでゐる。大仕事にかかる前に、前兆の良否をみる慣習がある。またヒンヅーの神々は、寺院や僧侶に捧げた供物に上機嫌である間は、自分達の行動を喜ばしてくれてゐるし、すぐれた祖先の靈は、神々のもとに、その代りとなつて自分達を獲物へと導いてくれたり危難を豫告してくれたりするやうな感能力をもつてゐると信じてゐる。バーグリは自分達の所業を反省するどころか、極度の喜びと誇りとを感じ、神々も助けてくれると信じてゐる。惡業を斷念するとか正職につくことと等閑く考へてゐなかつた、といはれる。

バーグリは持久力、忍耐力に富んでゐるが、これは蜥蜴を食ふためだといふ。彼等は雨の日に蜥蜴狩に出かけ、生きた蜥蜴を籃一杯とつて來る。そして數日間食物を與へず生かしておいて後食べる。

勿論、バダーク族の多數のものは、惡事にのみ從事してゐない。シルサやグジャラート地方では犯罪部族ではないといはれてゐる。

パターン族 Pathan, Pukhtun

パターン族は西北國境州及びバルチスタンに居住する大回教部族である。パターン族は單一民族であるかのや

うに君做されるが、それは夫々起源を異にする種族的要素が卽ち、或るものはアフガン方面より、或るものは印度方面より乃至はトルキスタン方面よりこの地帶に移動又は侵入して先住種族を驅逐し、或はこれを服從させて相混合し、現在の部族を形成するに至つたのである。リズレーはパターン族をトルコ・イラニアン型としてゐる。アフガニスタンの支配民族たるアフガン族と同種同文である。背高く、筋肉頑丈、長頭、隆鼻、眼及び頭髮は黑く、皮膚は白いが陽に焦け黑色を呈し、一見未開人の印象を與へる。

支族としては、ワジル Wazir モーマンド Mohmand アフリーディ Afridi バジューリ Bajouri シーラニ Shirani ビータニ Bhitani チャムカニ Chamkanni ハッサンザイ Hassanzai ジョワキ Jowaki カーカル Kakar ハッタク Khattak ロハニ Lohani マンドヘル Mandukhel マルワト Malwat ムラゴリ Mallagori オラクザイ Orakzai ウトマンヘル Utmankhel ユスフザイ Yusufzai ザイムート Zaimukht 等がある。

政治組織　パターン族は現在の印度・アフガニスタン國境たるデュランド線によつて同族アフガン族と分割されてゐるが、同線東部の西北國境州においても、國境寄りの山地パターン族は、舊印度ムガール王朝時代は勿論英國統治以來現在に至るまで印度側の支配を認めず、自らヤギスタン（獨立國の意）と稱してゐるため、英國は山地部族と後者施政地域の間に所謂行政的境界を設けてゐる。パターン族は、部族地域及び施政地域人口六百五十萬の九割二分餘を占める。施政地域は主都ペシャワールを中心に英國の統治下にあるに對し、山間部族地域においてはマリク Malik といふ頭目や長老の封建的支配下にあるもの、自治制をとるもの、或は部族民の會議による自治制をとる共和的色彩濃厚のもの等その形態は多樣である。部族間の政治的社會的關係は全體會議たるジルガ Jirgah にはかり解決することになつてゐる。しかし、パターン族の內部においては、各種部族は分立して獨立の形態を持し、且つ對立敵視の狀態を續けてゐるので、全體の政治的統一は平時はみられない。しかし、一度び利害が對外的に、殊に對英國對異敎徒に對し一致する場合は、相互に連繫し一大集團となつて外敵に當らうとする。山地部族は武裝した多數の戰士を擁してゐる。

對英感情　十八世紀の後半、アフガニスタン王アハマッド・シャーが現在のアフガニスタン、カシミール、パンジャブ、シンド、バルチスタンの諸地方を併せドゥラニー帝國を建てた際、パターンは王の軍兵として戰ひ帝國の膨脹に與つて力があつた。これをパターンは誇りとし、同帝國をパターンの帝國であるかのやうな愛情を抱いてゐた。その後、英國の侵略によりアフガニスタンの版圖は縮小され、剩へ英國は前記のアフガニスタンの失地に露骨に侵略網を擴大して干涉の手をのばして來たので、パターンは英國を排擊し、印度におけるドゥラニー帝國再建を夢みるやうになつた。このため、パターンの部族は、英・ア戰爭その他の機會をとらへ反英行動に出た。英側はこれに大いに惱まされ、嘗て完全な討伐の效果を治めたことは殆どない。硬軟兩樣の懷柔策により漸く現在に至つてゐる實狀であつて、山地方面のパターンは依然强烈な抗英意識を燃やしてゐる。彼等は英帝國は必ず崩壞する、その時にはドゥラニー帝國再現するとの夢・希望を抱いてゐる。

社會秩序　パターンは泥製の壁をもつ家屋內に居住する。各家族は完全なる獨立狀態を保持し、恰も一國をなしてゐる感がある。家族內では家長は絕對的權力をもち、家族員を殺すことさへ出來る。家族外においては、すべての男は全く平等の權利を主張し、他人の制肘を絕對排擊するため、軋轢と爭鬪は絕えない。しかも回敎徒の金科玉條とする回敎律は嚴格に行はれず、寧ろ彼等の社會道德たるパターン固有の仁義（パフトゥンワリ Pakhtunwali）によつて社會の秩序はある程度維持されてゐる。その一例として、避難逃亡者は何人たるを問はず

これを隱匿保護する、復讐を名譽ある務めとする、五年乃至三十年毎に土地を再分割する等がある。これらの仁義を守らなければ、一家一族、集團より指彈され、放逐される。復讐についても一般的な根強い風習をもつてゐる。然し慣習的律法あるとはいへ、部族民の間に金・女・土地に起因する紛爭と爭鬪は絶えない。

教育・性質　パターン族の知識程度は印度農民よりも高いといはれる。山間部族の間には子弟教育の特定機關はないが、各家庭においては、勇敢・自尊・禁酒を目標にスパルタ式の訓育を施してゐる。パターン族は一般に自尊と自恃の念が至つて強い。彼等の中には、自族の居住地帶外に行く時は極めて尊大にかまへ、殊に西洋人には侮蔑の態度を示すといはれる。民族意識も著しく強烈である。しかし彼等の性格について、粗野・尊大・執拗・貪欲・殘忍を指摘する向きもある。

婚制　パターン族は一般に成人婚である。親族關係にかまはず、最高の花嫁料を支拂ふものに娘を與へるのが普通である。カーカル族は婚約後の性的關係を許してゐる。寡婦は死んだ夫の兄弟の妻となる遞次婚的慣習がある。また離婚は、簡單な手續だけで許されるが、多くないといふ。姦通した場合、當事者達は金錢や品物で償ふ慣習がある。男尊女卑の氣風が濃厚である。

宗教・葬制　パターン族は回教徒であり、大部分スンニー派に屬するが、バンガシュ、オラクザイ各部族はシーア派に屬する。回教兩派間の對立・抗爭も無視出來ないといふ。ムッラー Mullah といふ僧職の地位にあるもの、セーイッド Sayid といふマホメットの子孫が部族民より多大の尊敬をうけ。社會的に有力なる地位を保持してゐる。またその言動は、全部族の動向に至大の影響力をもつてゐる。屢次の英・ア戰爭におけるパターンの反英行動にはムッラーのつとめた役割は小さくない。

彼等の葬式は回教の慣習に從つてゐる。臨終の時には僧侶がその席に連なり、病人は適當の祈りをくりかへし、メッカの方向に顏を向けて息をひきとる。死骸は洗つて布につゝみ、僧の祈禱が濟んでから埋葬する。墓穴は上部は狹いが底は廣い。處によると死體を運び出すに入口からでなく壁を破つて出すところもある。一般に棺を用ひない。

服裝・生業　一般に頭髮を短くし、寬濶な褶袢風のものと、だぶついた洋袴をつけ布或は毛布の草鞋を履く。フェルト製のオーバーをつけるがそれにはゆるい袖がつくられてゐる。女は寬い赤、或は暗青色の肌着をつけ、廣い洋袴をはくときとはかぬ時とある。頭には頭巾をかぶる。

パターン族は、農耕、遊牧行商、運搬等を生業とする。山地方面は、高峻で雨量乏しいため耕作地に惠まれず、大部分の者の生活資料は他から求めなければならぬので、生活維持のため出稼するものも少くない。近來印度內部に移住し、工場その他の勞働に從事するものも多い。彼等の間には爭鬪の絕え間なく、このため農耕、牧畜、果樹栽培が阻まれるのみでなく、他面彼等は銃器を偏愛し新銃器の獲得のためには金を惜しまぬ風があるので、部族、個人の收入は不足勝ちの傾向がある。これを補塡するため、山間地域を通行又は居住する英人やヒンヅー教徒を襲擊したり、施政地域に對する掠奪等の手段に訴へてゐる。

パシュトー語を用ひる。

主なる支族

アフリーディ族（別項參照）

オラクザイ族　アフリーディ族と風俗・習慣類似するが、體格は幾分劣りまたそれ程鬪爭的でない。

これを隱匿保護する、復讐を名譽ある務めとする、五年乃至三十年毎に土地を再分割する等がある。これらの仁義を守らなければ、一家一族、集團より指彈され、放逐される。復讐についても一般的な根強い風習をもつてゐる。然し慣習的律法あるとはいへ、部族民の間に金・女・土地に起因する紛爭と爭闘は絶えない。

教育・性質　パターン族の知識程度は印度農民よりも高いといはれる。山間部族の間には子弟教育の特定機關はないが、各家庭においては、勇敢・自尊・禁酒を目標にスパルタ式の訓育を施してゐる。パターン族は一般に自尊と自恃の念が至つて強い。彼等の中には、自族の居住地帶外に行く時は極めて尊大にかまへ、殊に西洋人には侮蔑の態度を示すといはれる。民族意識も著しく強烈である。しかし彼等の性格について、粗野・尊大・執拗・貪欲・殘忍を指摘する向きもある。

婚制　パターン族は一般に成人婚である。親族關係にかまはず、最高の花嫁料を支拂ふものに娘を與へるのが普通である。カーカル族は婚約後の性的關係を許してゐる。寡婦は死んだ夫の兄弟の妻となる遞次婚的慣習がある。また離婚は、簡單な手續だけで許されるが、多くないといふ。姦通した場合、當事者達は金錢や品物で償ふ慣習がある。男尊女卑の氣風が濃厚である。

宗教・葬制　パターン族は回教徒であり、大部分スンニー派に屬するが、バンガシュ、オラクザイ各部族はシーア派に屬する。回教兩派間の對立・抗爭も無視出來ないといふ。ムッラー Mullah といふ僧職の地位にあるもの、セーイッド seyyid といふマホメットの子孫が部族民より多大の尊敬をうけ。社會的に有力なる地位を保持してゐる。またその言動は、全部族の動向に至大の影響力をもつてゐる。屢次の英・ア戰爭におけるパターンの反英行動にはムッラーのつとめた役割は小さくない。

彼等の葬式は回教の慣習に從つてゐる。臨終の時には僧侶がその席に連なり、病人は適當の祈りをくりかへし、メッカの方向に顏を向けて息をひきとる。死骸は洗つて布につゝみ、僧の祈禱が濟んでから埋葬する。墓穴は上部は狹いが底は廣い。處によると死體を運び出すに入口からでなく壁を破つて出すところもある。一般に棺を用ひない。

服裝・生業　一般に頭髮を短くし、寬濶な襦袢風のものと、だぶついた洋袴をつけ布或は毛布の草鞋を履く。フェルト製のオーバーをつけるがそれにはゆるい袖がつくられてゐる。女は寬い赤、或は暗青色の肌着をつけ、廣い洋袴をはくときとはかぬ時とある。頭には頭巾をかぶる。

パターン族は、農耕、遊牧行商、運搬等を生業とする。山地方面は、高峻で雨量乏しいため耕作地に惠まれず、大部分の者の生活資料は他から求めなければならぬので、生活維持のため出稼するものも少くない。近來印度内部に移住し、工場その他の勞働に從事するものも多い。彼等の間には爭闘の絕え間なく、このため農耕、牧畜、果樹栽培が阻まれるのみでなく、他面彼等は銃器を偏愛し新銃器の獲得のためには金を惜しまぬ風があるので、部族、個人の收入は不足勝ちの傾向がある。これを補填するため、山間地域を通行又は居住する英人やヒンヅー教徒を襲撃したり、施政地域に對する掠奪等の手段に訴へてゐる。

パシュトー語を用ひる。

主なる支族

アフリーディ族（別項參照）

オラクザイ族　アフリーディ族と風俗・習慣類似するが、體格は幾分劣りまたそれ程闘爭的でない。

カーカル族　西北國境州及びバルチスタン北部山地に居住する。カーカルといふ共通の名稱を有する以外殆ど關係をもたぬ多くの分族より成つてゐる。性質勇猛であつて、酋長或は親族會議のやうなものをもたない。

シーラニ族　デラ・イズマイル・カン地方に住んでゐる。中身、顴骨高大、慓悍な容貌で、性質粗野、男性的である。バルガ Barghia 及びラルガ Larghia の分族より成る。主として農耕に從事するが、行商するものも少くない。

ハタック族　現在英國の忠實な屬民と化し、パターン本來の獨立不羈の山岳人的特質を失つた。英國のパンジャブ國境軍にはハタックから多數採用されてゐる。

モーマンド族　バジュールの南に居住し自らイスラエルの裔と稱してゐる。狂熱的反英感情を有し、これまで數次蜂起して掠奪、官憲襲撃、誘拐等をなし英國側を手こずらせた。

ユスフザイ族　（別項參照）

ワジール族　（別項參照）

バダガ族 Badaga

バダガ族は、マイソール州から南方のニールギリ山地に移住して來たドラヴィデアン部族である。十二世紀の後半期リンガーヤト派成立後、飢饉或は同宗派に對する政治的地方的壓迫のためこの移住行はれたといはれ、バダガ族は大抵リンガーヤト派である。キーン（A. H. Keane）は、バダガ族を前ドラヴィデアン族といひ、社會的に最低層に屬する未開山地部族とみてゐる。長身で身體型はトーダ族に似てゐる。バダガ族の人口は、一九三一年、四三、〇七五人を算する。

社會組織　グリッグ（Grigg）によれば、バダガ族は十八の相異なるカースト乃至分派を有するが、次の六分派に要約される。

一、ウダヤ族 Udaya　リンガーヤト派を信奉し、部族中社會的には最上級であり、リンガーヤト派バダガの僧侶カーストである。族內婚を行ふ。

二、ハールヴ族 Hāruva　ヒンヅーのシヴ派に屬する僧侶カースト、嚴格な菜食を實修する。

三、アディカーリ族 Adhikāri　リンガーヤト派に屬し、幾分菜食を實修する。

四、カナカ族 Kanaka　リンガーヤト派の勘定方のカースト。

五、バダガ族 Badaga　六、トレヤ族 Toreya　共に部族中の下級カーストで、上級カーストの下僕、部族のため下賤な仕事に從事する。シヴ派を信奉し、他のカーストとの通婚を禁ぜられてゐる。

住居　バダガ族の村は普通小高い丘の上にあり、きれいな茅葺或は瓦葺の家々が並び、麥畑に圍まれてゐる。一軒の家は、內室と外室とに分けられ、牝牛や水牛を飼つてゐる家では內室をミルク・ハウスとして牛乳を貯へてゐる。高い竹材造りの納屋をもつ家もある。

彼等間では女の地位は特別である。大抵の家では二三エーカーの耕地をもつてゐるが、これら戸外の耕作勞働は主として女が行ふ。男は現金のとれる他の仕事に從事する。女は勤勉で、よく働き粗食に甘んずる。この意味で一種の資本である。耕地をもたぬ家の女は雇はれて働いてゐるが、その勞銀は男子のより高いといはれる。

自治　バダガ族の自治は、以前はモネガー Monegar が行政の單位となつて運營されて來た。モネガーの任命

は大抵世襲であるが村中最も富裕な人におちつく。種々の問題は、その前で論議されモネガーが最後の決定をする。財産の分配のやうなことは、關係者以外のものは加はらないけれども、紛糾した事件は、村の第三者をも加へ、所謂年寄達の衆智をも參酌してモネガーが裁決する。斯ういふ場合、村の人口の近くのニーム樹或はピイパル樹の下に高座をもつくつてそこに集會をひらきモネガーが司會して事件を處理する。とにかくモネガーは行政その他に大きな力を有し、殆どその意の儘に支配することが出來た。族外婚を行ふ氏族においては、頭首及び助役があつて離婚その他のことを決定する。

宗教　バダガ族の宗教は、前述のやうに、リンガーヤト派或はヒンヅー・シヴ派等である。最も重要な神々は、ヘトテスワーミ Heththeswāmi マハーリンガスワーミ Mahālingaswāmi ヒリヤ・デヴ Hiriya deva マーデスワラ Mādeswara マーンカーリ Mānkāli 等で、各神について夫々祭祀を行ふ。平地へ下つて、シヴの寺院を拜むものも少くない。種蒔や取入れの際は盛んな農耕儀禮を行ふ。バダガ族の成員が嚴肅な誓をたてる時はシグールのマーリアンマ神 Mariamma の寺院へ行く。バダガ族については、火渡りの行事を忘れてはならない。これはヒリヤデヴ女神を祀るメールールの神祠で行はれる。その行者は齋戒沐浴し、晝頃一個の壇の上に燃料がつみ重ねられると、彼はその薪木に火をつける。そして夕方女神の行列が到着する頃火はその壇上に燃え擴つてゐる。祭司は、黃色な衣をつけ花環で身をかざつて靜かにその上を步き出すと、行者達もそれに續いて火を步き渡つて向ひ側につき、そこで溜池の水で足を冷す。子供を肩にかついで渡るものもある。火を渡る場合は、足の裏、毛髮、眉毛等に蘆薈汁を塗ることを忘れない。

ベタルハダの村近くには、日月、人、動物等の像を彫つた石欄にかこまれて一列のクロムレヒがある。バダガ族はこれを先祖の製作物として週期的に供物をする。クロムレヒは、この他ショルール及びメールールにも存在する。彼等はまた祖先の追想のため念入りの祭儀をする。

婚姻　同一氏族内の結婚は許されない。同じ村の住人は、同一氏族の成員の場合が多いから、男は自村以外のところから妻を迎へる。一般に成人婚行はれるが、幼兒婚も行はれてゐる。結婚は、求愛を先行條件とし、兩親の同意も必要とされる。女は意の儘に、離婚の形式を以て夫を替へることが出來る。また、その集團社會の埒內では、咎めもうけず夫以外の男との馴染を重ねることが出來る。

死期が迫ると、一枚の金貨を、牛酪或は凝乳の中に押しこんで死にかゝつてゐる人に渡し嚥み下さす。若しその力がない程衰弱してゐる場合、腕に結んでやる。しかしこの慣習は今日行はれないといふ。彼等の葬式は、極めて興味深い場面に滿ちてゐるが、省略する。

生業・性質　バダガは、ニールギリ山地における農耕を代表する部族である。以前移動耕作、雜段耕作等を行つてゐたが、これを廢止して正規の農耕方式をとり、部族の大多數は農耕者として働いてゐる。しかし、現在は、學校長、書記、大工、洋服屋、理髮師、洗濯屋、茶園及び珈琲園勞働者其他萬般の職業に從事し、高等教育をうけるもの或は富裕階級に位するものも認められるやうになつた。一般に勤勉で骨身を惜しまぬ性格を買はれるが、他面因襲にとらはれ、冠婚葬祭等に浪費する傾向少くなく、そのためロウィタン Rowithan（回教商人）から借金し、元利共尨大な負債の下に呻吟するもの少くないといはれる。またその弱點として食へなくなると怠惰になる傾向があるといふものもある。

言語は古いカナリー語に近い自族語をもつてゐるが、青年達はある程度タミール語や英語を用ひる。

註　★ビイバル樹 Bigl 印度人の神聖視する樹木の一、ブラーマ（梵）の住處として神聖なる紐を張りめぐらし、根に水を注ぎ、幹に赤い染料を塗つたり木綿絲をまきつけたりする。

パニヤン族 Paniyan

南印ウィナードを中心にみられる暗色、廣鼻、縮毛乃至波狀毛の前ドラヴィデアン部族である。一九三一年、三二、四一〇人を算する。ヨーロッパ人植民者はパニヤン族をマラバール海岸に難破して打ち上げられたアフリカ人の末裔といつてゐるが、定說はこれを誤りとしてゐる。十九世紀の中頃、入植者が初めてウィナードに入つた頃、パニヤン付きの土地を購入、以來パニヤンは地主の奴隷となつた。しかし奴隷よりいくらかましな狀態にあるといふ。

社會組織　パニヤン族には九支族がある。殆どすべてのパニヤンの村落にクータン Kuttan とよばれる村長がある。實際上パニヤン族の働く土地はナヤール族の所有であるが、彼等はクータンの任命にも關係を有し、その利害によつて決めてゐる。クータンの次に位するものはムダリ Mudali 卽ち家長で、彼等は通常長老會議（パンチャーヤト）を構成してゐる。そしてクータンとムダリとは、ムーパンマル Müppanmar（長老）とよばれる。司祭者或は神事執行者はチェムミイ Chemmi 或はシェムミオ Shemmi とよばれ、村落の人達の上位にある。彼等の役目は世襲で、その家が廢絕すると選擧で決める。

婚制　一夫一婦制を原則とするが、能力ある場合は數人の妻をもつても差支へない。花嫁は花婿の兩親がえらび、結婚式は極めて簡單である。寡婦の再婚は許される。姦通その他の惡德は、パンチャーヤトで判決を下し處罰する。姦通罪は、結婚の費用（花嫁料を含む）と同額の罰金を科する。出産祝ひの式など行はない。

宗教　パニヤンの宗教は極めて素朴である。あらゆる種類と形の惡靈を信じてゐる上に、ヒンヅーの神々を崇拜する。特に密林の神カード・バガヴディ神 Kad Bhagavati を崇拜する。この神は、他の資料ではクーリ神 Kali ともいはれ、一性をもたぬ怖るべきものであつて、その社祠は樹の下の石か、石塚の形をとる。こゝに煮飯、椰子の實、小貨幣等を供へる。年祭は珈琲園等で盛大に、一週間つゞけて行ふ。彼ははまた巨人のやうなバンヤン樹とか高く聳え立つ木を尊崇する。それには惡靈が出沒すると噂される。惡靈のうろつきまわる樹木に、人は觸れてはならない。それを切るならば病氣になると信じてゐる。パニヤンのあるものは、自ら動物に身をかへうる力を與へられてゐると信じてゐる。

生業・服裝其他　パニヤンは、往時富裕な職品故買者に雇はれ、珈琲泥棒を生業としたといはれる。今日は農耕に從事するものが多い。ナヤール族の地主、農家の準奴として働く。又大きな竹筵か川の流れを止め毒を流して魚をとる。彼等は籾を植えたり、牧放する時にはコンタイ kontai といふ籃樣の雨除けを傘帽の代用として冠る。竹造り茅葺の小家に住み、季節風前の不健康な暑季間は住居を川の近くか、涼しい處にうつし、雨期に入ると本據に歸る。婦女子も密林の木の根をほり野菜を採集する。彼等は熱病その他の病氣を除けるため手首、足首や頸のまわりを絲で縛る。男は指に眞鍮・銅鐵・銅の指輪を、耳に眞鍮の輪をつけ、女も同樣指輪及び手首に環飾をつけるが、又耳朶を廣くひろげ棕櫚の葉をつめて卷いておく。鼻孔に穴をあけて木をつめるものもある。

パニヤンは蛇、蜥蜴、鼠、豺、禿鷹その他害獸の肉を食はない。禿や白髮を防ぐために土蟹を食ふ。酒は特別

好きである。

女は一般に臆病である。男は大膽で、時折向ふみずの奴がゐる。

品のないマラヤーラムの土語を奇妙に鼻にかゝつた歌ふやうな調子で話す。

パリヤン族 Paliyan

この部族は、南印の北はマドゥラのパルニ山地から南はティンネヴェリ山地に至る山地に孤立した小集團をなして生活する。低身、縮毛、中鼻、中頭で、色は黒くないけれども唯の動物のやうな不潔な生活をなし、最も哀れむべき見込のない人間といはれてゐる。一九三一年、四八三人を算する。

パリヤンは働く努力さへすれば幾らも收穫がえられるのに、農耕、狩獵の觀念をもたず、胡桃、木根、蜂蜜、野生のヤム（薯蕷屬）等を食つて生活してゐるといふ。小家といつても葉でつくられ、端れのあいた一室だけのものである。集團の首長は老人であるが、首長の特權は、二つの火の間に眠れることゝ二人の妻をもつことが出來ることである。一般の住民は二つの火の傍にしか眠れない。全く無智で汚らはしく、數の觀念も明瞭でなく、極く少數の人許りが數をよむことが出來るといふ。

彼等には崇拜の場所もない。周圍の森の中に惡靈がゐると信じ、森林官憲と共に畏怖の對象となつてゐる。殆ど裸かで、ボロ切れを下げ絢つた草の帶を締めてゐるだけである。女は子供が生れると、着物や寢床もないので、暖い灰の上にねせる。結婚式も非常に簡單で、饗宴をひらき兩方の親族達が承諾を宣するだけである。疱瘡にかゝるものがあると、その村の周圍に繩張りし、全村民に他の村に近づくことを禁じ、そして村民は直ぐ家を

ひきはらつて長期間キャンプ生活をする。斯ういふ災厄を運命と考へ、藥等のまされない。それらはひとへに神々の不興によつて招來されたものと信じてゐる。

處によつては、樹の上、洞穴、岩の下等に住むものもある。また夜中火を燃やして野獸にそなへる。蜜蜂の巢を樹の空洞にみつけるのが最上の御馳走といはれる。經驗上藥草根の知識をもつのが唯一の財産といへば言へる程のもので、特殊の木の根から白い粉末の良くきく下劑藥をつくつたり、蛇にかまれた藥として、何かの葉から解毒劑をつくつて持つて歩いてゐる。

また彼等の間では、主なる宗教的儀式は三月行はれる。マヤーンディ神 Mayāndi として石を拜む、蛇形石が特に貴重と考へられてゐる。祭りの日、早曉に聖石の處に集り、石の前の穴に火を焚く。それから立派な雄鷄をもつて來て角笛や太鼓をならしてゐる最中に首を斬り、血を火の上にボタ〳〵垂らす。

しかし、パルニ山地、テンネヴェリその他、處によつてパリヤンの生活慣習も異るやうである。近來キリスト教の影響によつて固有の慣習をすてゝしまつたものもある。一般に性質は、臆病であるといはれる。特殊の調子を帶びたタミール語を用ひる。

パルジャ族 Parja, Poroja

バスター土侯國の中部及び東部並にマドラス州のジャイプールに見られるゴーンド族の分派である。バスターではドゥルワ Dhurwa マドラスではボロジャ Poroja として知らる。一九三一年、一四〇、七〇二人を算する。

體質的特徴は、廣頭、廣鼻、眼裂正位、皮膚は銅色で暗色のもの少く、低身である。

部族はバスターに住むタガラ Thakara (Tagara) ペング Peng ムダラ Mudara の三支族を有し、またトーテムを有する族外婚の若干の氏族がある。氏族の名はゴーンド語で名を借りてゐる部物に對しては、夫々タブーがある。

同一氏族内の結婚は、原則上禁じられてゐるけれども、氏族の數が少いため固守されず、同一村落のものでない限り、同一氏族内の結婚は許される。結婚祝ひに、彼等はスルチャ Surcha といふ踊りをおどる。長い上衣の特別の衣裳とターバンをつけ、肩に二三枚のズカーフをかけ、兩脚に小鈴を貫いた紐を結び、珠數玉のついた花環を首にかけた男女は、時には別々に、時には一緒に、長い列となつたりまた環をつくつたりして踊る。竹笛、太鼓及びフルートに似た鐵製の樂器で伴奏する。また踊りには、男の列、女の列から、交互に問答の形式で歌がうたはれる、卑猥な歌が普通であつて、この問答歌のため、時折夫婦喧嘩が起つたりするし、踊つてゐる中に戀におち、脱落ちする男女もある。

結婚式は、二つの結婚小舍の造られた花婿の家で行ふ。式場へは花嫁の家族は行くことを許されないので、花嫁は親族のものにつきそはれて行く。これはおそらく往時の掠奪結婚の遺風であらうといはれてゐる。寡婦の再婚は許されるが亡夫の弟と結婚しなければならない。强制しても、彼女がそれを欲しない場合は、兩親に勘當される。

パルジヤは一般の未開部族のやうに、山や森林の神々を崇める。神々の中には、バスターの守護女神ダーンテシュワリ Dāntēshwari がある。極く少數であるがラーマーナンディ派 Rāmānandi sect. に屬するものがあり一般部族の特別待遇をうけてゐる。大抵の村落にはシルハ Sirha（神懸り）といふ役目の者がをり、宗教的行事等に種々口添へする。またメダ・ガンティア Medha Gantia とよばれる役目のものがゐて、結婚の日取等を決めてゐる。

死體は頭は東、足を西に向けて横たへ土葬する。死後の世界は西方の日の沒する方向にあるから、墓の中に足を西方に向け旅立ち出來るやうに横たへるのであつて、おそらく最も原始的な埋葬法といはれる。

パルジヤは普通農耕を生業とする。つましい骨身をおしまぬ農耕者である。彼等は鷄肉、豚、猿、大蜥蜴、野鼠、野牛、野水牛等を食ふけれども、肉食獸、鰐、蛇、豺等は食べない。

バルティ族 Balti

カシミル地方北部に居住するモンゴロイド牧畜部族で、チベット族に屬する。

以前佛教徒であつたが、現在は回教を信じてゐる。

バルティは頭を短かく刈りこみ兩側の長い捲毛だけにしてゐる。

バロック族 Baloch

この部族は、バルチスタンの東部及び南部、シンド、カッチ地方に分布する。イラン族、アラブ人、印度人の混血種で、リズレーは、トルコ・イラニアン型の中に入れてゐる。しかしパターン族よりも身長低く、痩せてゐるが、粘りがある身體付きである。一九三一年、八五四、一六四人を算する。バロック族は、アレッポを自らの故郷と稱してゐる。七世紀の初頃からマクランに居住し、こゝを本據に東方に擴がり、十五世紀にはカッチ地方

に分布した。

バロック族は、ノーシルワニ Naushirwani ボリダ Bolida ルムリ Lumri リンド Rind その他の支族に分れる。ノーシルワニ族はイラン族の裔、ボリダ族はアラブ人、ルムリ族はラージプウトの各裔といはれ、リンド族はアラブ人の一派コライシ族に源を發するといはれてゐる。部族の中ではリンド族が最も勢力がある。

バロック族も、ブラウイ族のやうに血緣的集團といふよりは、寧ろ政治的・地域的集團であり、各族長を中心に有機的結合をなしてゐる。新入者はまづその部族のことについて善惡に拘らず分擔奉仕し、漸次部族共有の土地を得て部族社會に對する一定の利益を主張しうる資格を得る。從來共多數のジャト族を併合してゐる。

成人婚で、實の從兄妹間の結婚が普通希望される。ブラウイ族のやうに姦通常事者には死刑を課する。

回教を信じ、一般にスンニー派を自認してゐる。しかし僧侶に對する尊敬、心服の度合はパターン程深くない。

葬制其他の慣習は、回教風である。

バロックは一般に自己の所有地を耕作するとか、家畜飼養、運搬等を生業としてゐる。妻は仕事の大部を分擔し、主婦としての仕事の他に夫の馬飼養及び耕作を手傳つてゐる。彼等は肉、乳を尊重し、小麥製のパン及びチーズを主食とする。マクランではデート椰子、乾魚を主食としてゐる。

バロックは立派な男らしい種族である。その性質は、自由を熱愛し、パターン族等に比べ愼重である。また勇氣を第一の美德となし、大膽であるが、淡泊であり、信賴出來るといはれる。外人を欺待することは一つの神聖な德と考へてゐる。バロックは各族長の下に統一されてゐるので統御し易く、扱ひ易い。騎馬に巧みで、大抵男は劍、小刀、楯、馬をもつてゐる。

彼等は髮を長く伸ばし油で縮らしてゐる。踵まで屆き腰の處で襞をとつた上張りを着、寬りした洋袴と長い木綿の頭巾をかぶつてゐる。頭被は、一般に小さな頭巾の上に螺旋卷にして加へてゐる。

インド・アーリヤ語系バロック語を用ふ。

パンドオ族 Pando

この部族は主としてウダイプル土侯國のスモブル、テジブル、ライルマクルド及びダットリ・ゴグラ等の村に居住する。

ウタルハ Utarha スルグジハ Surgajiha の二支族より成り、更に動植物の名を有する多くの族外婚の氏族に區分される。厚い壁と材木で造られた丈夫な家屋に住み、各家屋は平坦にされた矩形の廣場を圍んで建てられてゐる。

娘は十歲から十二歲、男は十八歲から二十歲迄に結婚するが、婚約は通常親達がとゝのへる。婚前に子供が出來ると二人は結婚しなければならない。結婚式は祝婚櫓を七回廻る儀禮がその中心をなしてゐる。

パンドオは、バライハン神 Baraihan を崇拜しまた祖先を尊崇する。祖先の祭は二月と收穫時と年二回行ふ。太陽を崇めるが禮拜はしない。

死體は北枕に土葬し、墓に二、三呎の大きな石を立てる。死者の靈の活動の糧にとてダーンや水を墓の上に撒く。死者の靈は同氏族の新しく生れる子供に生れかはると信じてゐる。

チヤッティスガル語と自族語の混合語を用ひる。

ビール族 Bhil

この部族は、アブ山とアシルガルとの間の荒野や山地々帶を中心に中央州、中央印度、ラジプタナ、ボンベイ州、ハイデラバートの諸地方に分布する。本來の方語を失つてゐるので、コラリアン種族かドラヴィデアン系か明かでないが、グリアソン G. Grierson はコラリアンと見てゐる。南ラジプタナ及びグジェラート最古の住民といはれ、ラージプゥト族は今尙ビール族を自分達の住む地方の先住者、占據者と考へてゐると云ふ。

類緣部族　ビール族と類緣關係にたつものは、ビラーラー Bhilala（一九三一年、二三二、二三〇人）ダンカ Dhanka マヴチ Mavchi バレラ Barela ナーハル Nihal ラーティア Rathia マンカル Mankar パトリア Patlia（一九三一年、一九、九五二人）其他の部族である。ビラーラー族は、貴族的なビール族とラージプゥト族の通婚の結果出來たもので、社會的にはビールの上に位し、農耕者、作男のカーストを形づくり、ニマール及びホシャンガーバードに多く見られる。パトリア族は主としてジャブア土侯國其他に居住するが、ビラーラー族と同樣ラージプゥト族とビール族との混血で、放浪癖が強いといはれる。ビール族及びその類緣部族人口は、一九三一年二、四五四、一四四人を算する。

身體的特徵　ビール族は、低身、皮膚暗色、廣鼻、長髮で外貌は醜い。しかし總じてがつしりした活動的な體軀で、手は幾分小さいが脚はよく發達し、特に女の脚は立派といふ。女は頭髮を編んで三本の尾のやうに垂れてゐる。

社會構成　ビール族の各村落には世襲的な酋長がゐる。村落に關する一切の問題は、パンチャーヤトといふ機關によつて處理されてゐたが、今日この機構も崩れてゐる。中央州のビール族は大體マホメダン・ビールとさうでないもの即ちヒンヅー教徒や精靈崇拜者のビールとに分れる。マホメダン・ビールは回教改宗者の集團であるが、名目のみのもので精靈崇拜者の要素を多分に殘存し、族內婚を行ひタドヴィ Tadvi といはれる。非回教ビールは外來者を自族の中に入れることを許さないが、回教ビールは不淨カーストの者でないならば編入を許す。中央州に限らず、ビール族は、一般に動植物の名を有する多數の族外婚の氏族に分れる。

婚制　彼等は同一氏族內及び母方或は祖母の家族と結婚しない。實の從兄妹の結婚は禁ぜられ、二家族間で娘を交換することも出來ない。また妻の姉妹は妻の生時中は結婚出來ない。更に現在ヒンヅーの影響を蒙り、屠殺者、鞣皮工、乞食その他の職業の家族との通婚を禁止する傾向がある。結婚は成人婚であるが、ヒンヅー風に幼兒婚が行はれるやうになつた。結婚をとゝのへるのは親同志であつて、花嫁料を花婿の父親から花嫁の父親に支拂ふが、金の代りに七年乃至九年の間男が女の父親の家で勞役を提供することもある。（ガール・ジャマイ Ghar Jamai 勞役婚）。結婚式は華かな極めて興味ある光景に充ちてゐる。正式の儀式は多數の費用を要し、多くの男はこれを生み出せないので形だけの婚約をすますと、女を突然力づくか或はこつそりと連れてくることも行はれる。即ちギスカルレジャナ ghiskarlejana（掠奪婚）であるが、これも長老會議の同意を得戀に陷ちて男と駈落した者達が行ふ形ばかりの儀式を行つて合法化出來る。寡婦の再婚は許され、亡夫の弟と結婚せねばならぬ條件もない。離婚はどんな理由でも許される。夫をすてた女と同棲する男は、女の夫に對し、彼が妻を娶るに要した費用を支拂はねばならない。

相續　遺產は、死者の息子達が皆一緒に住んでゐる場合等分される。さうでない時は、財產の半分は末弟に付

與され他の半分は兄達の間に分割される。末弟は父のヌクタ祭（死後十二日目に行ふ宴會）の費用を負擔する他姉妹達の分前を用意することになつてゐる。酋長が死んだ場合、その地位の繼承は長男に限らず最上の適任者を長老會議で選定する。息子のない時は、家族内から選ぶ。寡婦は再婚しない限り、亡夫の財産を主宰する。

死體は火葬或は土葬である。土葬の場合大抵仰向けに頭を南に向けるが、苦行者は坐位の儘葬る。

宗教　非回教徒のビールは、マーハデオ Mahadeo 其他のヒンヅー神、地方の村落の小神や森や山の神を崇拜す。しかし回教、非回教の別なく、ビール族精靈崇拜的迷信を多分にもつてゐる。彼等は死人の精靈の生れ變りを信じ、それを特定の玉蜀黍の實の形と關係づける。その實がもし人の足跡に似てゐれば人間に生れ、蹄に似る時は有角類に生れ變ると信じてゐる。また冥府の神ヤマ Yama は南方から來て死者の精靈を北の方へつれて行くが、そこは三つに分れ一つは甘露に充ちてゐるが、他の二つは程度の差こそあれ穢土であると信じてゐる。彼等は惡靈を種々の災厄の源と信じこれを祓ふために呪術師の結んだ護符や守札を身につけてゐる。呪術信仰は彼等の間に極めて盛んで、不幸、災厄のある度毎に呪術師が呼ばれる。彼は神がかりの狀態となつて、その原因を人々に告げしらせる。そして呪術師が一般の宗教的祭儀を司つてゐる。

ビールはまたオルデアル Ordeal といふ神意裁判を行つた。それには火を握つたり、手の平に矢を以て穴をあけたり、有毒の蛇や果實を食べたりした。誓約には月や犬に誓ひをたてる。なほ非常に現在行はぬけれどもマタ神 Mata に對し人身供犧したといはれる。

ビールが、戰さで死ぬか野獸に殺された時は、死んだ場所に馬の背に立つてゐる一人の男の像を彫刻した一本の石をたてる。サトプーラ山地ではタドヴィ集團の重要人物の記念碑がみられる。それは三呎半位の人間の像を彫刻した石とその前の小さな木製のブランコ樣のもので、ブランコは死者の靈魂が留つて樂しむためのものといはれる。

生業　ビールは外出する際必ず弓矢をもつてゐる。弓は二本の彈力ある竹で巧みにつくられたもので、その薄い方を弦の代りとする。矢は輕い葦でつくり羽をつける。矢の尖端に毒を塗り虎狩等をする。ビールは農耕に從事し、作男、下僕として働く。彼等は狩獵や樹木の伐採にも巧みである。しかし、放浪癖や掠奪、窃盜等惡德に馴染むものも少くないといふ。特に回教徒ビールは、怠惰で締りなく阿片吸飲の惡習にひたり、悲慘な運命のものが多い。一般に、舞踊、歌、飲酒が好きである。ビールは、社會的にはカースト外の賤民とされ、奴隷視されてゐる。

本來の言葉を失ひ、周圍に通用されてゐるグジャラティ語とマルウィ語から派生した方言を用ひてゐる。

ビルホル族 Birhor

チョタ・ナグプールを中心にオリッサ、ベンゴール等に見られるドラヴィデアンの未開小部族である。一九三一年、二、三五〇人を算する。密林の中に木の枝と葉で小家を造つて住んでゐる。部族は若干の族外婚の氏族に分れる。成人婚行はれ、儀式はゴーンド族に倣つてする。村には男女のデルワ・ガル Derwa Ghar といふ獨身者集會所がある。しかし男女は別々に住んでゐる。

子供が生れると母親が臍の緒を切るが、家の前に埋めないで生れた所に埋める。生れて七日目に祖先に鷄を供犧し、ミルクで子供の足を洗ふ。壺の中に水を入れ、祖先の名が順々に呼ばれる度毎に米一粒宛壺の水の中に落

されるが、米粒の中浮いたものがあつた際呼ばれた祖先の名を子供につける。

彼等の宗教は、精靈崇拜（アニミズム）とヒンヅー教の混合である。マハ・デオ Maha Deo を崇拜し十一月の祭りに椰子の實や蒟醬（キンマ）を供へ、またビル・ブウト Biru Bhut やダラー Darhā 等の神々を崇める。

死體は土葬或は火葬に付するが、土葬の際は仰臥の姿勢で北枕或は南枕で葬る。火葬の場合は、骨灰をガンジス河又は近くの小川に投げ入れる。死者の親族は十日間髭も剃らず喪に服する。

ビルホルは野兎や猿を罠で捕へたり、密林生産物を採集特にチョブ蔓草（Banhinia scandens）の皮を採つて貧しい生活の足しにしてゐる。蔓草から粗繩をも作つてゐる。勞働者として働きに出るものも少くない。

彼等は牝牛・猫・蛇・兎・熊を除けば、どんな肉でも食ふ。特に猿の肉を好み、カレー料理に入れて食べる。

ムンダーリ語を用ふ。

ビンジワール族 Binjhwār, Binjhāl

中央州のライプール、ビラースプル兩地區及近くのウリヤ地方に住む比較的ひらけたドラヴィデアン部族である。バイガー族の分派であつて、事實上バイガー族の地主層にあたる。一九三一年七五、七七四人を算する。

ビンジワール、ソンジャラ Sonjhara、ビルジア Birjhia、ビンジア Binjhia の四支族に分れ、また虎その他種々の動植物の名をもつトーテム的氏族に分れてゐる。成人婚で、娘は夫を選擇することを許されてゐる。花婿は花嫁料として籾八カンディ★をその親に納める。娘が部族の男に口說かれ姙娠すると、村の人達に御馳走し、長老會議の面前において略式で結婚せねばならない。斯樣にして一緒になるのは、正式の結婚と同樣の效果をもつと考へられゐる。

結婚は雨季の四ケ月及び三、五、十二の三ケ月は避けられる。式は日曜に始まり、月曜は花嫁の形式的な受納式、火曜は薫香の儀式、水曜は祝婚式を行ふ。火曜の式には七人の既婚の若い女達が鬱金で黃色に染めた新衣裳をつけ、花婿を導き乍ら祝婚標の周りをまわる。彼女の中一人は米やマンゴーの葉等を入れた皿をもち、他の女達は小壺から水をふりまく。一廻する毎に花婿は皿から若干の調味物を手にとつて祝婚標にむかつて投げ、七廻りした後席につくと、油と鬱金をなすりつけられる。ビルジア支族の間では結婚小舍（パンダル）に二股に分れるマフア樹の幹をたて、これに米の一杯入つた唐箕を置き、その上に匕首を置く（匕首は花婿、唐箕は花嫁を示す）。花嫁はまづひとりで祝婚標を七度廻り、それから花婿が廻り、最後に二人一緒に廻るのである。一般に多妻婚は許されてゐる。地主の中には、五、六人の妻が居つても、地所の殖えた祝ひに新婦を迎へるものもあつたといふ。

死體は土葬するが、三日目に墓の上に生米と燈をつけたランプをおき、昆蟲がランプにとんでくると捕へ、それを小麥粉でつくる菓子の中に入れる。そしてその菓子をもつて小川の傍に行き、色飯を供へて拜んだ後、小川の底の砂泥の中に草箒で押し入れる。これはカールパーニ Khārpāni（草と水）の儀式といはれ、死者の靈を鎭める法と思はれる。

ビンジワールは、チャッティスガル地方に廣く信ぜられる村神やゴーンド族の主神ブラ・デオ Bura Deo を崇める。四月十一日はカルマ祭を祝ふが、これは五月祭、或は收穫祭のやうな農耕儀禮で、若い男女がカルマ karma の木を伐り取り、歌ひ且つ踊り、太鼓をならしながら夫々家にもち歸り、それに供へ物するたのしい祭である。

ビンジワールは、男女共概して白い汚れた衣服を身に纏ふだけである。山地に住むビンジワールは長い縮れた

頭髪と長い髭髯をもつてゐるが、平地では頭髪を短くし髯を剃つてゐる。女子は未既婚にかゝはりなく文身する。

ビンジワールには通常農耕者、勞働者が多く、土地、家屋をもつものも少くない。村神の司祭となつてゐるものもある。

食物の上では差別をつけず、豚、蛇、鼠、豹其他食肉獸の肉等なんでも食べる。

註　★カンディ Khandi 印度に行はれてゐる衡量名目で的五百听に當る。

ブーミジ族 Bhumij

マンブーム、シングブーム及び西ベンゴールの非アーリアン部族であつて、言語的根據からコラリアン種族として分類される。一九三一年、二七四、〇一八人を算する。ムンダー族とは、同一でないにしても言語・慣習等において深い關係を示してゐる。この意味で、ブーミジ族は、東方へ發展したムンダー族の一分肢とみられてゐる。短身、頑丈、肥滿型の傾向があり、皮膚は暗褐色から明褐色まで色々である。外貌はチョタ・ナグプールのムンダー族より劣る。

ブーミジ族は、シェロ族 Dhelo（鎔鐵を生業とする）　デシ族 Desi 其他多數の支族があり、また多くのトーテムを有する族外婚の分族をもつてゐる。

成人婚の原始的慣習が行はれてゐるけれども、他方富裕階級は娘の幼兒婚を好んでゐる。多妻婚を認め、妻の數については制限はない。といつて、一般は貧乏なので、多妻の放逸に陷るのを適度に抑制する結果となつてゐる。寡婦の再婚はサンガ sanga といふ儀式により許されてゐる。マンブームのブーミジは、女が姦通罪を犯した時に限り離婚を許すが、それには親族會議を招集し事實を訊いた上決める。

遺産相續や繼承については、ヒンヅー法に從ふ。財産の分配には長男に餘分の分前を與へ、次、三男には小額の扶持を規定してある。子供のない場合、寡婦は分前として終身所有地を得る。

ブーミジの宗教は多樣であつて、個々人の社會的地位や地方の狀態により區々である。ザミンダールや借地主は、家族の祭司としてブラーマンを雇ひつけ、カーリ神 Kali 或はマハーマーヤー Mahāmāyā に供犧する。一般大衆は、シング・ボンガ及びダールム Sing-Bonga, Dharm の名の下に、太陽を收穫の供與者、四季の變化の原因として崇拜する。またジャーヒル・ブル神 Jāhir-Buri カーラーカーター神 Kārākātā バーグヴト神 Bāghut その他の小神に種々の供物をそなへて拜む。チョタ・ナグプールの部族の間にみられるカラム祭 Karam をも行ふ。

ブーミジ族の埋葬式はいくらか特徴がある。死體は、火葬堆の上に頭を南にむけて横たへる。堆には親族の男が點火し、よく燃え上つた時彼等は歸宅する。そこで、今度は死者の妻、姉妹その他關係ある親族の女達が水の入つた土器をもつて火葬場にやつて來て、燃えつきるのを待ち灰に水をかけて消し、骨を拾つて土器の中に入れて持ち歸る。そして骨の若干を死者の家の中庭にあるトゥルシ樹の根元に埋葬する。殘りの骨は土器に入れて、家族の昔からの菩提所にもつてくる。そこでは既に穴が掘られてある。骨壺は三つの石で支へて中に入れる。その上に土をかけ大きな平石をすつかり蔽ふやうに置く。そしてそこで死者が安らかに眠るやうにと鷄を供犧する。それが濟んだ後遺族達はダール dal（豌豆類）や青物を食べる。

ブーミジは手廣い丈夫な家に住んでゐる。ベンゴール人の間に生活するものは昔の習俗を失つてゐるが、歌や

踊りの樂しい集會だけは行つてゐるといふ。

ブーミジは、かつて保有してゐた單純と誠實の德を失つたといはれる。リズレーは一般にコラリアン種族は訓練を好まぬ特徴があり、ブーミジ族にもあてはまることを暗示してゐる。マンブームのブーミジは往時軍務に從事してゐた。シェロその他の支族は農耕を生業とするが、地主、作男、單純耕作者が大部分である。

社會的にはクルミー族の下位にある。

ブイヤ族 Bhuiya, Bhūinhār

チョタ・ナグプールを中心に、ベンゴール及びオリッサに分布する地方有數の部族で、特にチョタ・ナグプール最古の住民の一として、同地方の支配的地位にある。本據はチョタ・ナグプールの南、ガーングプル、ボナイ、ケオンジハル、バームラ土侯國等である。一九三一年に六二一、〇六二名を算する。元來、ブイヤは、梵語の「土地の主」の意であつて、他の部族やヒンヅー教徒等も地主の稱號として自らこれを濫用するやうになつたので、ブイヤ族自身について若干の混亂を生じた。ブイヤ族の酋長等は、ラージブゥト族と稱してゐるが、高貴ぶりたいからであつて、根據のないことである。他面これらの事實は、ブイヤ族がいかにヒンヅー社會化してゐるかを示すものである。

ブイヤ族の由來についてダルトン大佐 Colonel Dalton はドラヴィデアン種族とするが、ラッセルはコラリアン部族とみてゐる。そしてバイガー族は實にブイヤ族の分肢であり、もとチャッティスガルにゐたのが現住地方へ移つたものとしてゐる。

リキアサン・マハトワル Rikhiasan Mahatwar　カンダイト或はパーイク Khandait or Pāik　パルジャ Parja　ラウタディ Rautadi　パーブディア或はマーダイ Pāhudia or Mādhai　カーティ Kāti 其他の支族に分れ、サンバルプル地方では更に多數の氏族に分れる。支族中、パルジャ支族は、通常のブイヤ族であり、カンダイト（パーイク）支族は、軍人のカーストで、オリッサではかなり高級の別個のカーストを形成する。

ブイヤは、元來成人婚の慣習があつたが、その後ヒンヅーの習俗をとり入れて幼兒婚を競ふやうになつた。パーブディア支族は、オラーオン族と同樣獨身者合宿所を有する。彼等はこれをダーンガルバーサ Dhāngrbāsa（若者の家）又はマーンダルガル Māndargar（太鼓の家）と呼び、獨身の男女は、大きなこの家に寢む。こゝの生活は非常に自由であり、男女共に相手をさがすにつとめ、その際品行等についてやかましくいはない。斯うして仲良くなつた男女は結婚するが結婚の相手は他村のものでなければならぬことになつてをるので、仲良くなつても結婚に了らぬ場合も起る譯である。

寡婦は、亡夫の弟にひきとられ一緒になるのが普通である。尤もブイヤ族には兄弟間の多夫婚の遺風があり、未婚の弟は、兄の健在中にもその妻と同衾することを許されてゐる。姦通のため離婚された女は、二度と世の中のつきあひに出ることを許されず、その親にひきとられ、隔離舍の中で餘生をいとなまねばならない。

ブイヤは、一般に主神として村の上に仰がれる眞近の山の靈を崇め、牛酪、米、家禽等を供へ、四月には初物のマンゴーの實を供へる。また太陽をダラム・デオタ Dharam Deota として敬ふが供物はあげない。更にメガネ蛇を崇め、それを母と呼び自分達の先祖と考へ、觸れたり、殺したりしないし、またそれによつて誓ひをたてたりしない。十月或は十一月に森の中からカルム Karm（棗椰子）の枝をとつて來てそれを拜み、それからその

前でカルマの踊りををどる。これを踊れば、カルム・マンゴーその他波羅蜜樹等がよく實を結ぶと考へてゐる。

死體は火葬或は土葬に付する。土葬の場合はその生れた村の方へ足を向けて葬る。十日目にその靈魂が家に歸るといはれてゐる。虎に殺されたり、木から落ちて死んだ場合は喪に服さない。靈魂も歸らないといはれてゐる。

ブイヤは、暗褐色の皮膚をもち、均齊のよくとれた身體の部族である。黒色の直毛は頭部に豐富であるけれども顏毛は乏しく、身長は中位、概してよく出來た身體つきで耐久力に富んでゐるが、さうかといつて山岳人の頑丈な筋肉型でなく、むしろ痩型の體格である。衣服は木棉の褐衣をつける他、あまりまとはない。裝身具と珠をつけ、男女共文身しない特徴をもつてゐるが、女子の文身する地方もないではない。

バームラ地方のブイヤは、部族中最もひらけず、移動耕作を營んでゐた。この地方では貨銀によつて作男や勞働者となるものはなく、從前は御しにくかつた。しかし、その他の地方のブイヤは溫和しく御しやすい。荷物擔ぎや苦力をなし、小土侯等から土地を獲て働いてゐる。

彼等は、本來の言語を忘れ、ヒンドゥスタン、ウリヤ、ベンゴーリ語を用ひてゐる。

ブラウイ族 Brahui

この部族はバルチスタンのカラト土侯國のサラワン及びジャラワンの兩地區に、ケラットの汗王の指導下に一つの部族地域を形成してゐる。一九三一年、一五二、五八八人を算する。ブラウイ族はバルチスタンに於いては支配的地位を占め、ケラットの汗王はブラウイである。リズレーは、ブラウイ族をトルコ・イラニア型となしてゐるが、最近の研究ではイラン系の混血はあるが、地中海人種とする說有力であり、またその言語もドラヴィデアン語とされるに至つた。ブラウイはバロックやパターン族より身體小さく、皮膚は暗褐色、顏面廣く丸顏、顴骨高大、モンゴロイド的風貌をもつてゐる。近來バロックとの通婚次第に增加し、部族によつては判決し難いものがあるといはれる。

ブラウイ族は、サラワン部とジャラワン部に分れ、夫々指導者を有する。更にサラワン部には、ライサニ Raisani シャーワニ Shāhwani ムハマッド・シャヒ Muhammad Shahi バングルザイ Bangulzai クルド Kurd レーリ Lehri サルバラ Sarparra 及びランガウ Langau の諸部族がある。ジャラワン部は、ザーリ Zahri メンガル Mengal ミルワリ Mirwari ビザンジャウ Bizanjau ムハマッド・ハスニ Muhammad Hasni or Mamasani 其他の族に分れる。そして、サラワン部はライサニ部族の酋長、ジャラワン部はザーリ部族の酋長が夫々指揮に當つてゐる。これらの部族は更に多數の氏族に分れてゐる。ブラウイ族全體が結合するのは、共同の敵に對する場合で有事の際は各部族間の結合が行はれるが、各部族內の調整は酋長が各氏族の長等の協力を得て行ふ。しかしブラウイの部族的組織は、バロック族のやうに政治的集團であつてパターン族の如き血族的集團ではない。新入者は、一定の條件を充すことによつて部族の一員となることが出來る。從來共多數のジャト族を自族に併合してゐる。

成人婚を行ひ、實の從兄妹婚が常に希望される。回教のスンニー派を自認するが、シーア派の敎義にも影響されてゐる。姦通當事者には死刑を課する。しかしブラウイは、回教以前の神々や陽石を崇拜する等、精靈崇拜の殘存物を多分に留める。環狀石籬を利用して踊つたり、呪術師の踊りで惡靈を除祓する祭儀をも行ふ。しかし、彼等の葬制は、回教式に、パターン族のに似てゐる。

ブラウイは山羊の髪で造つた天幕にすみ、冬季は山間に歸つて多少の耕作を營む。しかし、概して農業を好まず、遊牧生活を主とする。從つて、その土地は、賤民的な農民集團に屬する小作人によつて耕作されてゐる。獸肉を常食とし、山地々方では切乾した肉を冬の食料として貯藏する。

ブラウイは膝までの上衣をつけ、右肩でとめてゐる。黒色か褐色に染めた幅廣いズボンをはき、頭にはフェルト帽かターバンを冠つてゐる。草鞋か、重い飾り靴をはき、上衣の上に胴衣や黒いコートを引掛ける。女は種々刺繍した一枚の長いシュミーズを着けるが、結婚すると一種のコルセットをしめる。髪は二つに分け後で結び、それに長い木綿の頭巾を被る。

ブラウイの性質は、直截、開放的且つ親切で、良く人の恩義に感じ平和を好む反面、勇敢で忍耐力に富んでゐる。掠奪を行ふが窃盗を働かない。復讐心はつよいが、裏切りを行ふことはないといはれる。

ドラヴィデアン語系ブラウイ語を用ふ。

ブルヴン族 Puluvan

南印コイムバートル地方に居住する小部族で傳來の仕事は軍務であつたが、現在は大部分農耕に從事してゐる。

娘は年頃になつてから結婚し、死體は土葬、火葬共行はれてゐるが、後者の要素が強い。

ブルヴンは、コイムバートルのヴェラーラ族の間では學者といはれてゐる。その習俗は、コンガ・ヴェラーラ族のに似てゐる。

ブンジア族 Bhunjia

中央州のライプル地區にみられる小ドラヴィデアン部族でチャウクゥティア Chaukhutia とチンダ Chinda の二支族に分れる。前者の素性はゴーンド族とハルバー族の混種、後者はバイガー族の系統に屬するといはれてをるから、ブンジア族は、これら三族の派生族とみることが出來る。

チャウクゥティア支族は、その素性が純正でないだけ、自族の社會的評價を向上させやうと、儀禮上の形式を馬鹿らしい程嚴守する。

また彼等の間では、年頃になつた徴が娘の結婚前に表れるのは非常な罪となし、これをさけるため（相手がみつからぬ場合は）カーンド・バイアー Kund Byäh（矢の結婚の意）をする。卽ち娘は地上にたてられた矢の周りを七度廻る。そして豫めの手配によつて、矢をもつて來た男と娘が式擧きで一緒になるのである。チンダ支族の娘が婚前に部族外のものと過ちを犯して姙娠したやうな場合極力もみ消しにかゝるが、チャウクゥティア支族では、娘を社會からしめ出す。たとへ姙娠しなくても斯樣な罪を犯すと、同樣峻嚴な處罰をうける。

ブンジアは三年毎にコレラと疱瘡の神マータ Mäta に山羊と椰子の實を供へて拜む。毎日太陽に手を合せて拜むが、それは借金の返濟に御利益があるからといふのであつて、返濟してしまふと感謝の徴として椰子の實を供へる。また龜を神の踏臺と考へて崇める。

彼等は豚肉を食ふが牛や猿の肉を食べない。怪我して、氣のふれた男は、銀と銅の指輪をつけ鬱金粉を混ぜた水をのむと淨められると信ずる。

女は月經時の七日間隔離され、その間家に入ることも、家の中にあるものにも觸れることが出來ない。ブンジアは食物を葉の皿に盛つて食べる。外來者は家の中に入れず、彼等のための小家を別にまうけてゐる。ブンジアの女が外で働く時は嬰兒を屋内に置かずに、小さな襤褸で包み腕の下に結はへて連れて行く。またブンジアは日本の灸のやうなものを試みてゐる。彼等は大抵の病氣の萬能手當として火箸で皮膚に燒きかたをつけるのである。頭痛、胃痛やレゥマティス其他に特效があるといはれる。

ベディアー族 Bediā, Bedeā, Bejeā

チョタ・ナグプールの小ドラヴィデアン部族である。クルミー族と通婚してゐたが、ベディアーが牛肉を食べたことが分つてから分離したといはれる。ベディアー族は、ムンダー族と關係あるといつてゐないし、ムンダー族自身も同族と見てゐない。トーテムを有する數分族がある。結婚の時には、理髮師が司祭者の役をつとめるといふ。

サンタール族の分族にもベディアーの名をもつものがあるが、チョタ・ナグプールのベディアー族は、サンタール族の東方へ移動した一分肢と考へられなくもない。しかし、東ベンゴールのベディヤー族とは關係はないといはれる。

ベンドカール族 Bendkar

ケオンジハルに居住する部族で、サヴル族の一派とみられてゐる。小社會をつくり、ケオンジハル内廣く散在してゐる。

男は耕作に把手と彎曲部共一本の木でつくつたのを唯一の道具として用ひてゐる。おそらく犁の原始形態を示すものであらう。

ベンドカールは農耕に鐵や牛を使用しない。牛は神への供犧のためにのみあるものである。

ボーティア族 Bhotia

ブータン國の支配種族である。十七世紀の中頃ブータンに侵入し來つたチベット兵と原住民と通婚して出來たのがこの種族の祖先といはれる。身體的特徴は、中頭型に近い廣頭、中鼻、長身、皮膚は暗色、顴骨が出てゐる。ボーティア族は、僧侶・貴族・農民の三階級乃至身分に分れてゐる。ラマ教徒と稱してゐるが、佛教の傳來する以前チベットで行はれてゐたシャマニズム的なボム教 Bom が多分に加味してゐるといつてよい。

家畜飼養を主とし農業も行はれてゐるが、細工に巧みで、銀、鐵、銅、眞鍮の器物をつくり、また木工品、籃類、數物等の製作に良い腕をもつてゐる。

僧侶・俗人・男女共髮は丸刈で、鬚髮をつけず、寬い膝までとゞく上衣を着、腰に布或は皮製の帶をしめ、毛皮或は毛織の帽子を被る。女の着物も外套風のものである。山小屋風の木造家屋に住むがそれには煙突は無く、兩側にはベランダがあり彩色されたり彫刻されたりしてゐる。

性勇敢といふよりむしろ粗暴で怒り易いので、時折殺人沙汰があり、窃盜其他の亂行も普通に行はれてゐる。主として豚・羊肉・犛牛肉・蕪青・米・大麥・塡茶等を食するが、特に稷を醱酵させてつくつたマルア酒 murua

を愛飲する。

チベット語の一種を用ふ。

ボード族 Bōdo

ブラーマプトラ河の北岸、アッサム州西境からダラング地區にかけて居住するモンゴロイド部族である。ヒマラヤ山脈をこえ北方から來たものといはれるが、その徑路等は明かでない。しかしまづ、同河の北東に勢力を張り、その後河を下り更に横斷して平地方面に近づいたものとみられる。言語上、カチャーリ、ガーロ、メーチ、ティパラー、ラーブハー、ラールング及びコーチの各部族と同系である。前述の部族に西方のチュティヤ Chutiya ディーマル Dhimal ハイジョング Hajong 東方のディムサ Dimsa ホジャイ Hojai モラン Moran の各部族を一括して、大ボード族といふ場合もある。

ボード族は、山地方面と河谷とでは、その部族は構成を異にする。前者では、族外婚の區分は嚴重に守られてゐる。これに對し河谷方面では名目は今尙存するけれどもかなり力弱くなつてゐる。慣習はガーロ、カチャーリ族のそれと似てゐる。ボード族は頑丈で、自立心強く、勞働者の氏族的社會としての特徵著しい。季節的出稼を盛になし、多數のものが上流の茶園に働きに出かける。

チベット・ビルマ系ボード語を用ふ。

マーヴィラーン族 Māvilān

マラバールのチラッカル稅區に居住し、狩獵や植物採集に從事してゐる小部族である。一九三一年、一、三四一人を算する。

トゥルマール Tulumār 及びチンガッターン Chingattān の分族がある。部族の頭首をチンガム Chingam（獅子）といふ。

相續は父系制 makkathāyam によるが、母系相續も認められる。

現在、籠作り、蜂蜜其他林産物採集を生業とし、また象使ひとして雇はれる。

トゥルー語の轉訛形を用ふ。

マール族、マール・パーリア族 Māl, Māle, Māler, Māl Paharia

サンタール・パルガナスのラジマハル山地の部族であつて、サヴラ族の分派である。マール、マール・パーリア兩族共、一九三一年、一一〇、八四九人を算する。一般に短身且つ皮膚は暗色である。彼等の慣習はチョタ・ナグプールの山地部族のそれに似てゐる。

クマール或はコマル・バーグ Kumār, Komar-Bhāg とマール・パーリア Māl Paharia の二支族に分れ、更に數個の氏族に分れる。

ダルトン大佐（Colonel Dalton）はマールの若者達を極めてロマンチックな愛情を示すものとして描いてゐる。しかしその仲の良いことも限度をふみこすならば、年寄達に社會からの締め出しを宣言される。その償ひのためには、無分別を水に流すといふ意味で、動物の血を流さねばならない。斯うして再び社會に復歸を許される。

狩獵は、マールの最も好みとする慰戯である。と同時に彼らの主とする生業でもある。従つて、狩獵について種々の規則をまうけてゐる。たとへば、人が動物を殺すか傷づけたまゝ見失ふやうなことのある場合、彼は捜査の助け手を得てさがさねばならない。助け手は、該動物の見つかつた時は、獲物の半分をもらふ權利をもつ等である。

彼等の宗教は、太陽が中心である。朝晩太陽を恭しく拜することを忘れない。時折の日曜には、家長が主となつて特別禮拜を實修する。家長はその日にそなへ豫め齊戒する。當日の日出前、家の前の清掃した場所に新土器、新籃、若干の米、油、檳榔樹の實、朱及びマンゴーの枝をさした眞鍮の水差を置く。上る太陽に家長はこれらの供物を示し、一族と共に種々の災厄からまぬがれるやう祈願する。太陽に次いで地女神ダルティ・マーイ Dharti Māi 及びその下僕ガラーミ神 Garāmi を崇拜する。狩獵の神はアウトガ Autga といひ、遠出の終る度毎に感謝の供物をさゝげる。他に、多くのもやもやした精靈の力を認め、それを和げるため種々の供物をする。祖先崇拜の慣習も認められる。司祭者といふべきものはなく、家長・村長が一切の宗教的行事を掌る。

彼等の踊りと歌には特色がある。それは極度に言葉數の少いものである。どこの村落にも踊り場がある。またパーリア族の酒に強いことについても諸家が等しく指摘してゐる。踊つてゐる時も、麥酒壜を以てまわる男があつて、腕をくみあひ踊つてゐる男女の踊り手の口につぎこんでやるといふ。

彼等の飲む酒は一般にパチワイ pachwai（穀粒を醱酵させてつくつた酒精飲料）である。

農耕、狩獵を生業とするが、從來の燒畑耕作を行ふものも少からず殘存する。

マグ族 Magh, Mag

この部族はチッタゴング山地の河谷地帶に居住する。マグの名の出所については、チッタゴングの人々に對し一般に適用された名稱とするもの、或はマガダ Magadha を支配してゐた民族たるマガ Maga より來たとするもの等其他種々の說がある。

社會組織　マグ族には、トングタ或はジュミアー・マグ Thongtha or Jumiā Magh マルマ或はロアーング別名ラカイング・マグ Marma, Roāng, Rakhaing Magh マーラマグリ別名バルアー又はブイヤー・マグ Mārāmagri, Baruā, Bhuiya Magh といふ族内婚の三集團がある。トングタ及びマルマの兩集團はおそらく本元を同じくする。彼等は既に長い間チッタゴングに定着し、自らその山地々帶の原住民と思つてゐるに對し、マーラマグリは其後アラカンからやつて來た移民の一派である。

トングタとマルマ兩集團の身體的特徵をみるに、明らかに蒙古族系で、短身、顏廣且つ偏平、顴骨高大、廣鼻、小眼、眼裂斜位であつて、男は鬚髯をもたない。マーラマグリ集團はベンゴール女とビルマ人との混血の子孫とする說（ファイアー大佐 Colonel Phayre）ある如く前二者と全く身體型を異にする。光澤ある黑色の肢體、波狀毛、鬚髯多く、男はカルカッタで料理人として雇はれ、東ベンゴール下級カーストの一特徵を形づくつてゐる。またその幾分横着な態度や興奮した物の言ひ方は、感情を面に表はさぬが惡氣のない蒙古族系と極めて著しい對照をなす。

これら三集團は更に多數の族内婚の分族から成つてゐるが、分族は大抵最初に定着してゐた河谷の名をとつてゐる。村は十軒から五十軒迄の家より成つてゐるが、家は河岸にある竹で造られた杭上小屋で、普通二間で、軒

先に一種の縁がついてゐる。マーラマグリ集團ではベンゴール風のドーティを着用し、トングタ及びマルマ支族はビルマ人風の服裝をしてゐる。

婚制　マーラマグリ集團では娘の成人婚・幼兒婚共見られるが、幼兒婚の慣習を社會的に立派なものと考へる傾向が著るしい。マルマとトングタ兩集團は、成人婚の原始的慣習を有し、婚前の性的交渉は婚前の男女交際の必然の結果とはつきり認めてゐる。結婚式は村人や知己の祝福にあふれた華やかな光景を呈する。多妻婚行はれ男は養ひうるだけの妻をもつことが出來るが、第一妻が最上級に位する。寡婦の再婚を許し、第二夫の選擇について制約はない上に、特別の儀式を行はない、一緒になり同棲するだけである。

宗教　マグ族は南方派の佛教徒でチベットの北方派を正統でないとみてゐる。しかしトングタ集團には倘往時の精靈崇拜の信仰の痕跡が殘存し、山河の靈に米、花、果實を供へたり、牛、山羊、豚等を供犧する。マーラマグリ集團ではヒンヅー教を信奉するが、特にタントラ派の傾向著しく、シヴ神とドゥルガ神 Durga 崇拜の行事もみられる。部族の祭事には佛教徒のフンギ、別名ラーオル分族 Phungyis, Rāolis のものが當り、ブラーマンも特別の敬意を拂はれる。トングタ集團では老婦が時折一種の尼僧として宗教行事をつとめる。

葬制　死體は火葬にし、骨灰を集めて埋葬する。圓錐形の小さい土盛りをなし、その上に長さが同じ位の族をつけた長い竹の竿をたてる。僧侶その他社會的に地位の高い人の場合は、死體を乾燥させ特殊の棺に入れて一年位保存し、その内盛大な葬儀の準備をする。通常色のついた紙と族の飾りをつけた竹で、間に合せのパゴダ(塔)をつくり、幾分廣い場所で車にのせた竹製の大砲の砲列と向ひ合せて置く。大砲の砲口にはぎつしり火藥をつめこみ、長い信管をつけてゐる。これらの大砲は死者を顯彰するため有志の人達から送られたもので、これをおくるのは非常に功德があるとされてゐる。棺が到着すると無言の爭闘が起る。女達はそれを一方に押しやり、男達は他方に押す。この爭闘は男、女間でなく、男女いづれかの既婚者と未婚者の間に行はれることもある。棺はそこでパゴダの中に入れ、竹製の大砲を發射する。最後にパゴダと棺を燒き、四十五呎もある長い族をつけた竹をこゝにたてる。八日目に葬儀の際供へた種々の食物を地上におく。この儀式は毎年くりかへして行ふ。

生業其他　トングタ集團は、チッタゴング、アッサム、北ベンガルにみられる燒畑耕作法を行ふ。これをアラカンではトゥンギャー Tungyā といふ。マルマ、マーラマグリ兩支族は大部分定着し、墾耕を營む。また漁撈、木材伐採や獨木舟、籃、莚の製作等に從事する。

マグはカースト外にあり、正統ヒンヅー教徒は彼等から水、食物をとらない。相當いかもの食ひである、男女共酒類を好む。

ビルマ語系アラカン語を用ふ。

マジワール族 Majiwar, Mānjhi, Mājhia

ライガル、サルグージャ及びウダイプル各土侯國並にベンゴールに居住し、ゴーンド、ムンダー・カワール族等から派生したといはれる小混淆部族で、その居住する地方により生業を異にしてゐる。一九三一年、一九、一一〇人を算する。ライガル地方では、マーンジ族、マージア族は漁撈者で、漁撈者カースト、ケワト族の中に包括されてゐる。外貌は、未開部族の典型的なものである。

ミルザプールのマジワール族は、明かにゴーンド族の分派とクルック (Crooke) もみてをり、五支族の中四族

はゴーンド族の氏族の名をもつてゐる。これらは多數の族外婚の氏族に分れる。彼等の生業は船頭、漁撈者でなく、未開の移動農耕である。サルグージャのマーンジ族は、ムンダー族とサンタール族の分派とされ、支族をもたぬけれども、多數のトーテムを有する氏族がある。うちバインサ族 Bhainsa（水牛の意）は更にロタン Lotan とシンガン Singhan の亞氏族に分れ、水牛を神聖視し、その乳を飲むけれども犁や荷車につけたりはしない。成員の一人でも水牛を殺すとその屬する集團はなくなる。また、バーガニ族 Bāghani（虎の意）は、その成員を虎は害することはないと信じてゐる。

マジワールは、同一氏族内の結婚は禁ぜられ、成人結婚をなし、結婚は夫々兩親がとゝのへる。子供が誕生した時、家の前に臍帶を埋める。人の死に際し少量の煮飯と凝乳を口に入れてやる。病中僅かしか食べてゐないので、あの世に腹をすかして行かないやうにとの意味である。死體の頭の側に、若干の米と木綿を入れて葬るが、あの世での衣食のためである。

マジワールはドゥーラ・デオ Dūlha Deo を崇める。新穀を食する時及びホリ祭、ダサラ祭 Holi, Dasahra Festival には、犁に供物をそなへる。雨期の始めと終りにカルマ踊をおどる。この踊りは、日沒後カルマ樹の周りに成年男女や子供等多數集まり、マンダール Mandār といふ太鼓に合せてをどり出すもので夜つぴて續く。日が上ると、皆の衆はカルマの枝を折り小川に流してやり、踊り手達は、米、山羊、萱萩の御馳走を食べる。この踊りは、カラム土侯 Karam をたゝへる宗教的儀式であつて、村落から災厄を拂ひその繁榮を祈らんとするものである。

マジワールの言語は、ムンダーリ、サンタール、コールワー語等の混淆したものである。

マッリ族 Marri

バルチスタン東北部に居住するリンド・バロック族の一派である。その一部はシンド州に入つてヒンヅー教徒と混血を遂げてゐる。

マッリの主要家族の間には、ハイパーガミイ（族上婚）にもとづく同族結婚行はれ、このため以前には女嬰兒殺しが盛んであつたが、現在ではみられない。また結婚直前の女に對して相當計畫的な貞操蹂躙を行つてゐたらしい。

マッリは土地の分配は籤できめてゐる。

マラ・アラヤン族 Mala Arayan

トラヴンコールのトドゥブラ・ミナチル及びチャンガナチェリ稅區に居住する密林部族で、體質的特徴はトラヴンコールの他部族と大差はないが、外貌は幾分立派である。一九三一年、三、一八二人を算する。

四つの族外婚の氏族に分れ、その間には社會的地位の高下が認められる。村落會議があり村落共同の問題を協議決定する。高い山脈の傾斜面にたてられた村は、周圍に樹木や棕櫚樹をめぐらして美しい。

女は幼時婚約をなし、結婚は年頃になつてから行ふことになつてゐるが、式の主要部分は、花嫁の兄が彼女に蒟醤の葉を與へると、彼女は二つに切りその一つを夫に與へ他の一つを自分が嚙み、同じ痰壺に一緒に唾を吐く。それから客人が皆蒟醤の葉を嚙むことである。最初の妻が不姙である場合、多妻婚が許される。多夫婚も稀に行

はれる。遺産は父から息子へ相續される。しかし母系の相續も若干認められる。

マラ・アラヤンは精靈崇拜者である。死者の精靈及び山を尊崇する。また森の神サースタ Sāstā を崇拜する。奇習といふべきは、家屋の中に男は自分と妻のみ入ることになつてゐる別個の室をもつてゐることである。農耕を生業とし、狩獵に巧みである。猿肉を最も好んでゐる。また魔法遣ひとして名聲があり、平地の住民には特に畏れられてゐる。

轉訛したマラヤーラム語を用ひる。

マラ・ヴェダン族 Mala Vedan

この部族はトラヴンコール各地に散在してゐる。印度半島最古の住民の殘餘の一つであり、セイロン島のヴェッダ族と同系とみられてゐる。支族により、若干の相違あるけれども、低身、長頭、皮膚は暗色、廣鼻、毛髮は暗色で縮れてゐる點は、大抵共通してゐる。

ヴリヤ・ヴェダン Valiya Vedan　チェル・ヴェダン Cheru V.　チンカンニ・ヴェダン Chinkanni V. エリチャティ・ヴェダン Elichati V. の四支族に分れ、これらは更に族外婚の氏族に區分される。各村にスタニ Stani とよばれる酋長がゐて一切の事件、問題の解決に當つてゐる。

結婚は交叉從兄妹間に行はれ、氏族を異にするならば姉妹の交換もなされる。初潮以前にも以後にも娘は結婚する。式は極めて簡單である。多妻婚は盛んであるが、夫はその妻達を養はねばならぬといふことはない。男は死んだ兄弟の妻とか、死んだ妻の妹とは結婚しない。離婚も許されてゐる。遺産相續は、氏族により息子が財産の三分の二、甥が三分の一をとるもの、又息子と甥と等分するものがある。

死體を住居から一哩も離れたところに土葬する。喪主は息子と死人の妹の息子（甥）である。會葬者は、沐浴してから牛糞を練つたもので額に印しをつける慣習がある。

キリスト教の浸潤も著しく、その改宗者は道德性、文化並に勤勉さにおいて相當の進歩發展を示したといふ。移動耕作、密林清掃、陸稻栽培等を生業とする。主食物は米で、根莖、漿果等で補ふ。

マラサル族 Malasar, Malsar

この部族はコイムバートル地方及びコチン國の森林内に居住する。ダラボラムその他の森林の端に、五、六軒宛小村落を形づくつてゐる。一九三一年、五、一〇一人を算する。彼等は、その住んでゐる地所諸共大地主の財産といはれて來た。奴隷より幾分よくみえるが、榮養不足らしく、身なりもよくなく、不潔である。

平地や傾斜面に住んでゐるマラサルと山地のマラサルとは、冠婚葬祭の慣習を異にしてゐる。

一般に成人婚であるが、幼兒婚も禁ぜられてゐないマラサルとは、結婚式を花嫁の家で擧行する。平地のマラサル族は、結婚式に用ひてゐる。また月經時の女子の住む小家はその木でつくることになつてゐる。主神としてマーリアーイ神 Māriāyi (Māriamma) して無花果 (Ficus glomerata) を神聖視し年一度これを崇め、少くともその一枝を結婚式に用ひてゐる。また月を崇拜する。

山地のマラサル族は特にポンナーラムマン神 Ponnālamman (mārcamma)　プララッパチ神 Pullarappachi (Jaṇēsa) カーリアムマン神 Kāliamman を崇拜する。彼等は壁でかこまれた一つの石をマルング Mallung と

ひ神として崇拜し、毎年四月に山羊、米、蜜その他の供物をこれに供へる。供物を怠ると神は象や虎をよこして一族を滅してしまふと信じてゐる。

マラサルは印度護謨、藤豆を栽培し自給すると共に近所の農家に賣る。また森林伐採・藥種採集等に從事する。日雇勞働者（苦力）として働くものも少くない。獲物を艮にかけるのがうまい。

タミール語とマラヤーリ語との混合語を用ふ。

マラッカーヤル族 Marakkāyar

南印ポルト・ノヴォを中心に居住するタミール語を用ひる回教徒部族で、ヒンヅー教徒と回教徒との混淆に由來したといはれる。

大抵商業に從事し、セイロン、馬來其他と大きな取引を行ふ。

マラッカル族 Malaikkar, Malamitanmar, Malapanikkar

マラバールのカリカット及びエルナード山地に居住し農耕及び狩獵に從事する密林部族である。

マラッカル族は自分達を優越なものと稱し、ナヤール族以下の全カーストを不淨なものと考へてゐる。そして不淨カースト等の住む平地へ下りた時は、沐浴して身を淨めてからでないと歸宅しない。

女系相續制にしたがひ、不淨を十二日間とする。

マラデーヴン神 Maladēvan を主神として崇拜する。

森林監視と象狩りがうまい。

マラ・パンタラム族 Mala Pantaram

トラヴンコールの東部中央山地に外界から隔離されてゐる放浪未開部族である。皮膚の色は暗褐色で、短身、縮毛、廣鼻、長頭型である。極めて簡單な二三人しか入れない小屋の中に住み、十歲以上の子供達は別の集會所に寢泊りする。彼等は轉々と移動生活を營む。一九三一年、一八七人。

三、四の家族より成る二つの族外婚の集團に分れる。結婚は母方の伯父の娘或は父方の伯母の娘との間に結ばれる複交叉從兄妹婚である。結婚に際し姉妹の交換も行はれる。娘は成熟期の前後結婚する。式は花嫁の家であげられ、花嫁の父親は、嫁の右手と婿の左手とを合せて花嫁の世話を婿にたのむ。そして二人が一枚の蓆の上に坐り、米製の團子を食ひ合ふことで式は了る。

女が子供を産む時、小家から六百呎離れた一軒の小屋に十六日間隔離されるが、この間夫は狩獵等に出てはならない。子供が男だと三ケ月から五ケ月、女の場合は四ケ月から六ケ月間一定の禁忌を守らなければならない。

彼等は密林その他の靈を怖れる。又山の靈を崇拜するものもある。一般に禮拜する神は、サースタ Sāstā とその從者カルップスワミ Karuppswami である。死體は土葬するが、その後その土地を捨てゝ他に移る。

食物採集に從事し、通常木の掘り棒、銃鎌を使用する。

トラヴンコールの北東端コイムバトル地區との境に居住する密林部族で、クルンバ・ブラヤン Kurumba Pulayan カラヴシ・ブラヤン Karavashi P. パンブ・ブラヤン Panbu P. の三部族に分れてゐる。一九三一年二五四人を算する。これらの部族は族内婚を行ひ、社會的地位はこゝにあげた順序に從ふ。クルンバ・ブラヤンは燒畑耕作を行ふ放浪的な農耕者である。カラヴシ・ブラヤンは土地所有の農耕者カーストたるヴェラーラ族の小作人である。

一般に酋長及びその補佐役が居つて、村の事務を處理したり犯罪の裁決に當つてゐる。

マラ・ブラヤンは成人婚を行つてゐるが、交叉從兄妹婚が盛んである。結婚式は三日通して花嫁の家で行はれる。カラヴシ・ブラヤンでは花嫁料が支拂はれるが、クルンバ・ブラヤンではそれはない。寡婦は亡夫の兄と結婚し、新夫は先夫の子供の保護者となる。多妻婚、多夫婚共行はれ、亂婚も珍らしくないといはれる。遺産は息子が相續する。

彼等はカーリ・マリアムマ神 Kali-Mariamma チャプルアムマ Chaplamma の各女神を崇拜する。祭りの前十日間は女をつゝしむ慣習がある。死體を土葬に付し、頭、足の上に當る土の上に一つ宛の石を置く。

マンガル族 Mangar, Magar

この部族は東ネパールにすむモンゴロイド族で、グールーング、カス、スヌワール各部族と共にムキア・グループを形成し、人的性格により高く評價されてゐる。マンガル族の當初の本據は西ベンゴールのカルナリ・ベリ河岸のドレ河谷である。そこからラクコラ地方に擴がり漸次東ネパールに進出したといはれる。

マンガル族にはアターラ Atharah ブラトキ Burathoki ガルティ Gharti サッカリ Sakkali の四支族があり、また多數の族外婚の氏族に分れる。

族外婚の禁止程度は、當代以降三代位である。娘は年頃になつてから結婚する。婚前の性的放縱を許してゐるが、娘が姙娠した場合は相手と結婚させることを親達が諒解の上である。結婚式はヒンヅー風に花嫁の額に朱を塗るのが式の主要部分である。男は二人或は三人の妻と結婚出來るが、それは實際上彼女等を養つて行く力があるとの前提においてゞある。寡婦は再婚を許されるが初婚風の結婚式は出來ない。男は寡婦と同棲し、妻に加へることは出來る。

マンガルの宗教は、ヒンヅー教と往時の精靈崇拜の祭儀との混和である。サティヤ・ナライン神 Satya Narain は部族の間に人氣があり、山羊、鷄、鳩を供犧して崇拜するサンサーリ神 Sansari アイターバーレェ神 Aitabareh と共に、僧侶の手をかりず、家長が主となつて禮拜する。

葬儀は、グールーング、スヌワール兩族と同樣で興味深い。卽ち死後直ちに死體を三本の繩を以て丈夫な柱に結へ墓地へ運ぶ。そこで新衣に着更へさせ墓の中に頭を北に向け上向けに橫たへた後、額に白檀の糊を塗る。死者の母方の親類卽ち通常母方の伯父が司祭者の役をつとめて、靈を宥和するため定めの式を行ふ。先づ死者の口に若干の銀貨と珊瑚を入れる。次いで淸澄な牛酪にひたした燈心に點火し、唇に炎をふれさせる。それから口邊に燒飯をふりまき最後にブジュンリ Pujuri といふ布片で蔽ふ。

次に三呎位の二本の木片を墓の兩側にたて、一方の木片には九つの踏段か切り目をつけて死者の靈が天國に昇る梯子とする。他方には、會葬者各自はそこにゐたことを示すため切り目をつける。母方の伯父は、死者へ嚴肅

に最後の挨拶をのべ、しつらはれた梯子で天に昇るやう請願する。墓に土をかけた時、切り目をつけた木片をとり、家にもち歸つて二つに折つてしまふ。さうしなければ、死者の靈は梯子を傳つてこの世に降り生存者に惡戲をするからである。死體を運ぶに用ひた柱も折る。繩と鋤は墓に殘しておく。會葬者が家に歸る時、一行の一人は先頭にたち、墓と死人の家の中途に茨藪の障碍物をつくる。その茨の上に大きい石を置き、左手に燒香の壺を右手に毛の絲をもつて石の上にたつ。會葬者は、一人宛石に上り香煙の中を通つて障碍物の向側へ渡るのである が、その時各人は香をもつ人から絲をもらひ首の周りに結ぶ。この儀式は、死者の靈が會葬者と共に歸宅せず、その古巢に落着くためである。

マンガルの生業は、農耕、商業、軍務等が主なものである。牛肉を食はないが、豚、鷄肉を食ふ。グールング、カス族等と同樣水パイプで煙草をのむ。

マンナーン族 Mannan

トラヴンコールの東北部のカルダモム山地中に居住する部族であつて、往時マドゥラ王に從屬してゐたといふ。短身、黑褐色の皮膚、長頭、廣鼻で頭髮乏しく、未開部族の一切の外面的特徵を備へてゐる。

多數の族外婚の氏族に分れ所謂母系相續である。酋長の地位は世襲的で伯父から甥に繼承され、酋長の他に代理役及び二三の役員がある。村の問題は村人から選出された一人の議長と長老の會議で決める。

マンナーン族の結婚には、酋長の同意が要る。通常男子は母方の伯父の娘と結婚することになつてをり、交叉從兄妹婚である。成人結婚を行ひ、式の前花嫁は一年位花婿の家に住みこむ。

また掠奪結婚も行はれる。結婚式の中心部分はターリを結ぶことであつて、寡婦になるとターリをとり去る。寡婦の再婚は許されてゐるが、亡夫の死後二年經つてからするのが普通である。

子供が生れて一年位たつてから、一家族中の最年長者は珠をつないだ小さい首飾を子供の首にかけて命名する。

死體は土葬にする。竹と葦でつくつた棺に入れて音樂を奏し、太鼓を鳴らして墓に運ぶ。また墓の上に小舍を建てる慣習がある。

マンナーンは、サースタ神 Sasta を熱烈に崇拜する。ヒンヅーの浸潤も著しいものがある。

彼等の小家は、山地部族中では立派な方である。部族には洗濯屋も理髮師もなく互に洗濯し理髮しあふ。醫藥の知識については他の山地部族にまさるものがある。蜂蜜の採集が巧みである。一般に放浪的な農耕者で、主として燒畑耕作を行つてゐる。

猿の肉を食ふが、鰐、蛇、水牛、牝牛の肉はたべない。

彼等は飮酒を惡德と考へてゐた。また月經時の不淨等をそれほど嚴しく考へない。ヨーロッパ人と親しくなり易いといはれてゐる。

マンナーンの人口は漸次減少してゐる。

マンネワール族 Mannewar

チャーングダ地區の南部、テルグー語通用區域にみられる小部族で、ハイデラバートから來たといはれてゐる。

この部族はコヤ・ゴンド族の下級分肢で、通常マンネワール・コヤ Mannewār Koya といはれる。

マンネワール族は、族外婚制の三集團に分れる。ナルグ・ヴェルプル族 Nalugu Velupulu は四神を崇める。アイドゥ・ヴェルプル Ayidu Velpulu は五神、アヌ・ヴェルプル Anu Velpulu は六神を崇拜する。そして男子は、自族と神の數を異にする集團に屬する女子と結婚せねばならない。ところが、彼等は、それらの神の名をよく知らぬやうであり、また今日それらの神を尊ばないといはれてゐる。いはゞ、神々は、彼等にとつて結婚を規制する目的のために殘存するだけである。

婚約が行はれると、結婚の可不可の兆表を得る日を決める。その日の朝早く、婚約した男は顏を洗ひ、足に薑黄の粉を塗り家の中の木の席に腰を下す。一方、村の年寄が家の外にあつて朝日の方に向ひ道を過ぎる動物か鳥に氣を配つてゐるが、その如何によつて兆表を與へる。卽ちそれが良い時は結婚は祝福され、わるい場合は婚約はとりやめとする。

寡婦は部族内の亡夫の兄弟以外の誰とでも結婚出來る。男子が寡婦を結婚せずひきとる時は三ルピーを課せられる。また他人の妻と姦通した場合、二十ルピーの罰金をとられる。

彼等はガネシュ・チャトゥルティ Ganesh Chaturthi の祭に犁頭に鷄肉と酒とを供へる。ホリの祭 Holi には愛の神カーミ Kāmi とその妃神ラティ Rati を表はす人形をつくる。男の人形は、生身の鷄と卵と共に火中に投ぜられる。この儀式は往昔の人身供犧の名殘りと考へられる。

死體は通常土葬に付してゐるが、漸次火葬も行はれるやうになつた。

ミーナー族 Mīnā, Deswāli, Maina

ホシャンガーバード、ニマール及びサウゴア地區に居住する著名な非アーリアンの盜匪部族である。一九三一年、八五五、〇〇〇人を算する。固有名稱はミーナーであるけれども、一般にデスワーリ族としてしられ、ホシャンガーバード地方ではマイナ族といはれる。メーオー族は、ミーナー族の分派であるが、ラジプタナの原始的ドラヴィデアン部族とみられてゐる。

ミーナー族は、メーオー族と同樣、十二の大氏族に分れてゐる。

元來、ミーナーの惡事と慄悍さは史上有數のものやうであつて、回教支配者により徹底的に彈壓され、また英軍隊の派遣をみたこともある。イベットソン (D. Ch. G. Ibbetson) も印度犯罪者階級中最も不逞なものと見てゐる。彼等は諸處に諜報網を張りめぐらし情報をえてから襲撃をするのを常とし、ラジプタナ或はデッカンの町がその爪牙にかゝつた。犯罪部族に共通にみられるやうに極めて迷信深い。しかし、中央州のデスワーリ族は祖先來の亂暴な生活をすて、善良な農耕者として落着いた生活をいとなんでゐる。

ミーナーは通常娘は十二歲まで、男は十六歲から二十歲までの間に結婚する。寡婦は亡夫の弟にひきとられるが、弟の無い場合は、亡夫の兄と結婚する（この點はヒンヅーとは反對である）。その理由は、妻は高價であり、家族内に女子をとゞめておくためである。といつて、彼女が義兄弟を好まぬとしても騷動にはならない。その場合は家族内の他のものと結婚するから。

死體は男は白、女は有色の衣服につゝんで火葬に付する。葬式はしないけれども、死者については、十月の末日だけ哀悼しその際水を供へ薰香をたく。

ミーナーは、宮殿や寶物の番人としては適格で信用してよいといはれてゐる。彼等の社會的地位も低くはない。男は獨特の仕方でターバンを巻いてゐること、男らしい歩きぶり、耳障りな聲調等でよくしられてゐる。女は額にラークディ rākhdi といふ特殊の飾りをつける。

ミキール族 Mikir

カーシー山地の東北部低地から東ナーガー山地にかけて分布するモンゴロイド山地部族である。ミキールは自分達をアーレング Arleng と呼んでゐる。種族的にはナーガー族とクキ族の中間に位し、慣習においてはボド族に近いといはれる。

ミキール族は父系制の族外婚の氏族に分れてゐる。その村は小さく、住家は杭上家屋である。彼等は一般に精靈崇拜者である。主神は慈悲深いが、小神は種々のはたらきをなし、惡戲をする。したがつて、神々の機嫌をとり結ぶために時折供犧をする。祭事は氏族の年寄から選ばれた司祭者が掌る。近來ヒンヅー教の進出著しく、その居住地方の南半は、若干その慣習をとり入れてゐると傳へられる。

死體は適當の期間安定してから火葬にする。その際會衆は踊りをおどるといはれる。

ミキールは以前カーシー族に似た衣服をつけてゐたが、現在は通常アッサム人風の衣服をつけてゐる。彼等は、この地方では良き農耕者である。しかしその收穫物の取捌きには相當利敏いといはれる。他山地部族と同樣多數の水牛を飼養するが、牛乳をのまない。

ナーガー族に近い言語を用ひる。

ミシュミ族 Mishmi

アッサム州東北部ブラーマプトラ河の北山地に居住するモンゴロイド部族で、チベット・ビルマ語族に屬する。西はデボング河を境にアボル族と接し、北東はカムテ・ロングまで分布する。その原住地は北東チベットの高地で、そこからチン族 Chin と共に南下し、現住地に居住するに至つた。皮膚の色は赤い。

チュリカタ Chulikata、ベベジヤ Bebejiya タロアン Taroan ミジュ Miju の四支族に分れ、これは更に父系制の族外婚の氏族に分れる。この中ミジュ族とチュリカタ族は最も好戰的といはれるが、全體としては軟弱な部族である。酋長は世襲的に選ばれるが、富と人物がその標準である。百人を收容出來るやうな男子集合所があり、その中には狩獵の獲物を飾つてゐる。

同一氏族内の結婚は許されず、また多妻婚が行はれてゐる。妻の多いのが誇りとされ、女の價も豚一匹から牛二十匹まで種々の段階がある。妻と家畜の數が、財産の標示となつてゐる。寡婦は亡夫の遺産相續人の許へ引取られる。

部族内の犯人は、親族の者によつて處罰される。處罰しなければ、氏族間の怨恨を惹き起し、犯人の屬する氏族の誰かを殺すとか奴隷にするとかして復讐される。

ミシュミは一般に武器として烏頭の毒矢を用ひる。しかし、チュリカタ及びベベジヤの二支族は、簡單な弓をもち籐の鎧をつけるが、他の二支族は弩を用ひるが鎧はつけない。その他前二者と後二者は、種々の方面で慣習を異にする。

ミシュミはシャマニズム的な宗教を有する。彼等は皆地下に死者の家があるものと信じ、死體を土葬に付する。しかしタロアンとミジュの二支族は埋葬後五日を經た後遺骸を掘り返して燒く。

ミシュミの若い女は額に鉢卷樣のピカ〳〵する銀の薄板をつけてゐる。チュリカタ（斷髮者の意）支族は、その名のやうに女は額に垂れる頭髮を水平に短かく斬つて近代風の端を開いた。男は柳條製の兜の緣のところまで耳の背後の髮を刈り込んでゐる。男女共頭部の背後は長く伸ばしてゐる。

ミシュミは利にさとい交易者である。チベットとアッサム間の貿易に從事してゐる。彼等は北東部族中最も狡猾な喧嘩好きのものとされてゐる。農耕者といふより遊牧生活を營んでゐる。ミシュミ・テータ Mishmi teeta（解熱劑）、麝香、毒藥等を賣り出し、家畜、毛織物、金屬具等を移入してゐる。

ミリ族 Miri

アッサム北東ヒマラヤ山麓のシブサーガル及びラキンプル地區の英統治區域に定着するモンゴロイド部族である。一九三一年、八五、〇三八人を算する。ミリ族自身は、十八世紀の末頃アーホームに侵入したカームティ族に對抗するため、アーホームの酋長に招かれナーガー山地の外緣にやつて來たといつてゐる。彼等が現在の低地に下つたのは、强力なアボル族の勢力に壓されたゝめとみられる。

彼等は川沿ひに家を建てゝ住んでゐる。

多數の精靈崇拜者からの改宗者を出してゐるに拘らず、元宗教の殘存を多分にとゞめてゐる。ヒンヅー教の影響は表面的でしかないといふ。

一般に良き農耕者で、女も畑に出て働いてゐる。山地方面のミリは、時折交易のため低地に下るだけなので文化の程度が後れてゐる。信仰其他の慣習においても、低地のミリとは幾分相違する。

ムデュヴン族 Muduvan, Muduvan

コイムバートル、マドゥラ、マラバール及びトラヴンコールの東北部二千呎から五千呎に達する山地に住む未開部族である。一九三一年、一、三〇一人を算する。長身、皮膚暗褐色、毛髮は黑く波狀、長頭で、四肢逞しく良い體格である。ムデュヴンは外部からタガッパンマルガル Thagaippanmargal ともいはれる。

多數の族外婚の氏族に區分されてゐるが、氏族の間には地位の高下が認められる。各村には酋長がをり集團内の事件は長老會議で協議する。また二三の村落に司法權を行使するタラヤリ Thalayari がある。最高酋長はメル・ヴカ Mel-Vaka と呼ばれ、その下にムパン Muppan といふ指導者もゐる。メル・ヴカとムパンの地位は世襲的で伯父から甥に繼承される。

通常交叉從兄妹★婚を行ふ。結婚式の主要部分は、花婿が自分で作つた竹製の楯を花嫁の後頭部の結髮にさしてやることである。また掠奪結婚も行はれる。多妻婚が許されてをり、また處によつては多夫婚が行はれてゐる。寡婦の再婚も認められる。未婚の青少年は男女別々の集會所に寢泊りする。

男の名は、大抵ヒンヅーの神々或は英雄の名をとつて命名するが、クンジタ Kunjita（雛鷄）カル・メーガム Kar Mēgam（黑雲）といふ名も一般に用ひられる。女には女神や女傑の名を命名する。

カルダモム山地のムデュヴンは、森の神コッタマラ・スワミ Kottamala Swami やヴダガナタ・スワミ Vad-

agamatha Swami を崇拜し、またこれらの神の住居たる山の峰を尊崇する。ヒンヅー教の影響も漸次著しい。

死體は土葬するが、墓穴は男より女の方を深く掘る。穴を埋めてから頭と足の上に當る處に石をおきその上に草葺の小舍を建てる。

ムデュヴンは農耕及び狩獵に從事する。主として燒畑耕作であるが、アンジャナド河谷のムデュヴン族はトラヴンコールの未開部族中雛段耕作を行ふ唯一のもので米を栽培してゐる。彼等は强健な體格であるから相當の勞働に耐えうるといはれる。

タミール語と合體した特有の方言を用ひる。

註　★交叉從兄妹婚 Cross-Cousin's Marriage　ある男の子供とその男の兄弟の子供、ある女の子供と彼女の姉妹の子供とは、相互に平行であるが、これに對しある男の子供と彼の姉妹の子供とは、その關係は交叉的であるから交叉從兄妹である。斯うした交叉從兄妹間の結婚を交叉從兄妹婚といふ。

ムロ族 Mro

チッタゴングの中部バンダルバン圏の南方に居住するモンゴロイド部族で、アラカン地方から移動して來たものである。一九三一年、七、四〇四人を算する。

デングア Dengua　プレムサング Premsang　コングロイ Kongloi　ナイザル Naizar　ガロウ・グナル Gharoo Gnar の五部族よりなり、これらは更に多くの族外婚の氏族に分れてゐる。しかし通婚は必ずしも族外婚的に行はれてゐない。大きな氏族は更に副氏族に分れてゐる。

遺産相續は父から息子達になされるが、末の息子が最も多くの分前を得ることになつてゐる。

農耕の方法はこの地方の他部族と似てゐる。豹や虎を捕へるのに戸の落ちる仕掛のある箱罠を用ひ、鳥は輪索や網で捕へる。

死體は火葬に付する。佛教徒と自稱するが、形式的で、部落の宗教行事はセラ Bera といふ年寄の魔祓者が執行する。

男達は幅狹い白或は赤の布を腰の廻りにまき兩足の間を前から後に引いて結んでゐる。髮は左側で束ね、骨製のピンをさし、耳に大きな白い金屬製の環をつける。女は極めて短いスカートを細い銀製の帶でとめ、その上に赤色の玉で飾つた帶をしめる。

ムロ族は性消極的であるが、極めて音樂好きである。竹製の樂器を有し踊の場合それを先頭にたつて奏でる。

メーオー族 Mēō, Mewāti

ラジプタナのメワト在に居住するミーナー族の回數を信奉する分派である。一九三一年、一三〇、〇八〇人を算する。もとヒンヅー教徒であつたらしい。またラージプウト族出と稱してゐる。

メーオー族には十二の族外婚の氏族（パール pāl といふ）がある。うち六氏族は、ミーナー族の六氏族と名・由來を同じくし兩者の間にはアクバル王時代まで通婚が行はれてゐたが、その後爭ひが起つたゝめ、メーオー、ミーナー兩族間の通婚は斷たれるにいたつたといはれる。

メーオーの慣習は、ヒンヅーと回教兩要素の混合である。彼等は割禮（ニカー Nikāh といふ）を行ひ、死體

を土葬に付する。彼等の祖先は、アミール・サーラール Sālār の子マースード Masūd に改宗させられたといふので、オードのバライチにあるマースードの墓に詣でるのを慣はしとする。一般に回教の社祠を巡禮する。ヒンヅー教徒はホリ又はディワリ Holi or Diwali の行事を行ふ。部族には音樂師及び歌うたひもをり、相當の贈與をうけてゐる。

同一氏族内での結婚は許されない。しかし、概して他カーストの女子との接觸には寛大で、その間に生れた子供が自族内に入ることを許してゐる。また遺産の相續は娘にも許される。メーオーは、往昔嬰兒殺しは普通事とし、且つ强盜を仕事としたが、今日は前者その後を絶ち、後者も改められてはゐるものゝ、今尙牛泥棒として警戒されてゐる。

メーオーは、一般に無學である。そして迷信に富み、緣起を重んずる。彼等は泥醉するほど酒を好む。また忍耐力に缺くところがあるといはれる。男女の衣服はヒンヅーのに似てゐる。女子はヒンヅーの下級カーストの女子のやうに身體に文身してゐる。

多く農耕に從事するが、この方面では隣人たるヒンヅーに劣るといはれる。

メーチ族 Mēch, Mechi

アッサムのゴアルパーラー及びブータンのドゥアールから西方コンキ河に至るヒマーラヤ山麓にみられるモンゴロイド部族である。一九三一年、九、九六四人を算する。ディーマル族と同視する向きもある。皮膚の色白く、骨格及四肢は大きい。メーチ族の由來について、傳承では、メーチ、ディーマル、コーチ各部族は同一祖先から出たといふことになつてゐる。

ダージリングとジャルピゴリのメーチ族は、アグニアー・メーチ Agnia Mech 及びジャーティ・メーチ Jati Mech といふ族内婚の二支族に分れる。アグニアー・メーチには十二の族外婚の分族がある。ジャーティ支族は當代から三代まで標準定式により結婚を制約してゐる。一方アグニアー支族も同樣の制約が母方に認められる。兩支族共、他部族の成員を入會料として饗宴を行はせて編入する。

アグニアー支族においては、結婚年齡は女十二歲、男十六歲であつたが、ヒンヅー教の影響により富裕の家庭では娘を早期に結婚させる。ジャーティ支族は、結婚年齡は男女共千六歲より二十歲迄で、時には男は自分より年長の娘と結婚することもある。花嫁料は、兩支族共呼稱を異にし、大體美と技能に應じて決めるが、アグニアーでは百二十ルピーに達することもある。

結婚式は非常に簡單で、その主要部分は、花婿が兩家の友人や親族の面前で竹の容器から注いだ水で花嫁の足を洗つてやることである。寡婦も再婚出來る。しかし子がある場合は、亡夫の親族と共に生活するのが立派であるとされる。しかし、二度目の結婚をするとしても、亡夫の兄弟は勿論その親族と結婚は出來ない。實家に歸つて、そこでニカ Nika と呼ばれる形式的儀式により結婚するのである。再婚女の花嫁料は、初婚の場合の半分、三度目の結婚のそれは、四分の一であつて、社會的地位も初婚の女に劣り再・三婚の女は公の席で客人に煮飯を出すことは出來ない。離婚は長老會議の認可により有效となる。離婚女の再婚は寡婦の場合と同樣であり、社會的地位も寡婦再婚後のそれと同樣である。

メーチの宗教は、マンガル族のやうに、ヒンヅー教と精靈崇拜の混合であり、後者より前者への轉移の段階に

ある。彼等はシヴ派と稱し、シヴ神及びその妃神カーリ神をバト神 Batho 及びバリ・クングリ神 Bali Khungri といつて崇拜する。ジャーティ支族は家の神として、シヴ神の母神と考へられる無名の神を崇める。またツィミシング Tsimising ティスタ・ブリ Tista Burhi その他の神々を崇拜する。

死體は、大抵火葬に付するが、貧しい家では頭を南に向け土葬にする。

メーチ族の社會的地位は、ヒンヅーの標準からすれば極めて低い。ラージバンシ族、ディーマル族さへ彼等を輕蔑する。

當初燒畑耕作に從事してゐたが、現在定住耕作を行つてゐる。

メド族 Med

バルチスタンのマクラン海岸に居住するトルコ・イラニアン部族である。アラブ人の侵入當時既にバルチスタンに住んでゐたといはれる。

船乘りとして著名である。

ヤーナーディ族 Yānādi

この部族は、テルグー地方の海岸方面特にネロール地區のスリーハリコタ島を中心に分布する。身體的特徴は、皮膚暗色、低身、廣鼻である。その由來については明らかでないが、祖先はプリカト湖の近くの荒地にすみ、狩獵と漁撈に從事してゐたと傳へられる。

社會組織　部族は數十に區分され、食事、生業、居住等によつて夫々等級づけられる。各支族は更に多くの族外婚の分族たる家より成つてゐる。家の名には動物、器物、他カーストの人、土地等の名をとつてゐる。村長をクラムペッダ Kulampedda といひ二十戸位のグッデム Guddem（聚落）を統轄し、自己の責任において或は村長老會議の勸告によつて村の事柄を處理決定する。

支族の中ではチェンチュ・ヤーナーディ Chenchu Y. とマンチ・ヤーナーディ Manchi Y. が最も主要で、前者は少數であるが優越した階級である。レッディ・ヤーナーディ Reddi Y. は定着階級でレッディ族の料理人として雇はれ、チャラ・ヤーナーディ Challa Y. は村端れの小家に住み、密林生產物採集、狩獵等によつて生活し、キストナ、ゴダーワリ地方ではレッディ・ヤーナーディと共に村に雇はれ見張り番となつてゐる。アディヴィ・ヤーナーディ Adivi Y. は密林人である。また北アルコットのヤーナーディは、チェンチュ族崇拜者である。ソマリ・ヤーナーディ Somari Y. は掃除屋で、捨てられた雜把を食べる。

婚制　ヤーナーディの結婚には、兩親は乘り出さず、成人した男女同士が處理する。口說き落しや駈落ちは茶飯事とされ、離婚も認められる。姦通もそれ程重大な罪でないとされる。また寡婦は妾となつて生活してゐる。勿論結婚前の姙娠等罪ではない。しかし、ヤーナーディは、結婚した男女の權利については愼重で、夫は妻を良く手なづけてゐる。ヤーナーディの寡婦は、次から次へと七人の夫につくといふので知られてゐる。夫の數が多ければ多い程社會における寡婦の地位は高い。多妻婚は普通で、七人の妻をもつものもあるといふ。女を夫々別個の家に住まはせ、男は順々に夫婦生活をする。またスリーハリコタ島では姦通した女への罰に、脚を縛つて一日中日に曝し頭に一杯砂の入つた籃をおくといはれる。ヤーナーディは死者を土葬に付する。

宗教　ヤーナーディは、ヒンヅー教徒最も多く、それはシヴ、ヴィシヌ兩派に分れてゐる。精靈崇拜者これにつぎ、キリスト教徒も相當認められる。彼等は寺院で禮拜せず、デヴーラ・インドルゥ Devara indlu（神々の家）といふ人里から離れた家で拜む。また家の神、地方の主な村の女神、名聲効驗ある神々を崇拜する。なほスッバラーユドゥ神 Subbarayudu ヴェンカテスワラル神 Venkateswaralu パンチャラ神 Panchala 等の運命を支配する神を崇拜する。そして木像、瓦、石及びマルゴサ★の葉をつけた水瓶、家の壁にかゝれた神を、神として拜んでゐる。禮拜には赤粉、花、薑黄を用ひたり、薫香をたいたり、果物やダール（豌豆）等を供へる。彼等は「神々の家」を神聖なものとなし、不淨なもの〻入るのを許さない。ヤーナーディの祖先崇拜は、クルンバ族のに似てゐる。彼等は自ら司祭者の役をつとめる。祭の時にはよく踊る。ヤーナーディは蛇のやうに身をくねらせて踊るので著名である。

住居・生業　彼等は竹材、扇椰櫚、草、稷莖でつくられた圓錐形の小家に住んでゐる。入口が小さいので大人は匍つて入る。しかし、家は雨と陽光をさけるためのもので、料理、食事及び睡眠は戸外でする慣習である。

ナラマライスでは、彼等はチェンチュと一緒に生活し、チェンチュの信ずるチェンチュ・デーヴィドゥを崇拜するが、兩者は決して睦みあつてはゐない。また兩者の社會的慣習は相當異つてゐる。

ヤーナーディの間には、今尙原始的狩獵の段階にあるものが相當あると傳へられる。一八三五年以來英政廳は穀物、衣服、煙草を供給する代り、密林生産物を彼等から獲たり、その勞働力を使用してゐる。産業局においても、從來籠作り等を教へて來た。彼等は魚釣がうまく、また蜂蜜採取者、作男、石工等も少くない。クルンバ族のやうに卜占を業とするものもゐる。彼等は錐揉發火法を使用する。更に密林の植物を良く知つてゐて、種々の木や藥草を利用してゐる。バッグ・パイプ（一種の笛）を用ひる。

テルグー語やテルグーとタミールの混合語を用ひる。

註　★マルゴサ Margosa 又はニム neem もいふ。印度人の神聖視する樹木の一つ。この葉を藥用に供する。また疫病流行の際女子は供物をこの樹の根元に供へる。葬儀の會葬者は、葬儀後その葉を嚙む。

ユスフザイ族 Yusufzai

西北國境州ペシュワール地方ユスフザイ平原に住むパターン族最大の支族である。マンダール Mandar 及びマリ Mali の兩支族に分れこれより無數の小分族を生じてゐるが、その主なるものは、ブリティシュ・ユスフザイ British Yusufzai ブンネルワール Bunnerwal マームンド Mamund タルカンリ Tarkanri スワティ・ユスフザイ Swati Y. 等である。ユスフザイは自らイスラエルの裔と稱し、モーゼの掟に示さるゝイスラエル族の慣習に似た慣習をもつてゐる。

ラーモジ族 Rāmosi, Rāmoshi

サトプーラ山地の西部にみられるボンベイ州の犯罪部族であつて、ビール族又はコール族或はこの兩者の混淆から出たヒンヅー・カーストといはれる。

ラーモジ族は往時掠奪・盜匪の階層として、その名を謳はれたが、主たる活動舞臺は西ガーツ地方であつた。大仕事に出る彼等は、物々しい裝束と道具で身をかため、往復共誰にもみつからぬやうにと夜中だけ歩き、夜明

けになると密林や水邊の藪の中に身を隠し、日中は睡眠をとる。斯様にして遠路を歩き目的の村に達する。追跡されたりすると、藪やヒラウチハ（サボテンの一種）の木の中に身を投げこみ注意深く身をかくしてゐるので、追跡者には氣づかず見付けられることはない。貴重な寶物を運んでゐる一行を襲ふ場合は、通路に待ち伏せ、近づいてくると下帶をからげ顏をかくして見られぬやうにするといふ。興味深いのは、これらギャングの掠奪を防ぐため、村人達はラーモジを財産の安全に責任をもつ保證人として賃銀をかけ、雇ふ仕組をもつにいたつたことである。かやうにして、ラーモジには漸次ラクワールダール Rakhwaldar（番人）となるものも少くないといはれる。

ラーモジの主神は、戰の神カンドバ Khandoba（劍の父の意）等である。またデヴク Devak といはれる家の神を崇める。デヴク神は、通常一本の樹木或は若干の樹木の葉の束で、その實を食べたり用ひたりすることを禁ぜられてゐる。またそれは結婚の守護神でもある。

ラーモジ族の社會的地位は、マハール族、マーング族のいくらか上位にある。

ラーモジの子供が七、八歳になると、何かを盜まなければならない。捕へられ監獄に入れられると親達はかへつて喜ぶ。そして男が監獄から出る時、大人達は足元に伏し、娘の夫にと結婚申込をするといはれる。

ラケール族 Lakher

アッサム東方ルシェーイ山地の南部に居住するモンゴロイド部族である。

社會組織　トロングサイ Tlongsai　ツォーナング Zeuhnang　サボオ Saben　ハウタイ Hawthai　リアライ Lialai　ハイマ Heima の六支族より成り、支族は多數の氏族に分れてゐる。以前はこれらの氏族は族外婚的であつたが、現在では結婚について特別な制約は存在してゐないといはれる。氏族はアベイファング Abeiplang（王族）　ファングザング Phangsang（僧族）　マッチファング Machhiphang（平民）の三階級に分れ、この間に社會的地位の高下が認められ、結婚についても上層階級に屬する氏族の女子は、下層階級の氏族の女子より花嫁料は高いといふ。尙支族には夫々一つの酋長氏族があり、村の政治は酋長が長老の補佐を得て行ふが、相當獨裁的である。

葬制　死體は必ず土葬するが、棺は用ひず直かに布につつむ。酋長及びこれに準ずる人達は、夫々石の戸口をもつた石槨のトラピ或はロンガング thlapi, longang といふ家族墓に埋葬される。家族墓には、次々に家族のものが葬られ、その度毎にその直前に葬つたものゝ頭蓋及びその他の骨を布に包んで室の片隅に置く。一般人の墓はトラク thlata といふ長さ五呎、幅二呎半、深さ五呎位の穴で、足から先づ押し入れ、葬つた後は石で蓋をし、穴全體に土をかけて埋める。野獸に殺されたり、コレラ等で死んだ場合は、墓を村の西方郊外につくり、墓の上に平石を標識として立てる。

宗教　ラケールの宗教は精靈崇拜で、ルシェーイ族に似てゐる。一般人は死後その精靈は、アティキ Atikhi（死人の村の意）に住む。アティキの生活は現世と同樣で、こゝでも精靈は再び死ぬが、その際酋長の精靈は熱い霧となつて天に登つて消えるが、貧乏人の精靈は蟲となる。斯樣に生れ代つた蟲は、鷄に食はれ永遠に消滅してしまふ。これに對し銀獸を殺し得たものゝ精靈は、パイラ Peira 卽ち極樂へ行く。こゝに赴いた精靈は、自分の妻や子供達が死んだ場合、手許に呼び寄せることが出來る。ラケールはまた、人が死ぬ直前死者の精靈は豚或は木の中に入つて行き、それから再びアティキに出發するため家に戻つて來ると信じてゐる。更にルシェーイ族

のやうに子供の精靈は弟や妹達の中に生れかはると信ずる。

ラケール族も、首狩を行ひルシェーイと同樣アイ祭儀をなし、敵の首級を木の上におく。しかしこれは一九一七年以來行はれなくなつた。

ラケールは狩獵の他に農耕に從事する。武器として鐵砲、弓矢、槍、ダオ★、楯、パチンコ等、農具として鍬、斧、ダオを用ひる。

註　★dao 先の彎曲した手斧の一種。

リンド族 Rind, Rind-Baloch

バルチスタン北東部に居住するバロック族の支族で、バルチスタンの支配的地位を占めてゐる。アラブ族の支族コライシュ族に源を發するといはれる。分族ボヅダール Bozdar マザーリー Mazāri カスラニー Kasrani はスリマン地方に、マッリ Marri ブグティ Bugti 兩族はガンダワ地方に定着してゐる。

リンブゥ族 Limbu

ネパールのドゥド・コシよりカンキ河間の山地帶、メチ河東部、シッキム等に居住するモンゴロイド種族で、キランティ・グループ中カンブゥ族に次ぎ第二位にある。カンブゥ族が上位にあるのは、同族がカス族及びネワール族の血を混へてゐるのに對し、リンブゥ族は自由にレプチャ族と雜婚したためといはれる。レプチャ及びボーチャ族等はリンブゥ族をツォング Tsong といつてゐる。リンブゥ族は、かつてグールカ族のネパール侵入の際相當抵抗して彼等を惱ました。從つて武器を操るに馴れ、軍人族と自稱してゐる。事實キランティ聯隊或はグルカー聯隊にも編入され、一八八八年のシッキム戰爭等にも相當の働きをみせた。

リンブゥ族の構成は非常に複雜である。十三の族內婚の支族に分れ、各支族は更に多數の族外婚の分族より成る。その分族の名は、トーテミズム的のもの、地域的のもの、名祖から出たもの等で奇妙なものが多い。例へば、パーンタル支族 Pānthar のコケナンバ分族 Kokenamba の名は、太陽と共に起る人の意で、分族の開祖を指し、チョッタル支族 Chhothar のケマ分族 Khema は雉、ヤンゴルブ支族 Yangorup のセルリング分族 Sorling は泥棒の意である。

族外婚の法則は、男系により行はれ、同一兩親の直系子孫間の通婚を禁じ、從兄妹間の通婚は三代乃至七代の間禁止してゐるが、嚴重に守られてゐない。更に山地部族の間では、義兄弟となることにより通婚を制限してゐる。それは、二人の男子は、ブラーマン或は佛教徒の場合はラマ僧により、特殊の儀式を行つて義兄弟となり、兩家間の通婚を數代の間禁止し、これにそむいたものはカースト除外の罪を加へるものである。

リンブゥはムルミー、レプチャ、ボーチの各部族の成員をトゥム・トゥム Thum-thum といふ部族會議にかけた後、自族內に入ることを許す。カンブゥ族やヤクハー族は、キランティ・グループに屬するから、簡單なる採擇の方法で編入する。

リンブゥは、周圍がヒンヅー教徒のところでは自らシヴ派と稱し、マハーデヴ神 Mahādeva 及び祀神ガウリ Gauri を崇拜する。この二神はネパールの曖昧なヒンヅー教徒の間では最も人氣がある。ところが、佛教徒の近隣では、ラマに敬意を拂ひ念佛を唱へる。しかし、斯樣な歸依の被覆の下に、彼ら自身の本來の神々が家の神或

は森の神として崇拜されてゐる。ユマー神 Yumā　カーボバー神 Kāpobā　テバー神 Thebā 等これである。森の神ヒマーリヤー Himāriyā も尊崇される。

のみならず、リンブゥは名もない多數の惡靈にとりかこまれてゐると信じてゐる。そしてこれらを宥和する役目としてビジュアー族 Bijuā がある。ビジュアーは、シッキム及び東ネパールに特有の放浪行者の階級で、すべてのヒマラヤ民族のために魔祓者、巫術者として働いてゐる。この意味においてリンブゥの宗教は精靈崇拜的であると同時にシャーマニズム的である。しかしリズレーは、これをシャーマニズムといふには不十分の點もあり、むしろシャーマニズム的精靈崇拜であるといつてゐる。

火葬と土葬は共に行はれてゐるが、後者の方が一般的で、死體は頭を東に向け上向きに横へる。遺産は息子に分配する。しかし養子又は內緣の妻から生れた所謂庶子は正子の分前の半分を受ける。分配は部族の長老會議が普通行ひ、長男には餘分の分け前を與へる。

リンブゥは、ネパール族一般から見るとカス族、軍人族たるマンガル、グールーング、スヌワール各族の下に位する。キランティ・グループの間では前述のやうな集團間の地位の上下があるが、これはヒマラヤ山中のみのことで、こゝを越えると皆同級である。

リンブゥは、牛・豚肉その他すべて菜食獸の肉を食べる。

ルシェーイ族 Lushēi

アッサム東部のルシェーイ山地に居住するモンゴロイド部族である。北方から侵入し來り同族のクキ族を追ひ拂つて十九世紀中頃現住地に到達した。一九三一年、三、〇三六人を算する。

社會組織　サイロ氏族 Pailo 其他多くの氏族から成つてゐるが、氏族による社會的地位の高下は認められない。唯ターングチューア Thangchuah といふ宴會を終了したものには、他よりも一段高い社會的地位が授けられる。この宴會はチャウング Chawng 以下十の宴會より成るもので、これを終へたものは、タングチューア布といふ一枚の特別な縞の布を身にまとひ、極樂鳥の羽のついた同樣の布のターバンを被ることが出來るし、また家の側壁に一個の窓を開くことが出來る。しかし、近來この宴會も行はれなくなつた。唯、氏族の中サイロ氏族だけは、酋長氏族であるから一般的に尊敬され、社會的優越の地位を占める。

住居　村は山地の要害の場所につくられ防備も嚴重で、中央に酋長の家と宿泊所があり、そこから放射的に道路が通じそれに沿うて村人の家がある。酋長の家には酋長の家族の他に孤兒や貧乏人も養はれ、宿泊所には獨身者が住んでゐる。家屋は、木材、籐、竹でつくられ、屋根は藁や棕櫚或は竹の葉で葺いてゐる。床は高く階段によつて家に入るやうになつてゐる。

婚制　ルシェーイ族は往時、氏族は族外婚的であつたけれども、今日は結婚について氏族間に特別な規定はない。サイロ氏族は、以前は族內婚であつたが、今日は他氏族の娘を娶るものも少くない。花嫁料はサイロ氏族を除けば、一般に同率で三匹から十匹までの牛の他に、花嫁の伯母に五ルピーから四十ルピー、その母方の近親の男には四ルピーから四十ルピーを支拂はねばならない。牛の代りに金で代納することも出來るが、花嫁の一番上の姉にも相當の心附をすることになつてゐる。

花嫁料を未拂のまゝで男子が死ぬと、その子供が母親のために殘額を支拂はねばならない。結婚式は親族と友

人に饗應し、村の呪術師が鷄を供犧するのが主要の部分である。結婚式後、花嫁は數日間夫の家で寢泊りするが、毎日實家に歸ることになつてゐる。

離婚は相互の諒解の下に許されるけれども、花嫁料は返還されない。婚前の性的放縱は默認され、娘が子を生んでも相手の男が彼女の母方の祖母に牛一匹を納めるならば必ずしも結婚する要はない。

葬制　死體は家の前につくられた墓の中に埋葬する。野獸に殺されたり、木から落ちて死んだり、コレラで死んだり、產褥で死んだりしたものは村の外に葬られる。現在では酋長の家のみ行つてゐるが、往時全ルシェーイ族間に行はれた特別の死體處理法がある。それは死體を丸太をくりぬいて作つた棺の中に横たへ、厚板で蓋をし、これを家の中の壁の前に置く。棺に近く特別の爐を作り、火を點じて爐の熱氣が棺の中に送られるやうにすると同時に、棺中の臭氣を拔くために棺の底に孔を穿ち竹の管をさしこみ、これを通つて臭氣が床下の地面に放散するやうにする。斯うして死體が乾き切つてしまふまで爐に火を燃やしつゞけるが、大體二ケ月乃至六ケ月を要するといはれる。

宗教　ルシェーイは精靈崇拜者である。死後人の精靈が赴くべき世界の存在を信じ、これには二つあると考へる。一般普通人の靈の赴くミテークーア（死人の村の意）と、特に入ることを許された人の靈の赴くピアルラル（所謂極樂）である。ピアルラルへ赴くことの出來るものは、ターングチューアを行つたもの、三人の處女を享樂したもの、七人の女を享樂したもの、象、牛、野猪、大蝙蝠その他の動物を殺した男で、女子はピアルラルへ入る資格はない。また、ルシェーイは近親の靈に供犧し、夫が死ぬと食事の一部を亡夫の靈に三ケ月間供へることになつてゐる。この間寡婦が他の男と通ずるならば、あらゆる苦痛と姦通の罪を負はねばならぬと考へてゐる。彼等は宴會の御馳走の一部を必ず近親の靈に供へる。今世紀初頭以來キリスト教浸潤し來り、今日その信徒は全人口の四分の一を超えるといふ。

石造建造物　ルシェーイは、往時は死者のために石造記念物を作つたが、今日は石造は酋長に對してのみで、普通は木造である。石造記念物には墓中に直立した一個の石をかこんだ平石群と、一本の立石だけのものとの二方式がある。直立した石には牛の首、鐵砲等が彫刻されてゐる。木造のものは平臺で、これには故人が生前射殺した獲物全部の首が置かれる。チャムファイ、タチーブ其他には石造記念物が多數見出される。近來獵犬の記念のため石を建てることも行はれる。

生業・首狩　ルシェーイは一般に農耕に從事してゐる。燒畑耕作を行つて來たが、水稻耕作も英當局の奬勵により若干行はれるやうになつた。オレンヂ、パインアップル等を豐富に生產する。

ルシェーイは元來掠奪の慣習を有する上に、好戰的氣質のため騷擾たえず、英國側を惱まして來た。戰で殺した敵の首級は村に持ち歸りアイ Ai 祭儀を行ふ。これは殺されたもの丶死靈は來世において殺したものの奴隷となることを確實にする儀式である。この祭儀が了ると首級を屋外の一本の木にぶらさげる。

レプチャ族 Lepcha, Rong, Khamba, Mon

シッキム、西ブータン、東ネパール、ダージリング等に居住するモンゴロイド部族である。皮膚の色極めて白く、短身、男は平均五呎、女はもつと低い。男子は筋肉逞しいといふよりは、肥滿型で、四肢の發達はマーガル族、グールーング族、ムルミー族等より劣つてゐる。一九三一年、ベンゴール州に二五、七八〇人を算する。

社會組織　レプチャ族は、ロング Rong とカンバ Khamba の二主要分肢に分れる。ロング族はシッキムの原住民と稱するもので、カンバ族は支那のカンバ州から三百數十年前入つて來たといはれる。この兩族は相互に通婚し全く混淆してゐる。前述の二族の他タル thar といふ集團が十ある。以前は族外婚の集團であつたが、近來はアディンブソ族 Adinpuso のみ族外婚をいとなみ、その他の集團は族外婚的性格を失ひ、自己集團或は他集團の女子と結婚する。十集團の中でバルフングプソ Barphungpuso 及びアディンブソの二集團は其他の集團より上級に位し、それらと通婚しない。シッキム國の役人はこの二集團からえらばれてゐるが、これらはカンバ族の人の裔とみられる。八集團は、シッキムの農耕者の主體を形づくつてゐる。これらの八集團の成員は、リンブゥ族と通婚出來る。通婚は、養子關係成立の場合は當代以降九代の間禁止されるのを除いて、一般に三代の間だけ禁止される。義兄弟の儀式はムルミー族等と同性質で、たゞラマが祭司の役をする。チベット人は親睦の保證としてチベットの長衿卷を交換する。この儀式では二人の友人の妻君が重要な役目をつとめる。

婚制　レプチャの娘は十六歲から十八歲頃迄の間に結婚する。男は四十ルピーから百ルピーに達する花嫁料をつくらねばならぬので結婚は晩い。婚前の性的放縱には比較的寬大で、娘が姙娠した場合、男は結婚するか、でなければ墮胎させるため娘の兩親に若干の償金を拂ふ。結婚式及その日取等はラマが中心となつて決め實施する。男が貧乏のために結婚出來ない時は、いはゞ信用で結婚することを許される。この際花嫁はその兩親の家にゐたもので、夫は彼女と同棲するため新婦の家へ行き、義父のため花嫁料の全額分を働くのである。多夫婚は比較的稀であるけれども、ない譯ではない。チベットの習俗にしたがひ弟達は長兄の妻の情にあづかつてゐる。

寡婦は再婚出來る。第二の夫の選擇には制約はないけれども、亡夫の弟と結婚するのが妥當とされる。その他の男と結婚する場合、義弟は通常その子供達を引受ける代り、花嫁料の返濟を要求することが出來る。夫婦仲のうまく行かない場合、仲人がその間を調整する義務をもつてゐるが、二三の努力も效がない時は、二人を結婚させたラマ僧が登場して、離婚させる。妻は兩親の家に歸り、夫は妻の兩親に若干の償金を支拂ふ。

人妻が姦通した時、長老會議（パンチャーヤト）は、その事件をとり上げ、相手が夫々支拂ふべき罰金額を決定する。姦通の事實が明かとなつた時は、夫は當の妻の兩親に報償金を支拂ふ要なく、彼女を離婚し、その裝身具をとり上げる權利をもつ。

相續　遺產相續及び繼承については、レプチャは自身の部族の習慣に從ひ、部族の長老會議（パンチャーヤト）の管理に委ねる。死者の財產は、その息子達に平等に分配されるが、實際は必ずしも等分は守られてゐない。死者の妻及び娘達は、長男が財產の餘分の分け前を得てゐる場合は、彼の許に來る。シッキムでは、土侯に同等の奉仕をしてゐる場合だけ息子達へ等分な分配を許してゐる。遺產の分配は長老會議（パンチャーヤト）がする。父親は、庶子等の特殊事情にある息子のために遺言することも出來、長老會議（パンチャーヤト）はこれを發動させる。未婚の娘は、息子達に養はれるが、彼女は既婚の娘達と共に遺產の分前に與り得ない。死者に息子のない場合、既婚の娘が夫と共にその家に入りうるならば、相續は出來る。しかし、これらの全體の組織は、極めて流動的で長老會議（パンチャーヤト）が適當にこれを動かしてゐる。

宗教　レプチャ族は、一般に佛教を信ずる。しかし往時は、リンブゥ族にみられると同樣な、一種のシャーマニズム的な精靈崇拜が唯一の信仰であつた。その痕跡は、未だ人々の間に殘存してゐる。雪白の巨人キンチンジャンガ神 Kinchinjanga は、レプチャの地・水・火・風の神々の主神で、嵐や雹や頽雪を以て田畑を破壞し家々を掃き去つて人間を苦しめる神であるが、佛教々義の中に飜入されて釋迦牟尼の師とされてゐる。またチレンヂ

或はラチェン・オム・チュブ・チム Chirenzi, Lachen-Om-Chhup-Chhimbu はマハーデヴ Mahadeva と同一とみなしてゐる。佛教のことは、ラマ僧が一切のことを掌る。

死體は、よく包んで顏を東に向け坐らせて土葬にする。カンバ・レプチャの上流層では火葬にする。

性質・生業　レプチャの男は髭なく、頭の頂にそふて髮を分けてゐるので女のやうな感を與へる。男女共長髮である。その衣服は簡素で美しい。氣質は極めて朗らかで惡氣がない。愛嬌があり、ボーチャ、リンブウ、ムルミー、グールーング族等にみられぬ理智的・推理的な求智心が認められる。非常に正直で、窃盜、喧嘩等もあまりしないといふ。

レプチャは一般に貧しい農耕者である。地上五呎位の竹造りの小家に住む。彼等は移動生活をなし、三年と一つ處にゐない。地味がつきると森林中の新しい個處にうつる。

いかもの食ひで、象、猿、犀その他あらゆる動物の肉や植物を食べる。

ワジール族 Wazir

西北國境州ワジリスタンに居住するパターン族の支族である。ダルウィシュ・ヘル Darwish Khel マースード Mahsud の二分族より成る。

體軀頑健で性進取的、不羈奔放、鬪爭慾盛んである。文化の程度低く、大抵掠奪に從ひ、定業につかず、農耕、放牧等に從事するものは少ない。ワジールの女は他のパターン支族に比しより多くの自由を享受してゐる。彼等の間では、氏族間の怨恨は國憲のやうに重くみられてゐる。

エルーカラ族 Yerukala

この部族は、中央州及びマドラス州の放浪部族として知られ、主としてチャーンダ地方にみられる。一九三一年五三、〇四五人を算する。窃盜、乞食、占師、籠作り等によつて生活し、同種のことに從事してゐるコラヴ族（又はクラヴ族）と同視するものもある。

非常に巧妙周到な方法で犯行をする盜人であるが、近來マドラスの鐵道方面にもその辣腕をひろげるやうになつた。

子供が生れた時、産湯をつかはせてから父親の傍の寢籠に入れられ、阿魏（Asafoetida）、椰子糖その他のものが母親でなく父親から與へられる。

幼兒結婚を行ひ、どこかで女子が生れると、未婚の男の子をもつてゐる父親は一ルピーを携へ嬰兒の家へ行き、その父親の衣服に金を結んで歸る。かくして嬰兒が大きくなると自分の息子の嫁にと要求する權利をもつのである。

犬の肉は食べないけれども、猫や二十日鼠を食ひ、食物については制約をもたない。

第二編　種姓誌

アーグリアー族　Āgria　製鹽工　アグラ及び西海岸。

アーホーム族　Āhōm　農耕者　アッサム　一九三一年、二四九、四三四人を算へる。嘗てアッサムに君臨したが、現在は勢威を失ひブラーマンは彼等の手から水をとらない。

アーンディ族　Andi　托鉢僧　タミール地方。

アガサ族　Agasa　洗濯屋　カルナティク地方。

アガムダイヤン族　Agamudaiyan　農耕者　タミール地方。

アガルヴール族　Agarvāl　商人　北及び西印度。

アグラハーリー族　Agrahāri　商人　アグラ。

アッタリー族　Attāri　香料作り　北及び中印度。

アティート族　Atit　行者　ベンガル及び北印度。

アヒール族、ゴアーラ族　Ahir, Goāla, Golkar, Gaolān, Rāwat, Mahākul

北印度及び中央印度における牛飼ひ、搾乳者の大カーストである。アヒール族は、ベンゴールではゴアーラといはれる。それはゴパーラ Gopāla（牝牛の保護者の意）から出てゐる。ベラールではガオラーンといはれる。チャーングではゴルカル、チャッティスガルではラーワト、ジャスパル土侯國ではマークルといはれてゐる。

アヒールの名稱はヒンヅー聖典に認められるアブヒーラ族 Abhīra から出てゐる。アブヒーラ族は西紀元前後中央アジアから印度に來た移住部族に屬するらしく、聖典ではダシュ Dasyu（盜賊の意）として記されてゐる。この部族は廣く印度に擴がり、かなりの地域を占據してゐたらしい。クリシュナ神 Krishna はヤーダヴ族 Yādava の指導者とされてゐるが、アヒール族にヤードゥヴンシ Yāduvansi といふ副カーストがある點から考へて、クリシュナはアブヒール族であつたらしく思はれる。然し、アヒール族はアブヒーラ族からその名を得、また部分的にはそれから出たものであるにしても、アヒール族は、多年月の間には多數の他部族のものを編入し、現在に見るやうな純職業的カーストを形成するに至つたことは疑ひない。從つて地方によりその身體的特徴を異

にしてゐる。

社會組織　北印度ではヤードゥヴンシ Yaduvansi (Jāduvansi) ナーンドヴンシ Nāndvansi バロティア Bharotia ナルワリア Narwaria 其他の副カーストに分れる。チャッティスガルのラーワトはジャディア Jhadia カナウジア Kanaujia 其他に分れ、他の地域においても夫々副カーストが認められる。また多數の族外婚の氏族に分れてゐるが、各氏族は動植物等トーテミズム的の名をもつてゐる。

婚制　同一氏族内及び實の從兄妹婚は禁じられてゐる。夫は妻の生時中であつても妻の妹と結婚出來るが、その姉とは出來ない。家族内に娘を交換することは許されてゐる。一般に娘は成人前後に結婚するが、幼兒婚の傾向も認められる。娘が未婚の儘成人すると、その兩親が罰せられる處もあるが、他方成人の徵候の現れるまで結婚してはならぬとする處もある。アヒールの娘が外部の男に口說かれた場合、娘は相手の男のものになるが、その際男に四十乃至五十ルピーを出させる。この金は娘の父親に渡されるが、彼はこれをもつてカーストの仲間に饗應する慣はしである。一般に性的犯罪は寬大にとり扱はれる。

結婚式は、各地方で行はれる形式に從ふ。大抵男の父親から申込みをなし、花嫁料は花嫁へ渡す。マンドラのカオンラ・アヒール Kaonra A. 及びチャッティスガルのコサリア・ラーワト Kosaria Rāwat は、唯式の日を決めて紙に書いてもらふだけにブラーマンを雇ふ慣習がある。實際の式は兩家の親族の一人が先にたつて行ふ。式には花嫁は小さい回轉碾石の上に立たせられる。花婿は彼女と向きあひ、碾石をつかみ、碾石と共に七度ぐるぐる廻る。

寡婦の結婚は許され、亡夫の弟と結婚するやう期待されてゐる。獨身者が寡婦と結婚したいと思ふ時は、短刀か土器を用ひる儀式をしなければならない。アヒールの間では離婚も許される。ホシャンガーバードでは離婚の徵として、夫婦が着てゐた衣服から細長い片を裂き取る。これは結婚式に夫婦の衣服を結ぶのと良い對照である。

葬制　死體は火葬或は土葬に付する。臨終の際、その口にメバウキの葉、煮飯、牛乳及び黃金の小片（黃金のない場合はルピー貨）を入れてやり、その後これをとり出す。遺族は、十日の間葉を器具として食事する。每晚庭にランプを灯し、朝になると水と小楊枝を出しておく。そして十日目にこれらを取り去つて、川に捨てる。

チャッティスガルでは、死後三日目に死者の精靈が歸つて來ると信ぜられてゐる。一人の女がランプを赤い土壺の上にのせ、夜中溜池か小川へ行く。魚は燈を慕つて集つて來る。そこでその一匹を捕へ壺の水の中に入れ、家に持ち歸つて、小麥粉の小堆の傍に置く。周りには老人達が座つてゐる。死者の息子か近親者の一人が薑黃を塗られ、一つの石を下からつまみ上げる。この石を壺の水で洗ひ床の上に置き、死者の男女の如何によつて、牡鷄か牝鷄を供犧する。斯うして、石は家神として家に祀られる。前述の儀式は、死者の精靈が先づ魚となつて家に持つて來られ、次に魚の入つてゐた水で洗つた石に、その精靈が移つたことを意味するのである。

宗教　アヒール族はヒンヅー教とは特別の關係に立つてゐる。彼等の飼ふ牝牛は神聖視され、女神として崇拜されるからである。しかも、ヒンヅー教の最も人氣ある神クリシュナ Krishna は暗色の牧牛者であつた。人氣ある鄕土神としてはシンガージ Singaji（牛の守護神）　ビーラト Bhilat（ネルバダ地方の小神）　ダイト Daitya（ベトゥル地方の村神）等がある。

マンドラ及びその他の地方では、水牛飼ひが長壽を得て亡くなると、村の中に彼を祀る壇を作りマハシ・デオ

Mahashi Deo（水牛神）として崇拜する。牛飼ひについても斯様にして、バルキ・デオ Balki Deo（牛神）といふ。

なほ、アヒールの仕事そのものは、宗教的想像へと導いていく性質をもつてゐる。彼等が森林或は荒蕪地にあつて、晝夜唯一人きり牛の群を見守つてゐると、比較的感動しやすく信心深い無學の精神が、上からの精靈の聲を聞くこととはあり得ぬことではない。日中の長時間、熱氣と靜寂の裡に、半睡の狀態にゐると幻視が表れたと考へることもあるであらう。斯くて、アヒールの中から神に滿たされた宗教的人間も時折出て來るのである。

アヒールはまた、牛の集合場所の神カラク・デオ Kharak Deo 密林内の牛檻の神マタル・デオ Mater Deo 村の牛舍の神グラヤ・デオ Guraya Deo を夫々尊崇する。ジャスブルのマークル・アヒールはマハーデオ卽ちシヴを水牛の神、サハーデオ Sahadeo を牝牛の神、ラクシュミ Lakshmi を米の神とし、この三神を崇拜する。

アヒールの主要なる祭儀はディヴァーリ祭 Divali である。これは十一月の初秋の收穫季に行はれるが、人々は特殊の裝ひをこらし、急造の小塚の周りを廻り乍ら踊り、踊りが濟むと牛群を追つて散々にこれを蹂みつける。またマライ祭 Marhai には酒を飲んで醉ひつぶれる。

社會的地位其他　アヒールは雛鷄の肉を食ひ酒を自由に飲む。中には豚肉、野鼠を食べるものもある。彼等は、聖牛との關係で比較的良い社會的地位を享受してゐる。チャッティスガルのラーワトの女は、鑰銅の大きな足飾をつけるのが特に好きである。

生業　現在アヒールの中傳統の牛飼ひ、牛乳、牛酪關係者は僅か三十パーセントにすぎない。四パーセントは家僕、その他は農耕者、勞働者として働いてゐる。

アヘーリヤー族 Aheriyā　狩獵者及び捕鳥者　パンジャブ及びアグラ。

アムバッタン族 Ambattan　理髮師　タミール地方。

アラーイーン族 Arāin　市場出菜果栽培者　パンジャブ。

アラク族 Arakh　作男　アグラ其他。

アラブ人 Arab　回教族　パンジャブ及西印度。

アローラー族 Arōrā　商人　西パンジャブ。

アヴーン族 Avān　農耕者・地主　パンジャブ。

アンバラッカーラン族 Ambalakkāran　見張り番　タミール地方。

イーディガ族 Idiga　棕櫚酒採り　テリンガーナ地方。

イーラヴン族 Ilavan　棕櫚酒採り　マラバール地方。

イダイヤン族 Idaiyan　羊飼ひ　タミール地方。

イヅァヴ族 Izhava

トラヴンコールの最も主要なカーストで、セイロン島から移つて來たといはれる。清潔好きの上に女は華美であり、通常前額の眞中に髪を結び、どんなに貧しくても銀、眞鍮の腕環や耳輪等をもつて飾つてゐる。南の地區以外文身は餘りしない。

彼等は正統のヒンヅー教徒と稱してゐるが、地神その他の鄕土神或はバードラ・カリ Bhadra Kali 等を尊崇し、動物を供犧する。また、マハーバーラタ物語にあるパンチャ・パンダヴ神 Pancha-Pandava をも崇拜してゐる。イヅァヴの司祭者は床屋を兼ねてをり、結婚式には女床屋が花嫁の髪を結つたり、ターリを渡したりする。

ヴィドゥール族 Vidhur　書記　デッカン地方及び中央州。

ヴェーダン族 Vēdan　狩獵者　タミール地方。

ヴェーラン族 Vēlan　巫術師　マラバール地方。

ヴェットゥヴン族 Vettuvan　狩獵者　タミール地方。

ヴェラーラ族 Vellāla

タミール地方の農耕者の大カーストで二百五十萬以上の人口を擁する。その由來について、このカースト自身の極めて立派な二三の傳承があり、何れも農耕と結びついてゐる。また傳承の上からみて、他地方から現住地方に移住して來たものらしい。一般にタミール地方のスードラ・カーストの第一位に置かれ、この地方の强力な代表とみられる。身體的特徵は、長頭、狹鼻で、身長は低い方である。

社會組織　ヴェラーラ族は、トンダマンダラム Tondamandalam（チングルプット）ソーリヤ Soliya（タンジョル、トリチノポリ）パーンディア Pāndya（マドラス、ティンネヴェリ）コンガ Konga（コイムバトル・サーレム）の四主要集團を有する。これらの集團の成員は基本的慣習において相互に類似してゐるが、通婚しない。各集團は更に地域的根據にもとづき多數の族外婚の氏族に分れる。この他、ヴェラーラ族に屬さないけれども、ヴェラーラと稱する全く別個の集團が廣く分散し、多年月の間に本當のヴェラーラ族となつたものも少くない。

婚制・葬制其他　幼兒婚、成人婚共行はれ、ブラーマンが執行する。族外婚の氏族の中には娘の不足のため、

花嫁を求めて他の氏族に移るものがある。

死體はすべて火葬にする。不淨期は十五日である。彼等の尊崇する神々はヴィシヌとシヴである。各集團にはヴィシヌ、シヴの兩派があるけれども、宗派上の差異は通婚上の障害となつてゐない。また各集團にはパンダーラム Pandāram といふ司祭者があり、葬式、小儀式の執行に當る。パンダーラムの中には常に聖紐を佩びるものがあるが、一般のヴェラーラは葬式の際しかつけない。

ヴェラーラはスラードの式を行ひ、又マハーラヤ Mahālaya の日には祖先をよび迎へる儀式を行ふ。これは再生族とスードラの上級カースト許りが行ふ儀式といはれる。

彼等は、宗教的行事については、ブラーマンよりも嚴格で、酒醉と肉食は禁斷する。又ブラーマン以外の他族とは會食しない。

ヴェラーラの一部には、最初の妻が死亡し第二の妻を迎へる夫は、鉸懸（メヌカ）の樹を切り倒しターリを結んで樹と結婚することになつてゐる。また三度目の妻を迎へる時は、夫はターリをエルッカン樹（Calotropis Gigantea）に結んで結婚し、それから第三妻と結婚する。これは第二、第四の妻は旨くいかないといふ觀念から、樹木や草をその代りとするのである。

生業・性質　ヴェラーラは古來農業者としてその社會における地位と職務は重視されてゐる。ブラーマンの祈禱主の權力、商人の利益、すべての富、カーストの準則、手工藝其他一切は、ヴェラーラの耕作に支へられると謳はれた程である。彼等は、多く富裕な地主、土地管理者であり、農業に依存して生計を立てゝゐる。しかし彼等自身は犁に手をふれず、殆ど作男や農奴を使用してゐる。農耕に關係しないヴェラーラは、書記、商人、商店主、官廳下僕、村會計士其他廣範圍の職業に從事してゐるが、所謂下賤な仕事にはつかうと欲しない。

ヴェラーラは、平和を愛し、質素、勤勉で、米、檳榔樹、煙草の栽培では世界に比肩するものはないといはれる。

一般にタミール語の純粹な方言を用ひる。

ヴェラマ族　Velama　地主・農耕者　テリンガーナ地方。

ヴェルッテーダン族　Veluttēdan　洗濯屋　マラバール地方。

ウッパーラ族　Uppāra　製鹽手　カルナティク地方。

ウッピリヤン族　Uppiliyan　製鹽手　カルナティク地方。

ウラマ族　Ulama　司祭者　パンジャブ。

オード族　Od, Vadder　土方　東印度を除き一般。

オスヴール族 Osvāl 商人 西印度。

カーサール族 Kāsār, Kasēra 眞鍮工 南印度を除く一般。

カーサウンダン族 Kāsaundhan 食物屋 アグラ及びオード。

カーサルヴーニー族 Kāsarvāni 食物屋 アグラ及びオード。

ガーシヤー族 Ghāsiyā 掃除屋 ガンジス河谷。

カーチ族 Kachhi

マラータ及びヒンドゥスターニ地方に居住し、集約農耕により諸種の野菜類や、灌漑作物を育生してゐる重要な農耕者の大カーストである。このカーストはクルミー族の出といはれ、またラージプゥト族のカチワーハー氏族 Kachhwāha と關係があるともみられる。

社會組織 多數の副カーストに分れてをり、副カーストの名は、夫々育生する特殊植物からとつてゐる。例へば、ハルディア・カーチ Hardia Kachhi は薑黄を育生するカーチの意、アリア Alia は印度茜草、ジリア Jiria は馬芹(マヘン)から夫々出た名である。またカーチワーヒ Kachhwāhi といふ副カーストもある。

婚制 婚制はクルミー族のと似てゐる。同じ兩親から出たものは三代の間通婚出來ない。男は同時に二人の姉妹を妻とすることが出來る。娘は通常十歲前に結婚する。親が貧しいため整へることの出來ない場合、娘が十歲になるのを待つて、カースト仲間のものが寄附を募り金を集めて結婚させる。花婿は花嫁より五歲乃至十歲多くなければならない。

結婚の主な儀式は、バーンワル bhānwar といつて聖標を七度廻ることである。そして二人がこれをやつてゐる間、兩親と親族達は屋內にともつて泣く。最初の四回は、嫁が先にたつて項垂れ、婿は右手を嫁の背において歩く。後三回は婿が先にたち中指で嫁をつかんで歩く。これが濟むと、嫁は家の中の何處かに隱れ婿は彼女を探す。見付けえない時、彼は彼女に幾許かの裝身具を與へることになつてゐる。その際嫁の妹が姉の衣裝を着け、婿は嫁と誤つて捕へ、女達に冷かされることもある。

その式が了るとモシャット Moshatt の儀式を行ふ。これは花婿が結婚冠を籃に入れて屋根に下げて置く。翌月の六日目、再び婿は式服を着け、この冠を皿にとり、友人に隨きそはれ最寄りの小川或は川へ行き、冠は水に投げ式服の上衣を洗ふ。

寡婦の再婚は許される。彼女は亡夫の弟と結婚するのが至當とされてゐる。離婚は、カースト長老會議に陳述すれば有效となる。

特殊慣習 カーチ族は、四・五歲になると男女に拘らず耳に穴をあける。これが濟まなければカーストの成員とされない。通常金工のスナール族のものが穴あけ役で、彼等は呼び入れるのを期待して地方を巡回してゐる。穴をあけるには十五日位眞鍮のピンをつけ、その後木片にとり換へる。女兒の場合、穴を大きくするために孔雀

の羽毛を通す。下級のカーチの女は鼻孔に穴をあけ鼻輪をつけてゐる。娘は、一般に結婚前後蠍や孔雀の模様を文身する。

葬制・宗教　カーチは、五歳未滿の子供や疱瘡、コレラ或は蛇に咬まれて死んだ者の死體は土葬に付するが、その他は火葬する。チンドワーラでは死體を洗つたり灌油したりしないけれども、少量の薑黄と水をふりかける。葬儀や火葬の日には、その家の者は調理せず友人に食物を分けてもらふ。

彼等の神はバインサースル神 Bhainsāsur である。菜園の保護神で、國内の一本の樹木の下にある石で以て表し、年一度ホリ祭 Holi の後に朱、檳榔樹の實、椰子の實、神酒を供へて拜む。

生業・性質　このカーストは殆どあらゆる種類の野菜や園藝作物をつくつてゐるが、主なるものは蕃椒、薑黄、煙草、韮、玉葱、大薯其他である。

性質は勤勉、働き好きで灌漑及び施肥に巧みである。

カーチー族　Kāchi　市場出菜果栽培者　上部及び中央印度。

ガーゾラ族　Gāzula　行商人　テリンガーナ。

カーティー族　Khāti　大工　上部印度。

カーティー族　Kāthi　地主・農耕者　西部印度。

カーティク族　Khātik　屠牛者　上部及西印度。

ガートワール族　Ghātwāl　見張り番　ベンゴール。

ガーニガ族　Ganiga　油しぼり　カルナティク地方。

カーパーリー族　Kāpāli　麻織工　ベンゴール。

カープー族　Kāpu, Reddi　ハイデラバード、マドラス州ベラリー、クルヌール各地區及びビザガパタム等の主要な農耕者のカーストである。人口三百數十萬に達し、南印中最大のものである。

カーマール族　Kāmār　鍛冶屋　ベンゴール。

カーラール族　Khārāl　製鹽手　ラジプタナ。

カールヴィー族 Kharvi　製鹽手　西印度。

ガールダー族 Gārudā　下級司祭者　西印度。

カーヤスト族 Kāyasth, Kaith, Lāla

上部印度及びベンゴールにみられる書記や村會計士（パトワーリ）のカーストで、人口二百數十萬に達する。このカーストは現在こそヒンヅー聖典にクシャトリヤ族と稱し社會的に高い地位を占めるが、斯うなつたのは極く近來で、以前はベンゴールやビハールのカーヤストは一般にスードラ族とされ、村僕の一種たる村會計士にすぎなかつた。

カーヤスト族は、印度に回敎徒或は英國の如き外國統治が行はれるやうになつて初めて擡頭した。元來智能的職業に從事する彼等は、回敎勢力の印度侵入後侵入者の言語たるペルシャ語を識つた最初の者であつた。また、回敎帝國の治下に書記或は收稅官の地位を得た最初の者である。英國の統治下に入つてからも、逸早く英語を學び、英人の下に書記等として多數雇はれ、官廳勤務を獨占した。

社會的地位・生業　現在では、ブラーマン族、ラージプゥト族、バニアー族に次ぐ高い地位を占めてをり、ベンゴールではラージプゥト、バニアー兩族と同格である。書記程度に止まらず、印度最高の行政竝に司法機關において有能振りを發揮し、諸地方公共機關の要位はこのカーヤスト族によつて占められてゐる。

社會組織　上部印度では十數個の地域的根據にもとづく副カーストに分れる。スリヴースタブ Srivāstab サクセナ Baksena バトナーガル Bhatnāgar アンバスタ Ambastha アシュターナ Ashthāna バールミーク Balmik マートゥル Māthur カラン Karan ガウル Gaur ニグム Nigum 其他である。

有識のカーヤストは族外婚の標準的法則に從つてゐる。卽ち母方の五等親內の者及び父方の七等親內の者との結婚を禁じてゐる。また母方の祖父母を共通にもつ者同士は一緒にはなれない。地方によつては族外婚の分族の形跡あるところも認められる。こゝでは同一分族內及び母方竝に祖母方の分族とは結婚出來ない。二人の姉妹と結婚出來る處もあるが、これは上部印度では禁ぜられてゐる。

婚制　カーヤスト族の間では成人婚或は幼兒婚が行はれる。往時は男が少かつたので、女は未婚の儘二十歲にも達したので、女は自分より年少の男と結婚することが許されてゐた。上部印度では花婿料を支拂ふ慣習がある。結婚式は、マヌ法典の認める最高のブラーマ形式によつて行はれるといはれてゐる。

花婿が花嫁の家につくと、シャーベット★を飮ませられる。次いで杵の上に立たせられる。嫁の母は四方位に小麥粉を丸めたのを投げてから、婿に小型の犁、攪拌器、矢等を示し彼の鼻を押す。婿は押されるのを防がうとし、こゝに極めて朗かな歡笑の場面が展ける。またこれが濟んでから、婿嫁兩家のものは、婿が立つてゐた足臺をとらうと相互にひしめき合ふ。次いで、小麥粉をかためてつくつた牝牛像が持つてこられるが、婿は小さい黃金の棒をその鼻孔に通す。式後、婿の父親は、巴旦杏、棗椰欄、乾葡萄等の果實を嫁の膝の上に一杯のせ、四度これを繰り返してから椰子の實と一ルピーの貨幣を與へる。これは多產を招來する儀式で、椰子の實は子供を示すといはれる。結婚式には、種々の歌がうたはれる。

カーヤストは多妻婚を許してゐるが、これは子孫を絕やさぬためである。寡婦の再婚や離婚は許されない。

宗教　カーヤストは通常のヒンヅーの神々を崇拝する。彼等は自分達の神的祖先をチトラグプタ Chitragupta と言ひ、結婚式、ホリ祭、ディヴーリ祭等にこれを崇拝する。一年に二度職業道具のペンとインクを尊崇する。ホシャンガーバードでは農耕者達は村會計士のインキ壺を崇拝し、小額の禮金を出す慣習がある。會計士の仕事を粗末にすると、自分達の權利に關する記述に重大な過誤が起ると考へるからである。

一般に火葬に付する。ヒンヅーの儀式に則り、一周忌に定めの供物を捧げる。

註　★シャーベット Sherbet 土耳古の一種の清涼飲料。

ガーンガウター族 Gāngautā　農耕者　ビハール。

ガーンダー族 Gāndā　織工　中央印度東部。

カーンチャール族 Kāncḥār　ガラス工　上部及び中央印度。

ガーンディー族 Gāndhī　食物屋　デッカン地方其他。

カーンドゥー族 Kāndū　菓子屋　南印を除く一般。

カイカーディー族 Kaikādi　莚作り　デッカン地方。

カイッカーラン族 Kaikkālan　織工　タミール地方。

カイバルッタ族、ケーワト族 Kaibartta, Kēwat　カイバルッタ族は、ベンゴールのみにみられる。漁撈者、農耕者の大カーストで、人口三百萬に垂んとし、ベンゴールのデルタ地方の最も特色あるカーストに屬する。以前この地方の指導的地位を占めてゐたといはれ、ベンゴール最古の住民の一つである。ケーワト族は、上部印度の漁撈者カーストであるが、カイバルッタ族とは元同一族に屬したといはれる。この兩者は、傳承が示すやうに極めて密接な關係にある。兩カースト共ドラヴィアン系であるが、幾分アーリアンの血を混ふともいはれてゐる。

このカーストは、諸地方に多數の族内婚の副カーストがあり、それらは更に多くの族外婚の氏族に分れてゐる。カイバルッタの副カーストは生業や慣習にもとづき形成されてゐる。氏族は動植物の名を有し、自族の名をかりてゐる動物を捕へたり肉を食べたりしない。

同一氏族の者及び實の從兄妹との結婚は禁ぜられてゐる。正統派ヒンヅー風に、娘は十歳以前に結婚させるが、成人する迄同棲はさせない。男の結婚は、適當な娘に花嫁料を支拂へないため遲れ勝である。花嫁料は、上級になればなる程高い。娘に適當の夫の見當らぬ場合、ケーワト族の兩親は娘を花と結婚させることがある。結婚式は、聖標の周りを廻る通常の仕方に從ふが、それが濟むと花婿は花嫁の額に七度朱でしるしをつけ、櫛で髪

を分け、彼女の頭に着物をかける。これは嫁は結婚した女となつたといふ意味である（未婚の女は蔽ひをかけない）。ベンゴールのカイバルッタは、婿と嫁の指から一滴宛の血液をとり米と混ぜ、お互の血の混つた飯を食べるといふ。寡婦の再婚及び離婚は許すのと許さないのと地方により色々である。カイバルッタは姦通等の場合離婚を許してをり、離婚された女は再婚出來ない。多妻婚もヒンヅーの許す範圍内で行はれてゐる。

カイバルッタ族は、大部分ヴィシヌ派に屬してゐる。一般に特殊女神としてチャウラーシ・デヴィ Chaurāsi Devi を崇拜する。この神は船の守護神で、雨期の初め洪水の時に供物をさゝげ宥和する。その神像は船に描かれてゐる。カイバルッタはまた疱瘡神その他の小神を崇拜し山羊等を供犧し、ブラ・ブリ Bura-Buri を村神として拜む。

死體は土葬にする。足を南に向け、一緒に衣服、胡麻、鹽等を死者の衣食品のやうにして入れてやる。祖先には鷄を供へ、月曜或は土曜日に拜む。

彼等は食事には餘りかまはず、鷄、豚の肉をも食べる。主として漁撈、農耕に從事する。グラム（蠶豆の一種）や米を炒るものもある。苦力等として働くものも少くない。このカーストの生活は一般に貧しい。

ガウダ族 Gauda　農耕者　カルナティク地方。

ガウラ族 Gaura　牛飼ひ　ベンゴール。

ガウンディー族 Gaundi　石工　デッカン地方。

ガウンドラ族 Gaundla　棕櫚酒採り　テリンガーナ地方。

カサーブ族 Qasāb　屠牛者　上部印度。

ガダリヤー族 Gadariyā, Gādri

上部印度の羊飼ひの職業的カーストで、人口は百數十萬に達する。ガダリヤーの名稱は、ヒンディ語ガーダル gadar 梵語ガンダーラ gandhāra（羊）から出たといはれる。

ニカール Nikhar デンガル Dhengar バルマイヤン Barmaiyan 其他の副カーストから成り、副カーストは多數の動植物の名を有する族外婚の氏族に分れる。ニカール・ガダリアーは最上級に位し、デンガル・ガダリアーはマラータ地方の羊飼ひのカーストで、この兩者は通婚する。カースト長老會議の頭首はマートン Malton といひ、世襲である。

一般に氏族內及び實の從兄妹の結婚は禁ぜられる。結婚式の主要部分は、花婿・花嫁が聖標の周りを廻ることである。寡婦の再婚及び離婚は許されてゐる。寡婦は亡夫の弟（未既婚に關係なく）と一緒になるのが最も妥當とされてゐる。また性的犯罪はカーストの人達に饗宴するだけで償はれる。

ガダリヤーは通常のヒンヅーの神々を崇拝する。彼等はまた羊檻の女神ディシャイ・デヴィ Dishai Devi を崇拝し、短靴をはいては檻の中に入らない。

死體は火葬に付し、骨灰はガンジス河或はネルバダ河へ捨て、これが出來なければ最寄りの小川へ捨てる。富裕の家では諸種の儀式にブラーマンを雇ひ、貧しい者は雇はずに濟ましてゐる。一般に鷄、豚を除く肉を食ひ酒を飲む。ブラーマンはガダリヤーから水をもらはない。しかし、彼等は奴隷的勞働者カーストの上に位する。ガダリヤーの性質として、愚鈍、怠惰、お人よし等が數へられてゐる。

ガダリヤーは、羊、山羊の飼養及び粗毛布を織ることを主なる生業とする。羊毛はヒンヅー教徒にとつては神聖なものである。ブラーマンは羊毛の衣服を着けて聖職を施行する。結婚式の花婿は羊毛の紐を護符と共に身につけてゐる。ガダリヤーは、羊毛の生産と加工に關與するカーストであるから、ヒンヅー社會におけるその重要性は想察出來るであらう。

ガッカル族 Gakkhar　農耕者・地主　パンジャブ。

ガッディー族 Gaddi　羊飼ひ　パンジャブ山地。

カッベーラ族 Kabbera, Ambiga　漁撈者　テリンガーナ及びカナラ地方。

カディーオー族 Kadiō　石工　西印度。

カトリー族 Khatri　(一)商人　パンジャブ。(二)書記　ガンジス河谷。(三)絹織工　西印度。

カナイト族 Kanait　農耕者　パンジャブ山地。

ガナク族 Ganak　星占師　アッサム。

カナッカン族 Kanakkan　書記　タミール地方。

カニサン族 Kanisan　占星師　マラバール地方。

カハール族、ディーマル族 Kahar, Dhimar

上部及び中央印度の轎夫及び船頭のカーストである。カハール族は二百萬餘、ディーマル族は三十數萬を算するが、兩族間の區別は、嚴密には出來ず、北印度では一般にカハールといひ、中央印度方面ではディーマルといふ。ヒンヅーの系譜師は、カハールをブラーマンの父とチャンダールの母との間から生れたとなしてゐる。

このカーストは、多數の地方的乃至職業的性質の副カーストに分れ、また多くの族外婚の氏族に分れてゐる。

氏族はトーテミズム的或は守護神的性質の名を有する。同一氏族内及び實の從兄妹の結婚は禁ぜられてゐる。二・家族間の娘の交換は許される。寡婦の再婚は自由に許されてゐる。マンドラでは、寡婦の結婚式の後、豚を殺して婿の家の戸口の前に埋土をかけ、二人はそれを踏みこえて屋内に入る。また式は日曜日以外の日の夜行はれる。離婚は許されるが、殆どない。妻の姦通は大抵大目にみられ、彼女を離婚する等といふことは、餘程の公にされた醜事でなければ行はない。斯ういふ場合、夫妻はカースト長老會議に呼ばれ、離婚の印として藁を切り、夫妻相互に聞える程度で互の名を呼びあひ、カーストの頭首に一ルピー乃至四ルピーを支拂ひ、初めて效力を發生する。

出生兒は誕生日か生後十二日目に命名する。一人の女が嬰兒を籃に入れ、その身體に蒸した小麥と山黎豆をふりかけ、彼方此方に移動させてから命名する。そしてその小麥や山黎豆をその場に居合せた人々に分け與へる。

死體は通常土葬する。未だ耳に孔をあけない子供の場合は一日きり服喪し、その他は十日間服喪する。火葬された場合は、三日目に溜池か川に骨灰を流す。三日目が日曜か水曜ならば、五日目にさうする。

ディーマルの主神は、ドゥーラ・デオ Dulha Deo である。彼等はカダム樹（班芝樹）で神像をつくり、赤鉛を塗たくる。ベラールでは、マドラスの穀物の女神アンナ・プールナ Anna Pūrna に祈りをさゝげる。カハールが漁撈その他の目的を以て溜池或は川に入る際には、水死その他の災害から守護してくれるやう水神に祈る。彼等は一般に川を、ガンガ・マイ Ganga Mai（母なるガンジス河）と呼んで詔ひその精靈を和げる。渡し船に雇はれてゐるカハールは渡船と渡河の神ガトイア・デオ Ghatoia Deo を尊崇する。この他鄉土の小神として、死んだ祖先の集合神バレ・プラク Bare Purakh 村の司祭者の靈魂パリハール Parihār バンヤン樹の靈バラム・デオ Baram Deo 其他を尊崇する。

彼等の生業は多種多樣である。當初は漁撈と船乘であつたが、その後ヒンヅー敎徒のために水運びとなり、更に轎夫、下僕、料理人、米穀小賣者として働き、更に養豚その他に從事し現在に至つてゐる。元來彼等は、非アーリアン部族に屬するが、轎夫、ヒンヅーの料理人、家僕等の職業柄その地位を高め、北印度ではブラーマンは彼等から水及び牛酪で調理した食物を受けるといはれてゐる。

カムサーラ族 Kamsāla　細工師　テリンガーナ地方。

カムマ族 Kamma　農耕者　マドラス。

カムマーラン族 Kammālan　細工師　タミール地方。

カラール族 Kalāl, Kalvār　火酒蒸溜者　上部及び中央印度。

カラーヴント族 Kalāvant　踊女　西印度。

カラン族 Karan　書記　オリッサ。

カリタ族 Kalita 農耕者 アッサム。

カリンギー族 Kalingi 農耕者 テリンガーナ地方。

カル族 Kalu 油しぼり ベンゴール。

カルナム族 Karnam 書記 テリンガーナ地方。

カワース族 Khavās 下僕 西印度。

カンガール族 Khangār 見張り番 中央印度。

カンジャル族 Kanjar 莚作り 上部印度。

カンダイト族 Khandāit 農耕者・地主 オリッサ。

ガンダバニク族 Gandhabanik 食物屋 ベンゴール。

カンドラー族 Kandrā 見張り番 オリッサ。

カンナディヤン族 Kannadiyan 牛飼ひ タミール地方。

カンボー族 Kambō 農耕者 パンジャブ。

ギサーディー族 Ghisādī 小刀研工 デッカン地方。

キサーン族 Kisān 農耕者 アグラ及中央印度。

キラール族 Kirār 農耕者 中央州。

ギラト族 Ghirath 農耕者 パンジャブ山地。

グージャル族 Gūjar

グジャラート地區に名を與へた地主の大カーストである。人口二百數十萬を算しパンジャブ及びアグラを中心に見られる。グージャル族の由來については、諸說がある。カニンガム將軍 General Cunningham はインド・スキシアンの一部族と同視し、一方キャムプベル Sir G. Campbell は中アジアのカザル族 Khazar と同視する。グージャル・カーストは混血種である。それは往時、浮浪的掠奪的部族として諸地方において種々の種族的要素と接觸同化したらしく思はれる。クルック Crooke も『グージャル族は、騷擾と牛泥棒のために常に注目されてゐた』と述べてゐる。

社會組織　グージャル族は北印度では羊飼ひのカーストを形成する。カーングラでは水牛の飼養に當つてゐるが、グージャルは概して牛が非常に好きである。中央州のグージャルは農耕者として立派であり、市民としても法を辨へた尊敬すべき人達である。諸地方において夫々若干の副カーストを有するが、また族外婚の集團の組織をもつてゐる。

婚制　グージャルは同一氏族內及び母方・祖母方の氏族のものと結婚出來ぬことになつてゐる。結婚式には、結婚小舍の下に四本の犂の柄を四角形に組み合せ、その眞中に水の一杯入つた銅壺を置く。式の主要部分は、花婿花嫁が手を重ねて壺の周りを先づ婿が四度次いで嫁が三度合計七度廻ることである。

寡婦の再婚が許されてゐる。以前は概して娘はこのカーストに少いため、寡婦への需要も少くなく、彼女の父や保護者には花嫁料として多額の金が支拂はれた。三千ルピー支拂はれた記錄もある。寡婦の結婚はナートラ或はパート Natra, Pāt といはれる。彼女は亡夫の親族とは結婚出來ない。寡婦婚には一ルピー乃至四ルピーの手數料を村の管理者に納めて同意を得ることになつてゐる。

女が少かつた當時は、長兄の妻は時折未婚の弟達にも妻としての役目を果したといふ。このカーストに女の少いのは女嬰兒殺しに起因するといはれるが、現在では嬰兒殺しは行はれなくなつた。

葬制　グージャルは未婚者の死體や傳染病のため死んだもの、死體は土葬に付し、他は一般に火葬にする。大家の年長者の葬儀は、見榮を張る絕好の機會となつてゐる。カーストのブラーマンはありとあらゆるクージャルを招いて歩き大饗宴が開かれる。その數三千乃至四千人に達したこともあるといふ。

宗教　グージャルの家の女神はクル・デヴィ Kul Devi である。家の中に祭壇を作り、家族の成員のみがこれを崇拜する。椰子の實、米、薑黃、花等を供へるが、動物供犧は行はない。未婚の息子が死んだ時は、ムジア Mujia といふ像を銀、銅或は眞鍮で作り、一月の間月曜と金曜の日に拜む。この日にはカーストの人達に饗應しなければならない。

カーストの各成員は、夫々グル guru 卽ち精神的教導者をもつてゐる。グルは何れかの宗教的行者に屬し、二年或は三年毎に訪れて來て、椰子の實や衣服の贈與を受けることになつてゐる。グルをもたない人はヌルガ Nurga として輕蔑される。朝ヌルガに會ふのは不吉とされる。ホシャンガーバードのムンドウレ・グージャル Mundle G. は特に宗教的傾向著しく、新月の日や各月の八日はクリシュナ神 Krishna の誕生日といふので耕作しない。ニーマルでは多數のグージャルはピールザーダ派 Pirzada（ヒンヅー教改良派）に屬する。

生業　グージャルは北印度風の衣服をつける。女はスカートを着けるが、サーリ sari をつけない。男女共文身せず、男は時折長髮で弊下髯、顎髯をつけてゐる。

彼等は農耕者としてすぐれ、特に灌漑農耕法が得意である。「般に繁榮し地主階層を形づくつてゐる。グージ

ャルはカースト内の協同心は強く經濟的に助けあつてゐるが、カースト外部に對しては冷淡であるといはれる。

註　★女嬰兒殺し（Female Infanticide）これは族外婚制及びハイパーガミーの慣習の結果、部族やカーストの間に行はれたのであつて、單に集團内の食糧不足のみの結果ではない。即ち族外婚の集團においては、男は自族内の女と結婚するのを禁じられてをり、彼女等は自族の妻として不要である許りでなく、女が多くなればなる程他族のためねらはれる危險がある。またハイパーガミイの結果として娘の結婚難と共に、花婿料其他娘の結婚に要する負擔が極めて甚大となつて行く。女嬰兒殺しの慣習は斯くして起つた。

クーダー族　Kūṭā　米搗き　上部印度。

クームラー族　Khūmrā　碾石工　上部印度。

クーンジラ族　Kūnjrā　野菜賣り　上部印度。

クサヴン族　Kusavan　壺作り　タミール地方。

クムハール族　Kumhār, Kumbhār

南印を除き印度の各地方にみられる壺作りのカーストである。クムハールの名稱は梵語クンブ kumbh（水壺）から出たといはれる。土器は歴史上非常に古くから用ひられてゐるので、このカーストも古くからあつたものと思はれる。ヒンヅー聖典も、このカーストの由來については、例のブラーマン以下の四大カースト間の混婚から出たことを述べてゐるが、その組み合せは聖典により異つてゐる。

クムハール族は、多數の副カーストに分れる。それは大部分マールウィ Mālwi テレンガ Telenga マラータ Marātha 其他の地域的型のものであるが、リンガーヤト Lingāyat バルディヤ Bardia 等の宗派的其他の根據にもとづくものもある。と同時に、夫々の働きの方法や特徴の上から族内婚の集團が出來てゐる。例へばハートガルヒア Hāthgarhia は轆轤を用ひず手で土器の形をつくる集團、ゴリア Goria は赤色或は白色の壺のみを作つて黒色のを作らぬもの、チャケレ Chākere は、轆轤を用ひるクムハール等である。

クムハールは、娘を幼兒婚させ、配偶は通常カーストの饗宴でとゝのへられる。チャーンダでは娘が成人しても嫁にやらずにゐる親は、カーストから除かれる。結婚式はブラーマンが掌り、通常の形式のものである。ベトゥルでは、花嫁の父方の叔母の夫がブラーマンの代理をする。式は花嫁花婿の二人が小麥粉を捏ねたのを手にもち、傳統的職業の標徴と見なして、これを互にひつたくらうとする。クムハールの間では離婚と寡婦の再婚を認めてゐる。未婚娘がカーストの成員と不義の仲になつたのが見つかるならば、娘はカーストの人達に饗應をなし、また一ルピー乃至四ルピーを納めると共に頭髪五總を斬りとつて不淨を拂拭しなければならない。

死體は火葬に付する。但し、リンガーヤト・クムハールは土葬の慣習をもつてゐる。

クムハールは、一般にヒンヅーの神々を崇拜し、デオターン・イガーラスの祭儀 Deothān Igāras には、仕事の道具に供物を上げる。村のブラーマンが司祭者の役をつとめる。バーラーガートでは、死猫が屋内にゐるのを

見付けられると、カーストから締め出される。

クムハール族は、村僕として不淨カーストと伍するけれども、その社會的地位はそれ程低くない。ローハール より低いが、チャマールと同程度である。實際の社會的地位は、地方により高低があり、ベンゴールでは比較的高いといはれる。

クムハールは壺作りを主たる生業とするが、中にはディーマル族のやうに養豚を生活手段とするものもある。豚を供犧用として賣るのである。豚を供犧するのはゴーンド族であるが、またヒンヅー教徒も、バインサーサル神 Bhainsāsar に收穫祈願のため供犧する。クムハールはヒンヅー教徒から料金を貰ひ飼豚を連れて社祠へ行き供犧をなし、その死體を家に持ち歸つて食べる。從つてその商賣は非常に儲けがあるといふ。

グラオー族 Gurāō　寺男　デッカン地方。

クリッチャン族 Kuricchan　捕鳥者　マラバール地方。

クルミー族 Kurmi

聯合州、ビハール、中央州、中央印度等に亙るヒンドゥスタンの代表的農耕者カーストで、その人口は四百萬以上に及んでゐる。このカーストはクンビー族のやうに職業的カーストであるため、種族的構成は一貫しない。ビハールではアーリアン的要素の痕跡を示す立派な顏立のものが認められるが、チョタ・ナグプールのクルミーは短身、暗色のずんぐりした體質であり、中央州はまたこれらと異る特徴を示してゐる。

社會組織　ウスレーテ・クルミー Usreto K.　チャンドナーヘ・クルミー Chandnāhe K.　ジングロール Singrore　デシャ・クルミー Desha K. 其他の多數の副カーストに分れ、各副カーストはまた多くの族外婚の區劃（氏族）をもつてゐる。氏族は梵（ブラーマ）の聖者の名、ラージプウト氏族の名を首めとし、鑛・動・植物その他あらゆる種類のものゝ名を有する。

婚制　同一氏族內及び母方の實の從兄妹や又從兄妹との結婚は禁ぜられてゐる。チャンドナーヘ・クルミーは交叉從兄妹婚を許してゐる。大抵のクルミーは、妻の生時中、彼女の妹と結婚するのを禁じてゐる。チャッティスガルでは二家族間の娘の交換がみられる。ヒンヅー教內部の宗派的差異が全部結婚への妨げとなることはないけれども、肉と酒とを特別に禁ずるヴィシヌ派と禁じない集團との配偶は合はぬといはれてゐる。娘は九歳と十一歳の間に結婚する。富裕な家庭では生後二三ケ月で結婚させることもある。男は九歳から十五歳迄である。幼時の結婚式は延ばすことも出來る。クルミーは結婚小金をサーレ樹 (Boswellia Serrata) で造り、マンゴー或はジャームン（蒲桃）の葉で蔽ふ。これらは常綠木の葉で、永生を意味するからである。小舍の中央にマグロハン Magrohan といふ結婚壇をしつらへる。結婚前の式に結婚菓（メヘル Mehet）の家族的聖餐がある。これは犧牲食の代りと考へられるもので菓子を家の神クル・デオ Kul Deo に供へて禮拜後、先づ花婿花嫁がこれに與かり後家族の者、親族が戴く。結婚式の主要部分は太陽のある方向に置かれてゐる結婚壇の周りを二人が七度廻ることである。この壇はおそらく太陽を意味し、周りを步くのは、太陽の周圍を運行する遊星の運動を模するものと考へられる。クルミーの結婚費用は莫大な額に達する。

カーストの男に孕まされた娘は、その男と寡婦の結婚式により結婚せねばならない。外部の男との關係の場合は、娘はカーストから出される。またクルミーの間では、一般に女は畑仕事では高く評價されてゐるので、妻の過失や罪惡も寛大な眼でみられてゐる。妻は良く働き、雇つてゐる下僕等よりは有利な投資であるから、資力を有する男にとつて、三・四人の妻をもつことは日常事となつてゐる。他方、一人の妻を忠實に守り精進日に精進する男は、ブラーマチャリ（聖者）といはれ、天國へ上ると考へられてゐる。寡婦の再婚は許される。

特殊慣習　クルミーの女は月經時中の四・五日間は、小屋の中に眠つてはならない。姙娠した女は、呪術に動かされ易く、ある點では他人にとつて危險とみられるので種々の禁忌（タブー）の下にあり、またやかましい色々の儀式を行ふこととになつてゐる。唯、食物については氣儘を許し、時折土を食ひたいといふ際には麥打で床にこぼれた小麥と混つた土や料理に用ひた牛糞菓の灰をたべさせる。これは惡阻（つはり）を輕くする藥とされてゐる。子供達も土を食べる慣習がある。

葬制　クルミーは通常死體の頭の方を北に向けて茶毘に付するが、子供やコレラ等で死んだ者は土葬にする。縊死其他不慮の死に方をした者は儀式ぬきで火葬する。墓穴は普通北から南の方に掘る。埋葬後三日目に犧牲菓（ピンダス）を供へ、十日目まで續ける。そしてこの菓子は誰もたべずに川に捨てる。クルミーはまた死者の精靈は再び歸つて來るものと考へ、これに應ずる特殊の儀式を行ふ。

宗教　彼等は主要なるヒンヅーの神々を崇拜する。至上神はバグワーン Bhagwān（ヴィシヌ神又は太陽）でなければパルメシュワル Parmeshwar（シヴ神又はマハーデオ）である。村には寺院があるけれども、クルミーは太陽があればよいといふのでそれを必要としないといふ。彼等は日曜日を聖日としてゐる。起床、洗顏及び沐浴の濟む度毎に、太陽の方へ少量の水を投げて頭を下げる。またケルマータ神 Khermāta は地女神デヴィ Devi の變形であるが、村の母として崇拜される。大地は一般に種々の仕方で拜まれる。更にハヌマーン神 Hanumān 或はマハービール神 Mahābīr として猿の像を禮拜する。どこの村にもドゥーラ・デオ Dūlha Deo の社祠があり住民の崇拜を得てゐる。

彼等は農耕者カーストだけに、種蒔並に收穫に關する盛んな農耕儀禮を行ふ。他方彼等は農耕について種々の迷信をもつてゐる。

社會的地位　クルミーは諸種の儀式にブラーマンを雇つてゐる。彼等の地位は村僕、職人及び不淨な紡織勞働者の上に位し、ブラーマン、ラージプウト族等は彼等から水をもらつてゐる。北方地區では稷、コドン（Eleusine coracana）等が主食で、米は祭の時だけ食べるが、チャッティスガルでは米を主食としてゐる。

生業・性質　クルミーの女は結婚後頬に點、指に蠅の形、腕に纍、また脚にも種々の模樣を文身する。彼等は典型的農耕者で勤勞と土地によつて、深く自由心と獨立心を植ゑつけられてゐる。勤勉、刻苦精勵、しかも苦勞のため害はれてゐない。女も男に負けずよく働く。チャンドナーヘ・クルミーの女は、男より進取の氣象に富んでゐるといふ。

クンビー族 Kunbi, Kanbi

クンビー族はデッカン地方及西部印度の農耕者カーストである。その全人口は四百萬以上に達する。中央州及びベラールでは百數十萬を算し、聯合州ではゴーンド族に次ぎ多數を占める。デッカンではクンビー、南コンカ

ンではクルワーディ Kulwādi グジャラートではカンビー Kanbi ベルガウムではクルビーといはれる。

社會組織　クンビー族はティロル Tirole パルデシ Pardesi シングロル Singrore 其他の副カーストに分れる。中央州では種々の部族や階級から新入者を入れて職業的混合體を形成してゐる。各副カーストは、多數の族外婚の氏族に分れ結婚を規制する。氏族の名稱は動物・自然物の名、氏族の著名な開祖や他カーストの名をとつてゐる。

婚制　クンビーの間では同一氏族内及び母方及び祖母方の氏族の者との結婚は禁じてゐる。妻の妹と結婚出來るが、その姉とは出來ない。交叉從兄妹婚も許されるが、これを除いた實の從兄妹婚、第二從兄妹婚は禁じてゐる。即ち近親婚中交叉從兄妹婚のみを許し、むしろこれを最も適當としてゐる。これは兄弟の財産はその姉妹の息子へ來るものとする母系相續制の殘存であると見られる。

クンビーは、出來るだけ若く娘を結婚させるのを社會的地位の高い證據と考へ、娘は五歳から十一歳迄、男は十歳から二十歳迄の間に結婚させる。花嫁料は二十ルピーであるが、勿論もつと高い場合もある。婚約は花婿花嫁雙方の父親が、相互に家を訪問しあひ饗宴及び贈物をしあふことによつて成立する。結婚の日取はブラーマンが決める。式の前に、婿嫁の身體は植物油と薑黄で摩擦される。これは、一つは二人の美しさを發揮させ、一つは儀式の間中惡い靈鬼から守護するためである。結婚小舍は葉綵(づな)で飾つた十一本の柱でつくられ、中にはサーレ樹 (Boswellia serrata) でなければウマル樹 (Ficus glomerata) の二本の木標をおくが、中一本は他よりも長い。これらは婿と嫁を表すものである。木標の近くに水の一杯入つた二つの壺を置き、またバオラ Baola といふ小さい土壇がつくられる。婿は黄或は白色の衣服をつけ、額にはバーシング Bāsing といふ金銀箔のついた竹を三角形に組み立てたものをつけてゐるが、これはマウル Maur 即ち結婚冠の代りである。また肩には農夫の代表的道具として鶴嘴をかつぎそれに二三の小麥菓を結へてゐる。これは後に、結婚小舍の頂上に置き、五月間の式の終りに家族の人々だけがそれに牛乳をつけて食べるのであつて、これには外部の人達は與かることは出來ない。

結婚の行列は、婿に大抵彼の家の女達が隨いて、嫁の村へと向ふ。ティロル・クンビーだけは、自カーストの高い社會的地位を示すために隨いて行くのを禁ずる。行列は嫁の村の境界で、嫁の父親やその友人、親族等に出迎へられ用意された假宿へ導かれる。花婿だけはマーロティ神即ちハヌマーン神 Māroti or Hanumān の社祠の前で一人とり殘される。婿の父親は結婚小舍へ行き、そこで嫁の足を洗つてやり持參の新衣を贈る。そこで嫁の親族のものは、マーロティ神の社祠へ赴き婿をつれて來る。彼が結婚小舍に達した時、先づ棒で觸れてみる。小舍の上には嫁の兄弟が座つて水を下方に注いで寄越すので、婿は彼に若干の錢を贈る。そこで嫁の父親は婿の足を洗ひ、黄色の新衣に着換へさせる。かくして花婿と花嫁は、幕をへだてて相並んで置かれた二つの床板に婿は東に向き嫁は西に向いて立たされる。二人の手には蕃紅花(サフラン)で蔽つた米を持つてゐる。日沒になるとブラーマンは小舍の屋根にたち、そこから結婚經を繰り返す。ブラーマンの合圖で婿嫁は相互に米を投げ合ふ。幕は引かれて、二人は席を交換する。そこで、ブラーマンは二人の額を米と薑黄を以て印をつけ押し合せる。次いで二人をバオラ（土壇）の上に坐らせ二人の衣服を結ぶ。會衆は拍手喝采し、式はこゝに完了する。

式は通常行列のついた日に行はれ、續く二日間は、饗宴と神々の禮拜に當てられる。式の費用は非常に多額で花嫁の家では六十乃至百ルピー、花婿の家では百六十乃至六百ルピーを要するといふ。

クンビーは、多妻婚は許されてゐるが餘り認められない。最初の妻に子供が無かつたり、女としての魅力乏しく性質も良くない場合、第二妻と結婚する。離婚も許される。娘が結婚前に口説かれた場合、雙方の家に罰金が科せられる。寡婦の再婚も一般に許してゐる。夫が死ぬと寡婦は實家に歸り、彼女の父が再婚をとゝのへるのである。その際亡夫の家族外の者と結婚出來るが、亡夫の弟達とは結婚出來ぬことになつてゐる。

特殊觀念　月經時の不淨期間中女は隔離され、料理は出來ないし、木綿絲でつくられた床に眠ることも出來ない。クンビーは出產後六日經つと、夜中にチャテイ・デヴィ Chhathi Devi（六日目の女神）が現れて嬰兒の額に一生の運命を書いていくと信じてゐる。そしてそれは頭蓋骨に書いてあるといふ。また女が子供を生まぬ際、眞夜中誰かの家へ唯一人出かけて放火すればよいといはれてゐる。燒かれた處の精靈が女の子宮に入つて子供に生れ代ると考へてゐるのである。

葬制　クンビーは死體を土葬或は火葬に付する。ベラールのクンビーは回教の死體處理法を眞似、村から少し離れた處に墓地を有する。クンビーは一般に死體を溫湯で洗ひ、竹材で造られた棺臺の上に置く。通常繩を用ひない。遺族は途中それに巴旦杏・棗椶櫚・茹醬（キンマ）の葉、小貨幣をふりまき乍ら墓場へ運ばせる。その間僕婢のマハールはこぼれたのを拾つて歩く。遂中死體を下し、擔夫は位置を換へるが、序でに死體を蔽ふ布衣に結へてゐた少量の小麥と豆類を殘していく。墓穴は三四呎位深く掘り、裸身の儘、頭を南に向け、仰むけに埋葬する。服喪は成人の場合十日、子供の場合三日である。男の遺族は剃髮し、喪主は社交や日常の仕事や享樂を避ける。また家の壁を白く洗ひ、床上に牛糞をひろげる。

宗教　クンビーの主神は、マーロティ卽ちハヌマーン Māroti or Hanumān マハーデオ卽ちシヴ Mahādeo or Siva デヴィ Devi サトワイ Satwai カンドバ Khandoba 等である。またマライ・デヴィ Marhai Devi へ山羊、鷄を供犧するが、時折木製の人形を女神の社祠の前に埋める。これはおそらく人身供犧の痕跡と思はれる。クンビーは、蛇に咬まれて死んだ人があつた場合、蛇の銀像を作り、それから眞物の蛇を捕へ殺してから村端れに高壇をつくり、その上に像を安置する。その後はこれをナーゴバ・デオ Nāgoba Deo として崇拜する。彼等は蛇が殺されるとその精靈は銀像に入ると信じてゐるのである。同樣虎に殺された人があると、その人を神化しバーゴバ・デオ Bāghoba Deo として崇拜する。

クンビーはまた、祖先の像を銀又は眞鍮で作り、それを他の家神と一緒に籃に入れておく。それが餘りに多くなると、どこか聖河のある處に巡禮して、河中に置いて歸る。

主なる祭儀としてはボラ祭 Pola がある。雨季の中頃に行はれるが、耕耘牛の行列の中に木製の牛像の列を加へ村の通りを練りあるく盛大な農耕儀禮である。尙近來クンビーの間には回教の進出著しいものがある。

生業・性質　クンビーは小川の近くの幾分高い處に住家を造つてゐる。時折、家の傍に羅望子或はピーパル樹を植ゑ美しい眺めである。屋根は防火のため瓦で葺いてゐるが、その赤い屋根が遠くから目立つ。彼等は傳統的に農耕者であるが、これまで他カーストから大集團を參加させその社會的地位を高め、現在では村僕や職人の上に位する。寧ろ、下僕や職人達はクンビーには被屬傭の關係にあり、その結婚等もクンビーの承認をうることになつてゐる。

彼等の性質は頑固無神經、大膽且つ保守的で、農耕者に典型的な鈍重さと辛抱强さをもつてゐる。他面自分の面子を重しとする觀念つよく、そのために社會交際或は儀式等のことを顧みないこともある。一般に、それ程活動

的性格といへないけれども、自己の利害については極めて敏感である。

ゴーアーラー族 Gōālā, Golla 牛飼ひ　上部印度。

コーイーリー族 Kōirī, Murāo

コーイーリー族はビハール及びチョタ・ナグプールの農耕者カーストである。人口は二百萬を超える。ネスフィールド C. C. Nesfield はこのカーストとカーチ族とを同一視し、ワイズ博士 Dr. Wise はコーイーリー族とクルミー族とは同一族から出て、密接な關係があると見てゐるが、リズレーはこのカーストは極めて早くから獨立カーストとなつてをり、且つ餘りにヒンヅー化してゐるので、このカーストの構成要素についていふのは危險であるとしてゐる。

社會組織　コーイーリー族には、バルキ・ダーンギ Barki-Dāngi　ティルフティアー Tirhutia　バナパール Banapār　パウリアー Pauria　バラーカル Barākar 其他夫々異つた地方において十數個の副カーストがある。この副カーストは更に族外婚の氏族に分れてゐるが、ビハールでは氏族は地域的或は守護神の名を有し、チョタ・ナグプールの氏族にはトーテミズムの殘滓が認められる。例へば、カーシアプ・コーイーリー Kāsyap Koiris は龜を非常に尊崇し、これを捕まへるとその甲を油と朱とで塗り、これを水に放してやるといふ。

婚制　同一氏族内から妻をめとることは出來ない。バガルプルでは九氏族を通婚圈外におくのもあつた。通常娘は七歳から十歳までの間に結婚させる。富裕の家庭では三・四歳の頃式を擧げる。しかし娘が年頃になるまで結婚させない處もある。多妻婚は許され、夫のもち得る妻の數について制限はないけれども、經濟上の關係もあり二人以上の妻をもつものは稀である。バルキ・ダーンギ副カーストを除き、一般に寡婦の再婚を認め、第二夫の選擇に制約を與へてゐないけれども、亡夫の弟と結婚するのが至當とされてゐる。離婚は、上級カーストの例が非常に影響してゐる。處によつて、かなりの我儘を許すもの、これを認めず不義を犯した女はカーストから締め出すもの、妻の姦通其他の過失のために、夫がカースト長老會議から離婚の權能を與へられるもの等種々である。離婚された女は、他の下級氏族の男と結婚できるが、その他の場合は、集團の指導層の許可なくして再婚は出來ない。

宗教　シヴ派を一般に信奉し、ヴィシヌ派はあまり發達してゐない。正統派ヒンヅー教に屬するといつても、その性格は地方により夫々變動があるやうである。小神として、マラング・ブル「Marang-Buru　パラメスワリ Parameswari　マハーヴィラ Mahāvira　ハヌマーン Hanumān 等崇拜され、これらの神々を表す乾泥の塚は、どこの家にも見られる。ヒンヅーの祭儀の他に、カルマ Karma 及びジッター・パラブ Jittā parab の原始的祭儀を行ふ。干魃の場合、マラング・ブルに祈願をさゝげる。この他鄉土の神々を崇拜する。カビール・ナーナク及びダルヤー・ダス派を信奉するものもある。

死體は荼毘に付し、骨灰はガンジス河或は最寄りの川に捨てる。チョタ・ナグプールでは、人の亡くなつた當日、死者の友人、親族或は他カーストの成員さへが、遺族の者に少量の米を與へ、幾らかの牛乳ととり換へる慣習がある。

社會的地位・生業　コーイーリーの社會的地位は、相當のもので、クルミー族、ゴーアーラー族に伍し、ブラ

ーマンも彼等から水をもらふ。しかし食物の點ではヒンヅーの清淨の標準以下におちる。

彼等は、生粋の農耕者である。特に煙草・阿片の育生のやうな、特別の注意・方法を必要とするものに、すぐれた伎倆を有する。大都市の近所では蔬菜栽培及市場販賣に從事する。小地主も少くないが、土地をもたぬ勞働者に下つたものもある。コーイーリーの伎倆と勤勉は世上有名であつて、耕地を有たなくても彼等に對する需要は絶えない。

コーカル族 Khōkar　地主・農耕者　パンジャブ。

ゴーサーイー族 Gōsāi　行者　南印を除く一般。

ゴーシー族 Ghōsi　牛飼ひ　上部印度。

コージャ族 Khōjah　商人　西印度。

コースティー族 Kōsti　織工　デッカン及び中央州。

ゴーディヤー族 Gōdiyā, Gūriā　菓子屋　ベンゴール及びオリッサ。

ゴーパール族 Gōpāl　手品師　デッカン地方。

コーマティ族 Kōmati　商人　テリンガーナ地方。

コーラー族 Kōrā, Khairā　土方　ベンゴール。

ゴーラー族 Gōlā　米搗き　西部及び北部印度。

コーリー族 Kōri

北印度のヒンヅーの織工カーストで、人口百五十萬内外である。回教徒の織工カーストたるジュラーハー族と好個の對照をなしてゐる。コーリー族 Kōli の分派であつて、コーリー自身は、自分達の由來を織工カーストの聖徒カビール Kabīr に求めてゐる。このカーストは、中央州では他カーストから來た織工等をも加へて、殆ど職業的集團をなしてゐる。

社會的組織　コーリー族は大抵他カーストの名をとつた多くの族内婚の副カーストに分れる。副カーストを異にするものは、一緒に食事せず通婚をしない。そして副カーストは結婚の規制のため更に多數の分族（氏族）に分れる。

婚制　コーリーの間では同一氏族内及び實の從兄妹との結婚は禁ぜられる。また息子が嫁をとる氏族に娘をやつてはならない。同じカースト或は上級カーストの男に姙娠させられた娘は、寡婦として相手の男と結婚することになつてゐる。相手が下級カーストの男の場合は、カーストから締め出される。結婚式の主要部分は、聖標の周りを廻ることである。嫁は成人しなければ夫と同棲しない。彼女が成人して夫の家に着いた時、薑黄粉を塗つた兩手を家に入る前に其の壁におしつける。

寡婦の再婚は自由に許される。寡婦は、日沒後新夫に迎へられてその家に入る。そこで床屋の女に身體を洗つてもらひ、ガラス環飾や新しい寶石類をつけ新衣に着換へる。一般に既婚女は、新夫の家に入る彼女の姿をみてはならない。新夫もまたカーストの仲間、少くとも長老會議には饗宴することになつてゐる。離婚も罰金を支拂ふならば自由に出來る。男が第二妻をもらつた時、彼は亡妻の銀の肖像を新妻が家に入る時頸にかけてやり、諸種の儀式の際これを拜む慣習がある。

葬制其他　剃髪式の濟まぬ幼兒、コレラ、疱瘡其他傳染病のため死んだものは土葬するが、その他の場合は火葬にする。子供の死體は、兩親が腕に抱いて墓穴に運ぶ。葬式の會葬者は、式後死者の家で、遺族の親族の持參した酒を飲む。

嬰兒は、その生れた日に、カーストの女に命名される。名はブラーマンの選んだものである。母親が女の子許りを生む場合は、男の子が次に生れるやうにと臍緒を小さい土壺に入れて街の三辻の處に埋める。

宗教　コーリーはヒンヅーの通常の神々を崇拜するが、特にデヴィ Devi を尊崇する。ジャワラ祭 Jawara には、この女神に感じたコーリーは、その頬に鐵針や三叉をつき通す。また各家族は、家神クル・デオ Kul-Deo を有し、小壇をつくつて祀つてゐる。動物供犧は行はない。カビールパンティ派も少くない。

社會的地位・生業　コーリーの中、カビールパンティ派のものは肉食しないけれども、その他の者は飼豚以外大抵の動物を食べ、酒を飲む。彼等の社會的地位は極めて低いが、不淨とされず、チャマール族の上に位する。婚前の女は右手に文身し、夫の家に入ると左手に文身する。鼻輪はつけない。

傳統的生業は粗布を織ることである。しかし利益が乏しいので、近來農耕、日雇勞働に從事するものが少くない。

コールター族　Kōltā　農耕者　中央州。

ゴーンダリ族　Gōndhali　小唄歌ひ　デッカン地方。

ゴーンリー族　Gōnrhi　石切り　ビハール及びオード。

ゴアニーズ　Goanese　印度西岸ゴア附近に居住するユーラシアン（歐亞人）をいふ。主として土着民とポルトガル人との混血種を指す。

コダグ族　Kodagu　農耕者・地主　クールグ。

コディッカール族　Kodikkāl　槓椰樹及び葡萄樹栽培者　タミール地方。

サーギルドペーサー族　Sāgirdpēśā　家僕　オリッサ。

サーターニ族　Sātāni　寺男　テリンガーナ地方。

サードゥ族　Sādhu　行者　西印度。

サーナーン族　Sānān　棕櫚酒採り　タミール地方。

サーレ族　Sāle　織工　デッカン地方及南印度。

サイニー族　Saini　市場出菜果栽培者　パンジャブ。

サイヤド族　Saiyad　回教徒　一般。

サドゴープ族　Sadgōp　農耕者　ベンゴール。

サッキリヤン族　Sakkiliyan　皮革工　タミール地方。

サハリヤー族　Sahariyā　捕鳥者　中央印度。

サムモー族　Sammō　地主・農耕者　シンド。

サムルゥ族　Samru　地主・農耕者　シンド。

サンカーリー族　Sankhāri　腕輪作り　ベンゴール。

サンシヤー族　Sansiyā　盗賊　パンジャブ。

ジーンワル族　Jhīnvar　漁者・運水夫　パンジャブ。

シクリーガル族　Sikligar　小刀研工　上部及び西部印度。

シディ Siddi, Sidi, Habshi　主としてアビシニア人或はネグロ等のアラブをいふ。汽船の火夫其他船舶關係の仕事に從事してゐる。

ジャート族 Jāt

ジャート族はパンジャブ、アグラ、ラジプタナの代表的農耕者大カーストで、その人口七百萬以上を算する。ヒンドゥスタンのクルミー、デッカンのクンビー、テリンガーナのカーブの各カーストに對應する。ジャート族の由來については諸說があるが、インド・スキシアン種とするのが有力である。イベットソン Ibbetson は、ジャートとラージプトとをかなりの程度まで同一種とみ、彼等の祖先は印度に侵入したが、その集團の指導者層はラージプトであつたとしてゐる。ジャートはパンジャブの住民の中最も重要なもので、數の上ではラージプトを凌ぎ、この二族は州内全人口の約三分の一を占めてゐる。

ジャート族は、ブラーマン、ラージプト、バニア各カーストを除けば、パンジャブでは最高に位し、グージャール、アヒールの兩カーストの上にある。ブラーマンを雇つて種々の儀式を行つてゐる。

婚制　彼等は結婚を規制するために多數の族外婚の氏族に分れてゐる。同一氏族内の結婚及び母方、祖母方並に父の妹の嫁ぎ先の氏族との通婚は禁じられてゐる。結婚式には木標で地割して四角の圍ひをつくり、絲を地面に觸れるやうに木標の周りに七回捲き、それが燒けないやうに米か小麥で蔽ふ。この圍ひはチャオンリ Chaonri といふ。この中に小麥粉を盛りあげその上に大麥、胡麻、砂糖、蕃紅花（サフラン）を置き、これらを牛酪で燃やし火の供犧 Hom を行ふ。これがすむと花婿花嫁は右手を内側にチャオンリの周りを七度廻る。やがて綿總（ブナ）が二人の上に投げられると、二人はお互にそれを摘みとる。これを先に摘みとつてしまつた方が勝ちである。これは棉摘みの象徴的な眞似事と考へられる。

寡婦の結婚許され、土曜日にその儀式を行つてゐる。彼女と結婚すべき獨身者はまづピーパル樹の周りを七度廻ることになつてゐる。寡婦は亡夫の弟や三等親内の近親と結婚は出來ない。

葬制　七歳未滿の子供の死體は土葬するが一般に火葬に付する。夫の死後寡婦は左手を内側にして死體の廻りを七度廻る。この儀式は、結婚式の際の廻り方とは逆であり、結婚の一種の解除に相當すると考へられる。

ジャートの見榮を張る機會はパイダ儀式 Paida である。これは家長やその妻が死んだり、娘が結婚した場合、富裕な家で行ふもので、これを行ふと社會的に重くみられ、カースト仲間でその意見が重んぜられるやうになるといはれてゐる。

宗教　ジャートはシヴ卽ちマハーデオ Siva or Mahādeo を最高の祖先と考へてをり、人氣がある。シヴの祭りのシヴラーティ祭儀 Shivrāti には斷食をなし、その日は晝夜を分たず神をたゝへる歌をうたつて過す。翌朝ベル樹の葉（Aegle marmelo）米、白檀、花等を供へる。ホシャンガーバードでは戰歿武士の靈ラームジ・デオ Ramji Deo バイラム・デオ Bairam Deo の二小神を崇拜する。またダサーラ祭 Dasahra には、武人の祖先を記念して劍、馬等を拜む。

特殊慣習・文身其他　ジャートの間では石女があると三村落の境界が出會ふ處へ連れて行き、そこで沐浴させる。また男の子供が生れると、それを一般に知らせるために眞鍮の皿を槌で打ちならす。女子の場合は唐箕をう

つ。臍緒は産室に埋める。

ジャートの皮膚は明色である。娘は結婚前に文身するが、施術されてゐる間、その苦痛から注意を外らすために、カーストの女達が集まつて歌をうたふ。ジャートの男は、パグリ Pagri といふターバンをつける。女は歩く度毎にコロ〳〵鳴る空洞の足首輪をつけるのが好きである。一般に肉、酒を飲食する。しかし、鳥や魚をとらない處もある。

生業　ジャートは良き農耕者である。しかし他面總じて生活及び慣習上の冗費、贅澤のために地所を失つたものも少くない。サウゴルでは石工、土方等として働くジャートも見うけられる。

ジャナッパン族　Janappan　麻織工　タミール地方。

ジャリアーラー族　Jaliārā　藍染工　西印度。

ジャンガム族　Jangam　リンガーヤト派司祭者　カルナティク地方。

ジューギー族　Jūgi　織工　ベンゴール。

ジュラーハー族　Julaha, Momin

北印度、ベンゴール、中央州に主として居住する下級の回教徒織工カーストである。人口三百萬以上に達する。ナグプールではモミンといはれる。大部分ヒンヅーの改宗者である。

ジュラーハー族は、その手職の開設者といふので自らアダム Adam と稱し、祖先はアラビヤから來たといつてゐる。外來者がカーストに入るのを許さぬところがあり、また回教徒でさへあればカーストに入れるところもある。彼等は回教の結婚法や相續法に從つてゐる。一般に近親結婚が喜ばれてゐるが、妹、姪、叔母、乳姉妹とは結婚出來ない。また、ジュラーハーの女はパルダー制度 Purda★ を認めない。

註　★パルダー制度 Purda（女子屏居制度）　パルダーは幕の意であつて、女子屏居制度はヒンヅー教徒が回教徒よりその婦女を守るために採用したものといはれる。これによつて印度の婦女は結婚すると一切外出を禁ぜられ、僅かに參詣沐浴の場合のみ許された。外出の際も其の車に幕を下して外部から顏を見られぬやうに注意する。印度の街で顏を出して歩いてゐるのは下級カーストの婦女だけである。唯パーシー教徒にはこの制度がないので、上流婦人も街上或は公共の場所にその姿を見せてゐる。元來パルダー制度は婦女を無知と迷信の裡に放置し、保守的傾向を助長して婦女の社會的進出を防止するのみでなく、肉體的にも良くない影響をもたらすので、近來パルダー制度の廢止が唱へられるやうになつた。

ジョーギー族　Jōgi　行者　上部印度。

ジョーシー族　Jōsi　占星師　南印を除く一般。

ジョーナッカン族 Jōnakkan　商人　マラバール地方。

シンハル族 Singhalese

セイロン島の中部以南に住み、約三百五十萬を算する。北部印度から渡來したインド・アーリアン族の裔といはれるが、ドラヴィデアン族乃至ヴェダー族の血と混血し、皮膚褐色、黒眼、多毛、長頭、隆鼻である。性溫良であるが、一般に退嬰的で嫉妬心強く、饒舌、實行力を缺く上に、短氣で依頼心強い。商業的能力は乏しく、大抵農耕に從事してゐるが、書記、事務員、法律家となるものも少くない。全島のシンハル族は、低地シンハル族とカンディアン・シンハル族の二つに分れる。彼等は殆ど全部佛教を信じてゐる。シンハル族傳來の學術、文化は相當高度で、その歷史、建築は優秀である。

シンピー族 Simpi　仕立屋　デッカン地方。

スードラ族 Śūdra　家僕　ベンゴール。

スーナール族 Sūnār, Sonār, Soni, Hon-Potdār, Sarāf　南印以外あまねく認められる金工、銀工の職業的カーストである。人口は百數十萬を算する。その由來については何らの記錄はなく、比較的近來出たらしいカーストである。

社會組織　スーナール族は多數の副カーストをもつてゐるが、それは地域的根據にもとづいてゐる。重要な副カーストはアウディア Audhia ブンデルカンディ Bundelkhandi マールウィ Mālwi ラード lad, 其他であつて、他に小集團としてパートカル Pātkar パンダーレ Pundharé 其他がある。他方多數の族外婚の氏族に分れてゐる。氏族は、氏族の開祖の綽名或は土地の名をとつてゐる。

婚制　同一氏族内の結婚は禁ぜられてゐる。ある地方では、共同の祖先をもつ人々は五代の間通婚出來ないが、他の處では交叉從兄妹婚が行はれてゐる。男は妻の生時中はその妹と結婚出來ないけれども、その死後は結婚できる。妻の姉とは結婚出來ない。娘は通常幼兒婚させられる。しかし處によつては、男女共疱瘡にかゝらぬ中は結婚しないといふ規則がある。それは、斯ういふ生命上の危險にさらされてゐる以上、結婚の約束といつても十分の根據がないからである。しかし種痘が行はれるやうになつてから、この慣習はなくなつた。式は、地方により或はヒンドゥスタン風に、或はマラータ風に行はれる。多妻婚が許されてゐるが、適當の獨身の男がある場合、娘を既婚の男にやるやうなことはない。また富裕なスーナールは、社會的地位の向上を希望するため寡婦の再婚を禁じてゐるけれども、一般はこれを許してゐる。

宗教　スーナールは通常のヒンヅーの神々を崇拜し、大體、ヴィシヌ派、シヴ派、サークタ派の三宗派に分れる。一部のスーナールは鍛冶爐に供物を上げ仕事の繁榮を祈る慣習がある。子供が生れると、結婚の神ドゥーラ・デオ Dūlha Deo に山羊を供犧する。その後に來るダサーラ祭 Dasahra には、その肉を家族のもののみが食べることになつてをり、その他のものはこれに與かることは出來ない。ホシャンガーバドでは、ダサーラ祭の

前晩にカーストの者がすべて川端に集つて饗宴を開き、來るべき年の仕事について誓約をする。これを破つたスーナールは、カーストから除かれる。五月の十五日には、村落のスーナールは道具を洗つた後これを拜み、五日間休業する。

葬制　スーナールの間では死體は通常火葬に付し、骨灰をネルバダ河やガンジス河に捨てる。不慮の死に遭ひ死體の見つからぬ場合は、死者の小像をつくり、適當な儀式を修めた上これを燒く。服喪は十日乃至十三日間である。スラード śrāḍh の儀式は、死後一年目に行ふ。

社會的地位　スーナール族中社會的地位の向上を念願する人々は、すべて肉と酒を禁斷し、聖紐をつけてゐる。ブラーマンからさへ、料理した食物をとらないといふ。しかし一般のスーナールは、斯ういふ制約等を認めない。ブラーマンは、スーナールから水をもらふ。

スーナールは大抵市街地に居住する。そして富裕なものも多いので社會的地位は相當高く、農耕者カーストと同等若しくはそれ以上である。しかし、金工は、マラータ地方では村僕級である。

生業　スーナールは、殆どあらゆる種類の金銀の裝身具を作る。彼等は通常金屬を客に供給してもらふ。黄金はヒンヅー教徒にとつて、極めて神聖なる金屬とされ、ブラーマン達の中には、頭と腕の裝身具には黄金以外を用ひない。臨終の際にも、ガンジス河の水、トゥルシー樹の葉と共に若干の黄金を死者の口に入れる。從つてこれら聖なる金製品の製作に任ずるスーナールの職業の重要性を想察出來よう。

スームロー族　Sūmrō　地主・農耕者　シンド。

スバルナバニク族　Subarnabanik　商人　ベンゴール。

スリーマーリー族　Srimāli　商人　西印度。

スンリ族　Sunri　火酒蒸溜者　ベンゴール。

セーナイックーダイヤーン族　Sēnaikkūdaiyān　檳榔樹及び葡萄樹栽培者　タミール地方。

セーヴク族　Sēvak　ジャイナ僧　ラジプタナ。

セギディ族　Segidi　棕櫚酒採り　オリッサ。

センバダヴン族　Sembadavan　漁撈者　タミール地方。

ターヴィー族　Thāvi　石工　パンジャブ山地。

ターガー族　Tāgā　地主・農耕者　アグラ。

ターカーリー族　Tākārī, Tākankar　礦石工　デッカン地方。

ダーカウト族　Dākaut　占星師　アグラ其他。

ターカル族　Thākar　農耕者　パンジャブ。

ダーカル族　Dhākar　作男　ラジプタナ。

ダーギー族　Dāgī　皮革工　パンジャブ山地。

ダーサリ族　Dāsari　行者　テリンガーナ地方。

ダーシー族　Dāsi, Dēvali　踊り女　テリンガーナ及びカルナティク。

ダーヌク族　Dhānuk　作男　アグラ及びラジプタナ。

タームバト族　Tāmbat　銅工　西印度。

ターンティー族　Tānti　織工　ベンゴール。

ターンボーリー族　Tāmbōli　檳榔樹及び葡萄樹栽培者　南印を除く一般。

タテーラー族　Thaṭhērā　眞鍮工　上部印度。

ダファーリ族　Daṭāli　乞食　アグラ及びビハール。

タムバラ族　Tambala　司祭者　テリンガーナ地方。

ダルカール族　Dharkār　竹細工師　アグラ及びラジプタナ。

タルカーン族　Tarkhān　大工　パンジャブ。

ダルジー族　Darji　仕立屋　一般。

ダンガル族　Dhangar, Hātkar　羊飼ひ　デッカン地方。

タンダーン族　Tandān　椋櫚酒採り　マラバール地方。

タントワー族　Tantvā　織工　ビハール。

チェッティ族　Chetti　商人　タミール地方。

チピー族　Chipi　曆師・染色工　上部印度。

チャーカラ族　Chākala　洗濯屋　テリンガーナ地方。

チャーカル族　Chākar　家僕　ラジプタナ。

チャーラン族　Chāran　系譜師　西印度。

チャイン族　Chain　石工　オード及びビハール。

チャトゥルタ族　Chaturtha　農耕者・商人　カルナティク。

チャマール族　Chamār, Chambhār

南印を除き印度の到る處にみられる皮革工及び下級勞働者のカーストである。一九三一年、一一、七五一、一八七人を算し、ブラーマンに次ぐ印度第二の大カーストである。チャマールは漁撈者カーストの男とチャンダール族の女との間に生れたといはれてゐる。リズレーはチャマール族をアリオ・ドラヴィデアン型に入れ、地方により兩要素中の何れかゞ強く表れて、身體的特徴の上に變動を與へてゐると述べてゐるやうに、アーリアン的な身體型は諸方に認められる。殊にボンベイのカナラ地區のチャマールの女は美しい。チャッティスガルでは身長も高く、皮膚は白皙であるといはれてゐる。

社會組織　チャマール族は多數の族内婚の副カーストに分れる。ジャリア Jhāria カナウジア Kanaujia アヒルワール Ahirwār ジャイスワーラ Jaiswāra バドリア Bhadoria 其他で、この他にカタウア Kataua（皮革切り）モチス Mochis（短靴工）ジーンガルス Jingars（鞍作り）其他の職業的性質を有する副カーストもある。カーストは更に多數の族外婚の氏族に分れてゐる。氏族名は、ラージプウト、ゴーンドの氏族名、他カースト名その他植物、地名等種々のものから借りてゐる。

婚制　同一氏族の結婚及び實の從兄妹婚は禁ぜられてゐる。ある地方では、母方又は祖母方の氏族との通婚を禁ずる。一般に成人婚が原則であるが、社會的地位の改善を希望するものは、娘を幼少の時かたづける傾向がある。結婚については兩親がとゝのへる。花嫁料は二パイスから百ルピー迄あるが、平均二十ルピーである。

結婚式は、地方で行はれる標準式に從ふ。花嫁の家へ向ふ途中、花婿は牛に乘り毛布で身を蔽ふ。ビラースプールでは、兩家間に一種の擬戰が行はれるが、おそらく掠奪婚の名殘りと思はれる。寡婦の再婚は普通事である。第二夫は誰でもよいが、自分の親族、亡夫の兄等はいけない。

前夫の生きてゐる女と結婚するのは、チャンドゥエ・バナーナ Chhandwe banāna といはれるが、第二夫はこの際第一夫へ當の結婚に要した費用を支拂ふことになつてゐる。離婚は、カースト長老會議の面前で二人が藁を切ると許される。

チャッティスガルでは結婚の紐帶は極めて緩く、姦通も罪と思はれてゐないといはれる。女は好きな男が出來ると、夫の家を出、公然と男と同棲するし、夫もこれを見すごす。時折二人の非常に仲の良い男達は、第三者の肝煎りで相互に妻を交換することもあるといふ。

葬制　チャマールは死體を足を北に向け土葬する。これは天國は北方にあるとか、大地の主は北方にゐる等の觀念によるのである。チャッティスガルでは、死體を葬る前に牛酪、油、煤等で身體に印をつけ、その後子供がその家に生れた場合、身體の相應する部分に何かの印がないかどうかを探し、若し印があると死者の生れかはりと考へる。死産兒や生後六日目の儀式前に死んだ嬰兒の死體は墓穴に葬らず、土壺に入れて家の戸口か裏庭に埋める。

産制　比較的富裕なチャマールは、新生兒を米の寢床に据ゑた唐箕におく慣習がある。乳母はその米を手にして、村長や親族の家々を廻り、誕生の通知として家の戸口に牛糞で印をつけ、夫々幾らか宛の贈與をもらつて歸る。嬰兒は、六日目又は十二日目に命名される。兒の頭を剃り、母子共身體を洗ふ。その際家族の男も剃髮する。母親は産後の最初の常食として南瓜、穀物、豆類を調理したのを撮る。チャマールの子供は時折カーンワ Kānwa（一つ目）ベラ Behra（聾）其他の特殊の渾名をつけられる。

宗教　チャマールは通常のヒンヅーの神々及び鄕土の神々を崇拜し、主な祭儀を行つてゐる。サウゴルではマッリ Marri といふ家族神を崇める。これは家族の祖先を表すもので、臺所にある土塊がその神像である。セオニ・チャマール Seoni Chamār は蓖麻を崇拜する。一般に祭の日には商賣道具の獸皮剝ぎの小刀に小麥菓や椰子の實を供へ尊崇する。チャッティスガルのチャマールは大部分サトナーミ派 Satnāmi に屬する。

チャマールは鹽を非常に尊び、また地獄を罰の場所と考へてゐる。彼等は人が鹽をこぼすならばその人は地獄で眼瞼を以て鹽の一粒一粒を集めねばならぬと信じてゐるからである。從つて鹽は愼重に手渡しされ、必ず布片や器物で受取る。掌で受けるのは不吉とされてゐる。彼等は死者の精靈は遺族の居處や家の周りをうろうろしてゐると信じ、家の誰かゞ死ぬとその家を壞し棄て去る。また死者の精靈はある期間ぶらついた後人或は下級動物に生れかはると信じてゐる。

生業　チャマールの第一の生業は獸皮を乾かし鞣すことである。しかし、これに從事するものは、全體の割合からいへば非常に少ない。彼等は村人から牛皮の供給をうけ、これを鞣して農耕用の短靴等を作つてやつてゐる。北方地區では村の苦役として働き、報酬として牛皮を手に入れてゐる。農耕者、勞働者として働くものも非

常に多い。

社會的地位・性質　チャマールは所謂不可觸賤民に屬する。共同井戸から水をとることを許されず、村から離れた處に小屋を建てゝ住んでゐる。しかし處によつてそれ程嚴格でないところもある。彼等は、平常接觸をもつ農耕者に對しては不忠實且つ嘘つきであるといはれ評判はよくない。チャッティスガルではチャマールは最も犯罪が多く、牛泥棒が最多數を占めてゐる。

チューラー族　Chuhra　掃除屋　パンジャブ。

チューリハール族　Chūrihār　ガラス工・行商人　北部及び中部印度。

デード族　Dhēd　村僕　西印度。

テーリー族　Teli

南印を除いて印度のいたる處にみられる搾油者及び油賣りの職業的カーストである。その數四百萬以上に達する。テーリーの名稱は、梵語タイリカ或はタイラ tailika, taila (油) から出たといはれる。現在、このカーストの多くのものは、傳統の職を捨てゝ、商業或は農業に從事してゐる。

社會組織　テーリー族は多數の副カーストに分れてゐる。チャッティスガルの主要集團はハリア Halia ジャリア Jharia エクバイル Ekbaile ルティア Rutia サオ Sao 其他である。ナグプルではエクバイル Ekbaile ルティア Rutia サオ Sao 其他がある。これらの副カーストは、結婚の規制のために更に多くの族外婚の分族に分れる。

婚制　同一分族内のもの及び實の從兄妹は結婚出來ない。男は妻の生時中でもその妹と結婚出來るけれども、姉とは出來ないこととになつてゐる。未婚娘が同じカーストの男と關係して孕んだ場合は、寡婦の結婚式により相手と結婚出來る。結婚の申込は男の側よりなし、少額であるが花嫁料を支拂ふことになつてゐる。寡婦の再婚並に離婚は許される。しかしチャッティスガルでは、寡婦は出來るならば亡夫の家に留まるのが適當と考へられてゐる。結婚はしたが、同棲に至らずして夫と死別した寡婦が、亡夫の家から出て再婚したいならば、最初の結婚に要した費用を亡夫の家族に支拂はねばならない。

寡婦との婚約は、求婚者の女近親者がとゝのへる。定められた日に、嫁は二、三人の寡婦と一緒に婿の家へ行き、それから市場へ出て二組の鏡銅の足指輪と若干のガラス環飾を買ひ、その儘眞暗になる迄市場に居殘る。そこへ寡婦の一人が、婿のために嫁を迎へに行き、彼女を婿の家に連れて來る。婿嫁の二人は一緒に坐り、二人の額には赤粉が塗られる。それから沐浴し、二人の舊い衣服は洗濯屋へ出し、新衣に着換へる。これは彼女の元の家と出來るだけ完全に關係を斷ち、元の夫の精靈が新しい家について來るのを防ぐためである。

宗教　テーリー族は特にマハーデオ別名シヴ Mahādeo or Siva を製油場を與へる神として崇拜する。また製油場をも尊崇する。北方地區ではマサーン・バーバ Masān Bāba といふ黒色の高さ三呎で腦天に一總の長い黒色の髪をもつテーリーの子供の幽靈像を崇める。マサーン・バーバをもつてゐるテーリーの家では、搾油機を廻す時、その機具の上に像を置く。それは搾油機の神格化されたものである。チャッティスガルでは、ドゥーラ・

デオ Dūlha Deo が家の神として、見える像をとらないけれども屋内の戸棚の中にゐると信ぜられてゐる。ナグブルのテーリーはナーラーヤン・デオ Nārāyan Deo 即ち太陽を崇め、豚を供犠する。また雨季中のポラ祭 Pola の三日目に、カーストの女は小さい葉と刺のついた莖類の枝をもつて來てマールボド Mārbod といひ、これで病魔、害蟲の退散を口誦み乍ら家の中を掃き清める。塵芥を入れた壺は村端れに持ち出して捨てる。マールボド神は莖類の枝で表された神である。またニマールのテーリーは、長期に亙る回教徒支配の遺物として、種々の回教行事を行ふ。更にこのカーストには、カーストの區別や下級狀態を無視するスワーミ・ナーラーヤン改革派 Swāmi-Nārāyan も少くない。

葬制　死體は通常火葬或は土葬にする。一般に火葬は年長者への尊敬を表すものである。死體は、頭を北へ、顏は男は下、女は上向けにして埋葬する。

社會的地位・生業　テーリーの社會的地位は以前から極めて低い。ブラーマンは水をもらはず、鍛冶屋、大工のやうな村僕の下風に位する。惡緣、不幸のカーストとされて來た。しかし、ベンゴールでは幾分よい地位を占めるといふ。

テーリーの傳統的職業は搾油及油賣りであるが、搾油法は極めて原始的である。現在では傳來の職業をすて農業、金貸し及び商店主其他の商業に從事するものも少くない。このカーストの人々は、一般に進取の氣象に富んでゐるといはれる。

デーヴーディガ族　Dēvādiga　寺男　テリンガーナ及びカルナティク地方。

デーヴーンガ族　Dēvānga　織工　カルナティク。

ティガラ族　Tigala　市場出菜果栽培者　南デッカン地方。

ティヤル族　Tiyar　漁者・船頭　ベンゴール。

ティヤン族　Tiyan　棕櫚酒採り　マラバール地方。

テラガ族　Telaga　農耕者　テリンガーナ地方。

ドーサード族　Dosādh

ビハール及びチョタ・ナグプールに居住するドラヴィデアン農耕者カーストである。一九三一年、一、四〇〇、八七八人を算する。學者の中にはこのカーストを劣等アーリアンとするものもある。一般に廣くひろがつた鼻孔を有し、鼻頭は幾分上向き、皮膚は黃褐色を呈するが、鼻形、皮膚の色は種々變動があり、血液の混淆を示してゐる。若者の中には非常に美貌のものを見受ける場合がある。

ドーサード族は、カナウジア Kanaujia マガヒヤー Magahiya ボジプリアー Bhojpuria 其他の副カーストに

分れ、副カーストはまた多數の族外婚の氏族に分れる。結婚については、父、父方の祖母、同大祖母、同大大祖母及び母、母方の祖母、同大祖母、同大大祖母の氏族と通婚出來ない等特殊の場合迄細かく決めてゐるが、實際上疑義も多いので、パンジアール Panjiar（系譜師）といふ役のものが鑑定する。結婚は、娘の方でよい場合はいつでも行ふ。幼兒婚の必要についても幾分考へるやうになつた。寡婦の再婚は許されるが、大抵亡夫の弟とである。カースト長老會議の許可を得れば離婚も出來るが、カーマル副カースト Kāmar では許さない。

ドーサードは概して正統ヒンヅー教を信奉する。ブラーマンを雇ひ正規の神々を崇拜する。スリ・ナラヤニ、トゥルシ・ダース、ナナク、カビル等の教派に屬するものもある。またドーサードの部族神ラーフ Rāhu は、ブラーマンに變形され、太陽、月を嚥下して世を暗闇にさせたといはれるダイティア神 Daitya となつてゐる。ドーサードはラーフ神の祭りには火を供犧するので有名である。

死體は普通火葬に付するが、土葬の場合もある。

彼等の社會的地位は極めて低く、不可觸賤民に屬してゐる。豚肉、龜、鷄、銀鼠の肉を食べる。また酒に强く、他カーストの者は食事を共にしない。

彼等は通常見張り番や使丁、農耕者等である。西ベンゴール及びビハールではヨーロッパ人家庭の料理人や小使として働くものが多い。

ドービー族 Dhōbi, Wārthi, Barethia, Chakla, Rajak, Parit

南印を除く印度の到る處にみられる洗濯屋の職業的カーストである。ドービーの名稱はヒンディ語のドナ dhona 梵語のダヴ dhav（洗ふ）より出た。マラータ地方ではワールティ Wārthi といはれ、ラジャク Rajak パリート Parit はドービーの同意語である。一九三一年、一、四〇六、二九一人を算する。このカーストは、大きな町のある地方に多數居住し、相當程度傳來の職業を捨て、農耕その他の職業に從事してゐる。

社會組織　ベンゴール、中央州等では、地域的根據にもとづき多數の副カーストに分れてゐるが、回教徒のドービーはまた別個の副カーストを形成してゐる。これらは更に、族外婚のケロ Khero といふ集團から成つてゐる。カースト長老會議の統領をメータル Mehtar 副統領をチャウドリ Chaudhri といひ、これらの役目は世襲である。各集團は村名、職業上の名稱からその名をとつてゐる。カーストは族外婚である。

婚制　ドービーの間ではケロ內の結婚及び實の從兄妹婚は禁ぜられてゐる。興味深いのは、花嫁料等を受取るのは恥辱と考へてゐることである。娘の兩親が貧しい場合も、これを受けないのみでなく、カーストは斯ういふ際には結婚費用をつくるために寄附金を募る。北方地區のドービーの結婚には、婿嫁の家で始終歌ひ且つ踊るといふので知られてゐる。一人の男が長い上衣を着、舞女の姿をして花婿花嫁の前で踊るのである。これは他の下級カーストにも見られるが、ヨーロッパの僞花嫁 False Bride に似たもので、惡魔の眼を本當の花嫁から外らすための儀式と考へられる。寡婦の再婚が許される。ベトゥルでは、婿が暗夜黑い毛布で身體を蔽つて嫁（寡婦）の家へ行く。そして彼女に、新衣、環飾、裝飾用小金屬片及び額につける赤色の鉛を贈る。離婚も、カーストの頭首の認可をうるならば自由に出來る。

出產慣習　出產後、母親は數日間粗糖と棗椶梠の他食べてはならない。嬰兒は最初の二日間、蜂蜜と蓖麻子油をとり、その後母乳を飲むことを許される。產室の中に小さい穴を掘り、こゝに水と嬰兒の初切の髮と爪を入れ

て塞ぐ。母親が通常の身體に回復すると、穴の前に坐して禮拜し、嬰兒の將來の無病息災を祈願する。男子出産の場合は七日間、女子は五日不淨とされる。

宗教　ドービーの主神は、船付場の神ガトイア Ghatoia である。彼等は、川に入つて衣類を洗ふ前に衣類を叩きつける石を拜み、仕事が遽かに了るやう祈願する。また川の神に蛇や鰐から守護して下さるやう祈る。ダサーラ祭 Dasahra には、洗濯石に花、蓙黄、煮飯を供へて禮拜する。ドービーは、洗濯石にはあの世へ行つた同族の者達の靈鬼がひそんでをり、またそれは魔術力をもつと信じてゐる。

彼等は死體を火葬又は土葬に付する。服喪は三日間である。

生業　ドービーの傳統的職業は洗濯である。彼等は洗濯前に、洗濯物を束にして沸騰した大釜の上にかけ暫時これを蒸す。それから小川其他水邊へ行き油抜きの泥土で手荒に洗ふ。次いで膝の邊までの深さの水に入り、兩手に澤山の洗濯物の端をつかみ、高く空中にあげ大きな洗濯石にたゝきつける。この叩きつける作業を洗濯物がすつかりきれいになる迄繰り返すのである。サウゴルでは、夜、木灰をつけ洗濯物を摩擦し、朝水中で棒を以てそれを打つ方法をとつてゐる。絹物には石鹸液泡を出すサタ樹 (Sapindus emarginatus) の實で洗ふ。ドービーは洗濯にはニルマリ (Strychnos potatorum) ビウ (Basella) ナーグパニ (Cactus indicus) 錦葵等の植物を用ひてゐる。

現在村僕或は農耕者に雇はれて働くものも非常に多い。

社會的地位　ドービーは出産、死亡等の不淨時に雇はれ着物等を洗濯する關係上不淨とみられ、所謂不可觸賤民階級に屬する。

ドーム族　Dōm, Dūmnā　掃除屋　上部印度。

トーリー族　Thōri　撻夫　パンジャブ山地。

ドール族　Dhōr　麻織工　デッカン。

ドアーニア族　Doānia　シングフォー族の私生兒　アッサム。

ドゥーデークラ族　Dūdēkula　綿打工　テリンガーナ地方。

ドゥーブラー族　Dūbla, Talāvia　作男　西印度。

トゥーリー族　Tūri　竹細工師　ベンゴール。

ドゥーンディアー族　Dhūndia, Dhōdia　作男　西印度。

ドゥニヤー族 Dhuniyā 綿打工　北部印度。

トゥラーハー族 Turāhā 地主　ベンゴール。

トガタ族 Togata 織工　カルナティク地方。

トッティヤン族 Tottiyan 農耕者　カルナティク地方。

ドムバー族 Dombā 織工　マドラス州北部及び東部。

ドムバル族 Dombar, Kōlhāti 輕業師その他　デッカン地方。

ナーマスードラ族、チャンダール族 Nāmasūdra, Nama, Nishād, Chandāl, Chāmrāl, Chang 主としてベンゴールに居住する非アーリアンのカーストで、大部分船乘りや農耕者として働いてゐる。一九三一年、二、二六七、五六九人を算する。皮膚は褐色より寧ろ黒色、胸部は短いが厚く擴がり、筋肉型で、黒いよく光る眼をしてゐる。このカーストは往昔からカースト外の奴隷民として蔑まれ、マヌ法典は、これを人間中最下級のものと記してゐる。彼等の財産は、鐵器、犬及び猿等で、普段死人の着た衣服を身につけてゐたといはれてゐる。現在、チャンダールといへば、罵詈語とさへなつてゐる。

ベンゴールのチャンダールは自身をナーマスードラといふ。ナーマスードラ族は、東、中及び西ベンゴールにおいて多數の副カーストを有するが、また族外婚の數集團に分れる。上級カーストに倣ひ娘に幼兒婚を行はせ、式も眞似てゐる。多妻婚は許されてゐるが、當人の財産の如何によつて行はれてゐる程度である。寡婦の再婚は嘗て廣く行はれたけれども、その後禁ぜられた。離婚は、どういふ事情があつても許されない。出產後の不淨は男兒の場合は十日間、女兒は七日から九日までゝある。チャンダーラ・カーストの成員は、殆ど大部分ヴィシヌ派を標榜してゐる。しかし現在尙以前の精靈崇拜の殘存を示す宗教的慣習をもち、地女神及び河神を兼ねるバンスラ Bansura 蛇女神マナサ・デヴィー Manasa Devi を崇拜してゐる。彼等は宗教的・社會的儀式を掌るブラーマンを雇ふが、それはバルナ・ブラーマン或はチャンダーラ・ブラーマン Burna Brahman, Chandāler Br. といはれてゐる。

今日チャンダルはドービーやナービトを洗濯屋、理髮師として雇ふ等、社會的には相當の地位にある。唯、カースト的偏見强く、自分のカーストの間においてさへ、上級の者は下級のものをチャンダールといつて蔑視する。船乘りとしても、ヨーロッパ人等が船上の調理室に足をふみ入れたりするのを許さず、さうした場合は食物を捨てるといはれる。

彼等は、ベンゴール人中最も愛すべきものに屬する。朗かな氣樂な性質である一方、我慢强く、よく働く。といつて自ら樂しむことをも忘れない。歌をうたふのが非常に好きである。

船乘り、小農民、商店主、金工、鍛冶屋、大工、製油工等として働くが、成功した商人も少くない。

ナーイー族 Nāi, Nae, Mhāi, Hajjām, Bhandāri, Mangala

これは、南印を除く印度の到る處にみられる床屋のカーストである。人口二百五十萬以上を算する。純然たる職業的カーストで、地域的根據にもとづく副カーストは極めて多數である。また族外婚の梵聖者、ラージプウト氏族や動植物の名をもつ集團に分れる。

ナーイーの間では同一集團内の結婚は禁ぜられてゐる。娘は通常八歳から十二歳、息子は十五歳から二十歳迄の間に結婚する。結婚前に過ちを犯した娘はカーストから除外される。結婚式はクルミー族或はクンビー族の仕方に從ふ。寡婦の再婚は許される。北方地區では彼女は亡夫の弟と結婚する。ところが、マラータ地方では、親族のものと結婚出來ない。離婚は夫の訴にもとづきカースト長老會議の前で有效とされる。離婚された女は、自由に再婚出來る。

ナーイーは、通常のヒンヅーの神々を崇拜する。ダサーラ祭 Dasehra ディヴァーリ祭 Divali には剃刀、鋏、爪切り等の商賣道具を洗つて拜む。彼等はまた緣起をかつぐ性質で、何か仕事を始めようとする時、鐵砲の音を聞いたり、噴嚔したりするのを不吉なことゝ考へてゐる。又族立ちする時、面前の路上を猫、栗鼠、蛇が橫切ると、族を斷念して歸宅する。

ナーイーは一般に死體を火葬する。チャッティスガルでは貧しいナーイーは死體をマハーナディ河に投げ、一歳未滿の子供は、自家の裏庭に土葬する。

彼等は傳統的に床屋を生業としてゐる。村のナーイーは、小鏡、鐵の釘拔、革紐、梯及び一碼程の布片を持ち、

藥瓶に入つた油をもつて客の顏、頭、腋下等を剃り、兩手兩足の爪を切る。夏は冷水、冬は溫水を用ひ、石鹼を用ひない。しかし市街地では石鹼を用ひてゐる。ナーイーは剃りが終つた後、腕をたゝいたりさすつたりして各指關節をほぐす。また客の註文に應じ、耳を掃除したり爪を切つたりする等、素朴乍ら村の外科醫の仕事をする。ナーイーはブラーマンの助手として働くこともあり、またブラーマンを雇へない下級カーストの間では自ら結婚の司祭者となつて働く。

ナガルチー族 Nagarchi 太鼓打ち　上部印度。

ナッタマーン族 Nattaman 農耕者　タミール地方。

ナト族 Nat 輕業師　上部印度。

ナヤール族 Nayar, Nair

ナヤール族はマラバール地方を中心に、コチン、トラヴンコール王國に廣く分布するカーストである。人口百數十萬を算する。總體として地主、商人、職人、油商人、輸夫、床屋、漁撈者等の世襲的職業に從事してゐる。

ナヤール族の由來については、ドラヴィデアン族のマラバール地方最初の侵入者といはれてゐる。彼等は往時土着民に對し支配者的地位を占めてゐた。特に武士階級として王や諸侯に直屬し、特殊の教育・訓練を受け、十

六世紀頃までは非常に榮え、他面下級民に對して橫暴を逞しくしたといはれる。現在武士精神は失はれたが、貴族性を誇る風は尙殘つてゐる。また一般に身のこなしや劍、弓矢、槍等の操作に巧みである。

多妻婚　ナヤール族の間には、總族長の下に、夫々の身分をもつた多數の副カーストが存在する。これらは更に多くの族外婚の支族に分れてゐる。マラバールのナヤールの間には、嘗て多夫婚の慣習があつた。女は通常の結婚の儀式をあげ結婚火の前で神聖にされると、異性との交涉においては自身の好みに從つて動くのみである。從つて、例へば六人兄弟對二人妻、六人夫對一人妻といふ妻共有が行はれた。しかもこのために、男達の間に喧嘩など起らなかつたといふ。現在多妻婚は認められなくなり、一般に一妻婚が行はれてゐる。

社會慣習　ナヤールのカースト規則は極めて嚴重である。どんな低いカーストのナヤールもキリスト敎徒、回敎徒等禁ぜられてゐるカーストの者に觸れた場合は、沐浴しなければならない。しかし不思議な程、ナムブーテイリ・ブラーマン Nambutiri Brahman には從順であるといふ。またナヤールの間では母系相續制が殘存し、妻は夫の家に同棲せず實家に住みその姉妹の子を最も近い後繼者とする習慣があつたが、現在は兩親の財產はその子が繼承することになつてゐる。

家屋・生業　彼等の家屋は普通東向きで、入口に納屋があり、時には二階建もある。玄關口には階段がついてゐる。家屋は一般に四間に分れてゐる。チーク材で造られてゐるため耐久力が大であり、四百年經過した家屋も稀ではない。ナヤールの服裝は質素であるが、淸潔好きで汚れたものは身につけない。女は金の垂飾具が蛇形の蛇頭巾と稱するものを冠つてゐる。

ナヤールは、現在では殆どあらゆる職業に從事してゐるが、主なるものは、農耕、下僕、寺男、煉瓦作り、壺作り等である。彼等は敎育方面においても、著しい地位を占めつゝあり、女子敎育の發展は見るべきものがあるといふ。マラバール地方における最も敎育あり進步した集團社會を形成し、官廳其他知能的職場にも多數の人々を供給しつゝある。

ニーラーリー族　Nilari　藍染工　上部印度。

ニヤーリヤー族　Niyāriyā, Dhuldhōyā　砂金採り　上部及び西部印度。

ネイゲ族　Neyige　織工　カルナティク地方。

バーガリヤー族　Bāgariyā　盜人　中央印度。

バーグディ族　Bāgdi　作男　ベンゴール。

バーシー族　Pāsi, Passi

上部印度及びビハールに居住するドラヴィデアンの棕櫚酒採取者の職業的カーストで、人口百數十萬に上る。往時は、この部族はオードのケリ、ハルドイ、ウナオ地方に君臨したといはれてゐる。

カーストの構成は、混合的性質をおびてゐる。中央州ではグージャル、アヒール其他の區劃に分れる。主なる副カーストは、ラージパーシス Rājpāsis カイトワース Kaithwās バヒリア Bahelia グドチャダ Ghudchadha 其他である。中央州を除いて、副カーストは多數の族外婚の氏族に分れる。

パーシー族は血族結婚を、記憶出來る範圍において避けようとする。結婚式は、花婿花嫁の二人が木のスクラーワン Scrāwan 即ち重い丸太の周りを廻るのが主要部分である。スクラーワンの無い時は、通常梨或は馬槲を代りに用ひる。式は、ヨーンド族のやうに婿の家で擧げる。その際、男の子供は娘の裝ひをして皆の前で踊る。寡婦の再婚及び離婚は許されてゐる。

パーシーは、死體を適宜に火葬或は土葬するが、子供や痘瘡その他傳染病で死んだ人は必ず土葬する。彼等はヒンヅーの神々を崇拜する。その社會的地位は低いけれども、不淨とされない。豚肉を食ひ、それでベーコンを作る。

パーシーは扇、椰、棗、棕櫚の實、棕櫚の樹液の採取を傳統的生業とするが、又狩獵、捕鳥及び農耕にも從事する。このカーストは强烈な犯罪者的性癖をもち、多數の職業的盜人を包括してゐるといはれる。文盲、貧困、飲酒耽溺がこのカーストの生活的特徴であるといはれてゐる。

パールヴト族 Pātharvat 石工 デッカン地方。

パーヅィガル族 Bazigar 輕業師その他 パンジャブ。

パーティアー族 Bhatiā 商人 西印度。

パート族 Bhāt 吟誦師・系譜師 上部及び西部印度。

パートニー族 Pātnī 漁者 ベンゴール。

パートラー族 Pātrā, Patōr 行商人 オリッサ。

パートラーヅ族 Bhātrāzu 吟誦師・系譜師 テリンガーナ地方。

パーナン族 Pānan 巫術師 マラバール地方。

パーニサヴン族 Pānisavan 行者 タミール地方。

バームヒー族 Bāmbhī 靴工 ラジプタナ。

ハーリー族　Hāri, Kaōrā　掃除屋　ベンゴール。

バーリー族　Bāri　檳榔樹及葡萄樹栽培者　上部印度。

バールディー族　Pārdhi　捕鳥者其他　デッカン地方。

バーヴリヤー族　Bāvariyā　捕鳥者其他　パンジャブ及びアグラ。

バーンカー族　Pānkā, Pān　織工　中央州。

バーンド族　Bhānd　道化師　パンジャブ其他。

パイク族　Paik　椶櫚酒採り　カナラ地方。

バイティー族　Baiti　石灰製工　ベンゴール。

バイラーギ族　Bairāgi　行者　北部及中部印度。

バウサール族　Bhausār　暦師　西印度。

バウリ族　Bauri　作男　ベンゴール。

ハジャーム族　Hajam　回教床屋　一般。

バターリー族　Pathāri　山地部族の司祭者　中央州其他。

ハッディー族　Haddi　掃除屋　オリッサ。

バットヌールカーラン族　Pattunūrkāran　絹織工　タミール地方。

バティアーラー族　Bathiārā　料理人　西パンジャブ。

バトヴェ族　Patve　絹織工　上部及中部印度。

バニアー族　Banyā, Bāni, Vāni, Mahājan, Seth, Sāhukār

これは南印を除く到る處にみられる銀行家、金貸、穀物、凝乳、食料品香料を取扱ふ商人のカーストである。人口は三百數十萬に上つてゐる。バニアーの名稱は、梵語のヴニイ Vanij（商人）より出た。西印度ではヴニアー或はヴーニ Vānia or Vāni といはれる。尙バニアーはまたマハージャン Mahājan（大人）セト Seth（大商人、大資本家）の尊稱を以て呼ばれる。また金貸と關聯してサーフカル Sāhukār（正直者）ともいはれる。

バニアー族はアーリアン再生族の第三位にあるヴイシャ族を代表し、ブラーマン、ラージプウト兩族に次ぎ、他のあらゆるカーストの上に位する。バニアーは皆聖紐を身につけ且つ他カースト以上に肉食といふ肉食はすべて禁斷する。食事の規則は特に嚴重である。

社會組織　バニアー族は多數の族內婚の集團即ち副カーストから成つてゐる。副カーストの名は大部分土地の名からとり、夫々はつきりした職業と社會的地位をもち、從つてその間にも高下が認められる。副カースト中重要なものはラージプウト系といはれ、小副カーストは主として移住によつて出來たものである。これらの副カーストは、またヒンヅー教、ジャイナ教の兩派に分つことが出來る。大抵の副カーストは、族外婚の組織をもち、多數の分族、少くとも十二の分族に分れ、各分族は更に小分族に分れてゐる。分族はブラーマン聖者、小分族には土地の名がつけてある。

婚制　バニアーの男は、自分の屬する小分族或は母方、祖母、大祖母の小分族から妻をめとることは出來ない。男女系共五等親內或はそれ以上の等親內の結婚を避けてゐる。一般に家族內の娘の交換や二人の姉妹と結婚することを禁じてゐる。

婚約には、ある副カーストの間では息子の父親が娘の家へ行つて、彼女に黃金の頸飾或は銀貨か珊瑚と銀の指輪を贈る。その式は村の寺院で行はれ、カースト仲間の者が兩家のものに薑黃をふりかけ水をかける。結婚式の前にベナイキの儀式 Benaiki が行はれる。これは、花婿が馬に乘り、花嫁は裝飾した椅子に倚つて村々を練り、彼等の友人や親族に別れの挨拶を述べるのである。マールワーリ・バニアー Mārwāri B. は、結婚の際マンゴーの葉を結んだ絲を家の戶口の上に絡げ、また戶の上に雀が止つてゐるといふ意味で三角の木形を結び半年の間そのまゝにしておくといふ。

結婚式の主要部分は、結婚壇或は結婚標の周りを花婿花嫁が七回廻ることである。ジャイナ教徒の間では、婿が木標の傍に立つてゐる周りを嫁が七回廻り、婿は一廻りする度毎に彼女に砂糖を投げる。式後新夫婦は、夫の勘定を主とする職業を表すため、眞鍮の板にふりまいた小麥粉の上に數字を描き出す。さうして花嫁の家ではこの際、式に列席した外來者には一日分として十分な量の生の食物を與へ、またカーストの各成員には二日乃至五日間の食糧を與へるのが慣習となつてゐる。しかもこの他に夜の饗宴が待つてゐる。時折式は八日間續くこともある。從つて、大量の砂糖その他の生活物資を要し、これに伴ひ結婚費用が尨大な額に達するのは極めて當然である。彼等の間には多數の客を呼べば、それだけ主人の社會的地位が向上するといふ通念が存在する。バニアーの間では多妻婚は極めて稀である。寡婦の再婚は名目上禁ぜられてゐるが、實際は行はれてゐる。唯、再婚した寡婦は、夫々の副カーストにおいて社會的地位のより低い集團に移される。離婚は許されない。姦通のため、家から出された女はより下級の集團に避難することが出來る。

宗教　バニアーは、死體を荼毘に付し、骨灰は聖河或はどこかの小川に投げ入れる。子供や傳染病で死んだ人は土葬する。服喪期は奇數日間である。

彼等はジャイナ教やヒンヅー教のヴィシヌ派を信奉する。ジャイナ、ヴィシヌ兩教派共殺生に反對し、幸運・富・繁榮の神ガネシュ神卽ちガンパティ神 Ganesh, Ganpati を崇拜する。象はヒンヅーの聖獸であるが、バニアーの間では象を所有することは富と名聲の徽である。ジャイナ教徒も大軍車祭 Great Chariot Festival には神々の車を象に牽かせる。またガンパティ神の妃神ガウリ Gauri は豐穰の表徵として崇拜される。

バニアーの主要な祭儀たるディワーリ祭 Diwali は、富の神ラクシュミ Lakshmi と共にガンパティ神卽ちガネシュ神を崇拜する祭である。二月のホリ祭 Holi には、マールワーリス副カーストのものは、ナートゥ・ラーム Nathu Ram といふ素泥の像を作る。そしてこれを嘲弄し泥を打つけ靴で蹂み、種々冗談を言つたり惡戲をする。

社會慣習　バニアーは食事について非常に嚴格である。凡ゆる種類の肉食及酒精飲料をさけ、純然たる菜食實行者であるが、玉葱や韮は不淨食としてとらない。煙草は、ジャイナ教徒は禁ぜられてゐるが、ヒンヅー教徒は喫む。女も時折噛煙草を噛む。バニアーの食事は簡單で、以前は晝晩の二食であつた。

衣服もまた單純で、長い白色の上衣と腰布といふ正統ヒンヅーの服裝である。唯バニアー得意の裝身具として銀のバンドを締める。マールワーリス副カーストの富裕な者は特別の祭儀の場合、高價な寶石類を着ける。彼等は頭に小さく堅くまいた赤・黃・淡紅色等のターバンをのせてゐる。綠色のターバンは服喪のしるしとされてゐる。

生業・性質　バニアーは最初極めて些少の元手を以て村落で穀物の小賣を始め、異常な忍耐で利殖した結果、次に衣服類を賣り出し、最後に金貸業に轉換し、高利になり峻嚴に取り立て富を作るのが常道であつたといはれる。古諺にバニアーが一ルピー得れば、一月に八ルピーの收入を得るとあるやうに、彼等は利殖の道に巧みで、方法も徹底してゐる。村落の農耕者には彼等から金を借りて苦しめられるものが現在に至るまで少からずある。金儲のために手段を選ばず、農耕者の文盲を利用し田畑財產等を籠絡した事例も乏しくないといふ。

バニアーは幼時から金を儲けることを人生の目的のやうに考へ、そのために無私の努力を續けて來てゐるので、極めて實利主義的である。一般に貧乏人の取扱ひには不親切、不正直といはれてゐる。しかし、バニアーは地方農村經濟機構の上からは不可缺の存在である。また一般に、對人態度は愼重、正直であり、金についても絕對に信用が措けるといふ見方もある。彼等は概して溫和しい、穩かな人達とみられてゐる。

バフルーピヤー族　Bahurūpiyā　道化師　パンジャブ及上部印度。

バヘーリヤー族　Bahēliyā　捕鳥者　パンジャブ。

バラーイー族　Bhārāī　社祠司祭者　パンジャブ。

バラーイー族　Barāī　檳榔樹及び葡萄樹栽培者　南印を除く一般。

バラーヒー族 Balahi　織工　ラジプタナ其他。

パライヤン族 Paraiyan

パライヤン族はクールグ、コチン、トラヴンコール、マドラス州各地方にみられる村僕、農業勞働者の大カーストで不可觸賤民とされてゐる。一九三一年、一、二〇〇、一三五人を算する。原住民キリスト教徒の大部分はこのカーストである。パライヤン族自身は、嘗ては印度の他地方において高い獨立的な重要地位を占めてゐたと信じてゐる。パライヤン族の由來について定說はないが、パライヤンの酋長がチャウリ（蠅扇）をもつて神と共に象に乘り、過去の特權と地位を示すものがあるといはれる。またトリチノポリ地方のパライヤンは、シヴ神殿に仕へたさる由緒あるブラーマン僧の裔と稱してゐる。しかし既に長年月に亙つて、現住地方に定着、地方の古事を知つてゐる點では他に及ぶものがない。それ許りでなくとゝからセイロン、マウリティウス、南アフリカ、西印度諸島、馬來、フィージー島其他に發展してゐるパライヤンも少くない。

社會組織　パライヤン族は四百に垂んとする多數の分團に分れる。各分團は慣習、生活方法を異にしてゐる。彼等の村落において少數の重要なパライヤンは、パナッカーラン Panakkaran といはれ、委員會乃至會議體の機關を構成し、喧嘩の仲裁、結婚、姦通其他の社會的事件を處斷する。その際輿論をあく迄尊重する解決法を採用するといふ。パナッカーランの地位は世襲である。尙パライヤンの司法權は、デーサーイ・チェッティス Désayi Chettis が握つてゐる。デーサーイ・チェッティスは各村に代表を派遣し、時にはパナッカーランを任免する權利をもつといはれる。

婚制　パライヤンの女の間では、娘が年頃になるのは、待ちに待つてゐた好奇事である。彼等には月の物は、おそろしいものと考へられ、月經時の娘には細心の注意を拂ひ憂慮する。一般に月經時の娘を隔離したり、淨めたりするのは、もとパライヤンの女にみるやうな心理的經過に起因するものと思はれる。

パライヤンの間の結婚では、宗教の相違など問題とならない。キリスト教徒のパライヤンは異教徒の娘と、結婚後改宗するとの條件で結婚する。一般に花婿は花嫁より年長でなければならぬといふので、男は父の姉妹の娘或は母の兄弟の娘と結婚する。婚約は大抵娘の成人後なされるが、娘には絶對選擇權は與へられない。結婚の際、兩家は衣服、米、野菜、つまらぬ寶石類、少額のルピー貨を交換する。式は非常に簡單で、主要部分は花婿が小さい裝身具を花嫁の頸にかけてやることである。式後、兩家の人達に親族等を加へ、饗宴が次ぎつぎに行はれ二三日續く。婿と嫁は式後直ちに同棲せず、嫁の母がその日を決める。多妻婚は一般に行はれない。寡婦の再婚は許され、それについても特別の制約はない。

宗教　パライヤンは名目上はシヴ派或はヴィシヌ派を信奉する。しかし眞實は惡靈崇拜者といはれる。ヒンヅーの儀式は一應行つてゐるが、內實その教義や慣習に影響されてゐない。彼等は至上の、全智全能の人格的靈的存在をカダヴル Kadavul と呼び、一切物の本源となしてゐる。カダヴルは寺院に於ては崇拜されないが、パライヤンの思想中最高に位する觀念である。またパライヤンは三級に分れる諸母神をコンニグヤムマー Konnigyammā（諸處女の意）といつて、一團として崇拜する。これらの諸母神は七つの石或は煉瓦を以て象徵し小さな

圍ひを作つて中に置いたり、また村落或はマルゴサ樹の下に小壇をつくつておくとか、或は小さな煉瓦造りの寺院の中に安置してゐる。尚グライナ・デーヴタ (Graina Dēvata) といふ母神をも崇拜する。前述の種々の母神の名は非常に多く、各村落では自村の母神は他村の母神と同一でなく、夫々姉妹であると考へてゐる。母神は、住民、土地の守護者、恩施者として崇拜され、その神々の階級に應じ決められた祭儀、行事が行はれる。

パライヤンは、また多くの幽鬼、惡鬼及び化物の存在を信じ、これらの宥和につとめてゐる。タミール地方のパライヤンの間には、殆ど各村に聖職を掌るヴルヴン Valluvan と呼ばれる數家族がある。ヴルヴンは實際上、パライヤンの神事を掌握し、一般の尊敬を得てゐる許りでなく、巫術力をもつてゐるためブラーマンからさへ尊敬されてゐる。

しかし、パライヤンの間にはキリスト教の進出も著しい。パライヤンのキリスト教徒は土着民キリスト教徒のカーストを形成してゐる。

文身其他　死體は概して土葬にするが、時折火葬にする。

パライヤンの女は兩腕と胸に、子供（男女）は額に線を描く。ローマン・カトリック教徒となつたパライヤンは、時折「十」字の模樣を文身する。

彼等は扇棕櫚、棕櫚の葉を木柱や竹材の骨組につけた許りの粗末な小家に住んでゐる。もつと上級な家屋になると、泥壁と茅屋根をもつた扉のない低い構造で、小さい裏庭がある。

社會的地位　パライヤンは不可觸賤民に屬し、食事、住居その他あらゆる方面において差別的待遇をうけてゐる。彼等は他カーストの井戸から水をくむことを許されず、自身の住居の近くにある特別の井戸からくむ。その井戸の周邊に動物の骨を置き、他カーストのものが彼等に物言ふ場合、口に手をあて、彼等の呼氣で汚されぬやう心掛けねばならない。パライヤンは大道で誰かに會つた時は橫道に避けて通ることになつてゐる。彼等はブラーマンに會つてはならない。

生業・性質　パライヤンの大多數は農業勞働者である。中には土地をもつものもある。また村僕となり、墓穴掘り、見張り番、掃除屋等一般に下賤と謂はれる職業に從事するものも少くない。彼等の性質についてコルニシュ W. R. Cornish は、働き好き、儉約屋、享樂好きと指摘してゐる。マドラス州では彼等の間に犯罪者が多いので著名である。しかしパライヤンのキリスト教徒は教育に熱心であり、知識の向上には見るべきものがあるといはれてゐる。

ハラバー族　Halabā　作男　中央州の東部及び南部。

バラン族　Pallan　作男　タミール地方。

パリ族、ヴニヤン族　Palli, Vanniyan, Agnikula

パリ族は南印タミール地方を中心に見られる農耕者のカーストで、人口二百六十萬以上である。このカーストの名稱は梵語のアグニ或はヴニ Agni or Vahni (火) より出た。このカーストは或はクシャトリヤの一族といひ、或はパラヴ族 Pallava と深い關係があり、南印に榮えたことがあるといはれる。とにかく、往時は南印部族中に